

ART PLATFORM JAPAN

A Platform for Contemporary Japanese Art

文化庁アートプラットフォーム事業報告書

令和5(2023)年3月
文化庁アートプラットフォーム事業 事務局
国立新美術館

目次

はじめに	4
1 「文化庁アートプラットフォーム事業」の意義	5
2 Art Platform Japan ハイライト	6
3 現代アート政策における文化庁のこれまでの取り組みとアートプラットフォーム事業	8
4 本事業の背景	18
5 文化庁アートプラットフォーム事業概要（2018-2022年度）	20
6 Programs「国際的な専門家の相互ネットワーク構築」事業	21
7 Readings「国際的な評価を高める上で重要なテキストの国際展開」事業	31
8 SHŪZŌ「収蔵情報の可視化」事業	39
9 その他事業	
日本現代美術展調査	43
日本の画廊調査 1945年以降	44
日本のアート市場調査	46
海外文化芸術支援組織調査	48
公的機関による造形芸術の国際的なプロモーションに関する比較調査	48
国際展に招聘された作家への支援	49
シンポジウムの開催	53
対談企画	63
10 ウェブサイト	65
11 事業広報	73
12 運営	74
主なスケジュール・操舵組織（2018-2022年度）	78
ワークショップのプログラムおよび参加者	94
オンライン出版された新訳文献リスト	116
海外出版	134

凡例

- ・本報告書は、平成30（2018）年度-令和4（2022）年度に実施された文化庁アートプラットフォーム事業（平成30年度は「アート市場活性化事業」）が推進したプログラムをまとめたものである。
- ・関係者の肩書きや所属等は開催当時のまま記載した。

本報告書は、「文化庁アートプラットフォーム事業（英語表記：Art Platform Japan）」が五ヶ年にわたり検討・実践を進めてきた取り組みをまとめたものである。本事業は平成30（2018）年度の「アート市場活性化事業」に始まり、翌年度以降「文化庁アートプラットフォーム事業」へと事業名称を変え、日本における現代アートの持続的発展を目指し、現代アート関係者の意見を幅広く集約し、日本人及び日本で活動する作家とその作品が国際的な評価を高めていくための取組等を推進してきた。

ステアリングコミッティーとして「日本現代アート委員会」を設置し、文化庁からの委託を受けた国立新美術館が事務局を運営し、アートプラットフォームの形成につながる以下の取り組みを継続して実践することを通して、日本におけるアート創造活動の活性化と持続的な発展の実現を目指すものである。

1 国際的な専門家の相互ネットワーク構築

実践的な調査・研究を進めるために欠かせない国際的な専門家の相互ネットワーク構築のための招待制ワークショップ（文化庁現代アートワークショップ）を2018年度から毎年開催（新型コロナウィルス感染症拡大に伴い、2020年度はウェビナー形式で開催）。国内外の様々な情報源や人とのつながりを強化し、国際発信に必要なネットワーク拡充を推進。

2 国際的な評価を高める上で重要なテキストの国際展開に関する取組

日本の現代アートの国際的な評価を高めることにつながる研究を喚起するため、特に需要が高いと考えられる戦後美術を対象としたテキスト（単行本、評論、学術論文、カタログ寄稿文等）の翻訳、海外での出版やウェブサイトでの公開等を推進。

3 収蔵情報の可視化に関する取組

国内外の専門家が展覧会を企画する際に必要となる情報・資料の国際的な共有財産化に向け、日本全国の美術館に収蔵されている作品情報等に横断的にアクセスできるデータベースを構築し、全国の美術館の収蔵作品情報の可視化を実現。また、海外の専門家から頻繁に指摘されている「日本のアートに関する情報にアクセスすることが難しく、知りたくても手がかりが

ない」という状況を改善すべく、日本における現代アートに関する情報を、海外プロフェッショナルに向けて国際的に発信するウェブサイトを構築。

4 その他の取組

日本における現代アートの国際的な評価を高める上で必要な調査研究（国内外の現代美術展や戦後ギャラリー調査、日本の美術市場調査等）の実施、国際的な評価を高める上で重要な機会を得た作家への支援や国際シンポジウムの開催など、上記3本柱と連動し、日本における現代作家の国際発信を戦略的に推進する取組を実施。

これらの取り組みは概ね順調に推進してきたが、コロナ禍等の影響もあり、当初の予定から活動が変化したところもある。また、喫緊の課題に対しては、幅広い専門家による議論を密に重ねたことで臨機応変に推進することができた。本報告書が単なる事業の記録資料となるにとどまらず、現代アートに関わる方の道標の一つとして広く活用されることを願う。

最後に、これまでのアートプラットフォーム事業の活動を支えてくださった全ての関係者の皆さんに、この場をお借りして心より御礼を申し上げたい。

2023年3月

文化庁アートプラットフォーム事業 事務局

1 「文化庁アートプラットフォーム事業」の意義

2014年10月に「現代美術の海外発信に関する検討会」が取りまとめた「論点の整理」は、我が国の現代美術の価値をグローバルな観点から向上させるための多角的な課題整理と提言によって構成されており、海外発信に限定されない課題にも多く触れている。具体的には、①主要な研究・評論・論文などの翻訳、②日本の現代美術に関する情報へのアクセシビリティ向上のためのアーカイブ技術研究、情報収集・発信、③主要国際展やアートフェアにおける日本人作家の発信、④日本発の現代美術展の海外巡回、⑤我が国の展覧会情報や作家に関する情報などを一元的に発信するためのホームページ、⑥海外発信に向けた作家支援、⑦諸外国の美術関係者との顔の見えるネットワークの構築といった項目が挙げられている。

2018年度に発足した日本現代アート委員会は、「文化庁アートプラットフォーム事業」のステアリング・コミッティーとして、この「論点の整理」にある課題解決に向けた多様なレベルでの対応策を五ヶ年プロジェクトとして構想し、それぞれの専門家で構成される複数のワーキンググループを中心に推進してきた。具体的には、提言①に向けた主要文献の翻訳、②・⑤に向けたホームページの立ち上げと国内美術館における日本人作家の作品データベース、⑦に向けた専門家の招待制ワークショップを継続。また⑥についても一定のモデルを試みた。2020年からの新型コロナウィルスによるパンデミックは国境を越えた文化交流を著しく限定し、招待制ワークショップは大きな影響を受けたが、それ以外の事業については推進モデルを模索しながらも着実な成果に繋げることができた。これらはいずれも極めて優れた専門性、緻密な調査、持続的な実施や更新が求められる、アート振興のインフラストラクチャーとも言えるものであり、即効的な収益に繋がらないという意味でも、文化庁のプロジェクトとして必要不可欠なアクションであったと考える。

「文化庁アートプラットフォーム事業」で整備したこれらのインフラストラクチャーは、2023年3月28日に発足した国立アートリサーチセンターへ承継される。同センターでは、上記「論点の整理」で提言されながらも「文化庁アートプラットフォーム事業」では未対応であった項目③・④も含め、さらに国内美術館の機能強化も目指しながら、日本のアート振興の次なるステージへ向けての活動を進めることとなる。「文化庁アートプラットフォーム事業」の働きが、我が国のアートの持続的な発展のための礎と

して、今後もますます活用・更新されていくことを願っている。

五ヶ年の「文化庁アートプラットフォーム事業」推進に際し、主体的かつ持続的に貢献いただいた日本現代アート委員会の委員各位、各プログラムに参加・助言・支援等をいただいた国内外の専門家の方々、そして本事業の推進にご尽力いただいた各分野のスペシャリストの皆さんに、心からの感謝を申し上げて総括とさせていただきたい。

令和4年度 日本現代アート委員会 座長
片岡真実

2 Art Platform Japan ハイライト

「文化庁アートプラットフォーム」の事業成果は、日英バイリンガルウェブサイト「Art Platform Japan (略称 APJ)」にて公開している。

2023年3月末時点

Works	Readings	Workshops
161,021 日本全国の美術館に収蔵されている作品情報の公開数	69 日本の現代アートの国際的な研究喚起のために選定・英訳した文献および既訳文献の公開数	146 国際的な専門家の相互ネットワーク構築のための招待制ワークショップに参加・登壇した人数
Images	Artists	Museums
13,354 作品画像が掲載されている収蔵品数	2,520 日本の文化芸術の発展に寄与した明治以降の作家の基礎情報	163 SHŪZŌに収蔵品情報が収録されている美術館数
Exhibitions	Galleries	Website
2,399 国内外の美術館等で開催された日本に関する展覧会情報	2,409 1945年以降に活動した日本の画廊情報	17,654 2021年9月22日-2023年3月5日の新規ユーザー数(統計情報取得に同意した利用に限る)
Support for Artists	Conversations	Symposia
17 国際的な評価を高める上で重要な機会を得た作家への支援回数	5 APJが取り組んできた成果や今後の展望について語る対談企画	8 五ヶ年にわたり一般向けに開催したシンポジウムの開催数

English / 日本語

ART PLATFORM JAPAN

日本現代アートの情報プラットフォーム

[プログラム](#) [研究資料](#) [APIについて](#) [ニュース](#)

全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」

④ 全国の美術館に収蔵されている美術品情報を検索 161021

文献資料

④ 日本現代アートの新訳文献を読む

リサーチプロジェクト:日本現代美術展調査

④ 日本現代美術の展覧会を検索 2,150+

プログラム

④ アート・プロフェッショナルのための国際ネットワー
キング・プログラム

最新のプログラム

2023年2月23日

日本のアート振興のこれ
かがく:5年を振り返り今後
を考える

Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop

過去のプログラム

2022年12月7日

Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop:翻訳と出版プロセ...

2022年11月15日

Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop:Translating Art ...

2022年9月23日, 24日

文化庁現代アートワークショップ:アーカイブ動画公開

Art Platform Japan ウェブサイト

3 現代アート政策における文化庁のこれまでの取り組みとアートプラットフォーム事業

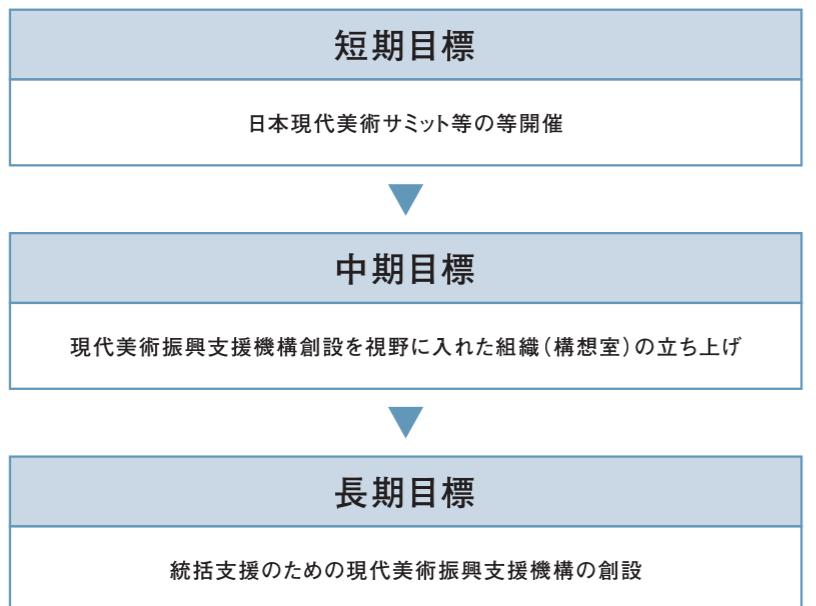
フェーズ	年度	文化庁の取り組み	APJの取り組み
Phase1	平成 23 (2013) 年度	・次年度概算要求に現代アート関係予算を初計上	
	平成 26 (2014) 年度	・現代美術の海外発信に関する検討会「論点の整理」 文化庁内で初めて現代アートについての課題を整理。 長期目標として、統括支援のための現代美術振興支援機構の創設を明記。 ・海外国際フェスティバル参加出展等（補助金）計上	
	平成 27 (2015) 年度	・現代アート国際シンポジウム開催費（委託費）計上 ・現代アート国際展開調査研究費（委託費）計上	
	平成 29 (2017) 年度	・文化経済戦略策定 / 次年度予算にアート・エコシステム関係予算計上	
Phase2	平成 30 (2018) 年度	・「文化庁アートプラットフォーム事業（五ヶ年計画）」実施 これまで弱かった「世界に日本の現代アートの評価向上」に取り組み、我が国におけるアート・エコシステムの形成に資することを目的に開始。	<ul style="list-style-type: none"> ・国立新美術館に事務局設置（5月） ・日本アート創世委員会、収蔵情報活用分科会、発信強化分科会の3つの検討組織を組成（9月～） ・シンポジウムの開催（11月、3月） ・「文化庁現代アートサミット」の開催（3月東京） ・翻訳文献の選書開始、『肉体のアナキズム』の英訳決定 ・「共同利用機関『美術品総合デジタルアーカイブセンター』の設立（提言）」を作成 ・『全国美術館会議会員館収蔵品目録総覧 2014』を基礎情報とする方針を決定 ・「日本の美術館における現代美術展 - 開催記録とその展覧会カタログ一覧（1953年-2018年）編纂：中島理壽」公開（3月） ・「日本のアート産業市場レポート」公開（3月） ・海外調査の実施（LA（2月）、香港（3月））
	令和元 (2019) 年度	・現代作家の国際発信の推進（委託費）計上	<ul style="list-style-type: none"> ・日本現代アート委員会の組成・運営（4-3月） ・各事業のワーキンググループを組成・運営（4-3月） ・ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展出展作家支援（5月） ・シンポジウムの開催（9月） ・「文化庁現代アートワークショップ」の開催（11-12月 大阪・京都） ・翻訳文献の選書にあたり、3テーマを決定 ・論文の英訳開始、3本完了 ・書籍『肉体のアナキズム』の英訳開始 ・ウェブサイトの構成の検討を開始し、3本柱構成とする方針に ・収蔵品・作家データベースに関し、サンプルのデータを収集し、データベース、公開システムの構築と編集方針を決定

Phase2

		<ul style="list-style-type: none"> ・戦後ギャラリー史調査の実施 ・戦後現代美術展カタログデータベースの整備 ・海外調査の実施（NY（5月）、シンガポール（11月））
令和2（2020）年度	<ul style="list-style-type: none"> ・文化審議会文化政策部会アート市場活性化ワーキンググループ報告書 文化審議会における議論の俎上に上げ、アート振興には経済的な価値や学術的な価値だけでなく、社会的な価値を高めていく必要があることを明記。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連続ウェビナー開催（8-1月） ・英訳文献の選書にあたり7テーマを選定し、アドバイザーを設定して選書体制を確立 ・著作権許諾申請プロセスの確立 ・翻訳→クロスチェック→校閲→著者チェック→レイアウト・校正という翻訳プロセス・チーム編成の確立 ・英訳スタイルシートの公開 ・書籍『肉体のアナキズム』の英訳継続、『美術の日本の近現代史』（7-9章）の英訳決定 ・登録博物館、博物館相当施設等の各機関に収蔵品情報（管理用デジタルデータ、紙媒体の収蔵品目録、年報等）の提供依頼を開始 ・システム構築および目録入力、データ加工・編集の実施 ・「日本の画廊調査1945年以降」の調査実施 ・ウェブサイトにスタティックなデータ（収蔵品情報、文献翻訳）とダイナミック（プログラム）という二つの入口を開設することに方針変更 ・「海外文化芸術支援組織調査」の実施 ・ウェブサイト「Art Platform Japan」（ベータ版）公開（3月） ・論文10本の英訳完了、公開（3月） ・全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」（ベータ版）公開（3月） ・「日本の美術館における現代美術展-開催記録とその展覧会カタログ一覧（1953年-2018年）」（編纂：中島理壽）データベース化の開始（3月） ・「海外で開催された戦後日本現代美術展」調査のリスト公開（3月）
令和3（2021）年度	<ul style="list-style-type: none"> ・国立美術館アート・コミュニケーションセンター（仮称）に係る予算措置 国内美術館のハブとして、また、美術界全体の支援機能を担う組織へ ・文化審議会文化経済部会新設／アート振興ワーキンググループ設置 アート振興について議論する常設の会議を文化審議会の下に設置 ・独立行政法人国立美術館の中期（第5期）目標の変更を実施 アート・コミュニケーションセンター（仮称）設置に伴う変更内容等を追加 	<ul style="list-style-type: none"> ・英訳文献数の増加に伴い、体制を拡充するための翻訳・編集候補者へのヒアリング実施 ・書籍の英訳継続、海外出版社調査開始 ・リーディングリスト、既訳リストの作成開始 ・Art Platform Japanの改修、分析開始 ・SHŪZŌの収蔵品、作家、美術館情報の拡充、検索利便性の向上に向けた検討の開始 ・サンパウロ・ビエンナーレ出展作家支援（9月） ・ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ出展作家支援（9月） ・シンポジウムの開催（10月、3月） ・「文化庁現代アートワークショップ」の開催（1月福岡） ・論文13本の英訳完了、公開（3月） ・既訳文献2本を公開（3月） ・海外ウェブメディアにてAPJサイトのバナー広告出稿（2-3月） ・収蔵品サムネイル画像の試験公開（3月） ・API公開（3月） ・「日本の美術館における現代美術展」、「国外で開催された日本現代美術展」の日英データベース化と公開（3月）

			<ul style="list-style-type: none"> ・「日本の画廊調査 1945 年以降」のデータベース化と公開（3月）
Phase 3	令和 4（2022）年度	<ul style="list-style-type: none"> ・国立アートリサーチセンター（仮称）に係る令和 5（2023）年度予算要求 国際発信・連携グループを新設し、我が国における国際的な拠点機能の実現へ ※センターの仮称を「アート・コミュニケーションセンター」から「国立アートリサーチセンター」へ改称 ・国立アートリサーチセンター (英語名称: National Center for Art Research) 設立 	<ul style="list-style-type: none"> ・収蔵情報可視化事業を国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室が継承（4月） ・選書のテーマを 3 つ増やし、10 テーマを選定 ・ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展出展作家支援（4月） ・ドクメンタ 15 出展作家支援（6月） ・シンポジウムの開催（6月、2月） ・翻訳シンポジウム、ワークショップの開催（7月、11月、12月） ・「文化庁現代アートワークショップ」の開催（8月愛知） ・釜山ビエンナーレ 2022 出展作家支援（9月） ・Ars Electronica Festival 出展作家支援（9月） ・イスタンブル・ビエンナーレ出展作家支援（9月） ・バンコク・アート・ビエンナーレ出展作家支援（10月） ・コチ＝ムジリス・ビエンナーレ出展作家支援（12月） ・Artist Space 出展作家支援（1月） ・対談企画の実施・公開（全 5 回） ・『肉体のアナーキズム』『美術の日本近現代史』海外出版（2月） ・英訳論文 39 本公開（合計 65 本） ・既訳文献 2 本公開（合計 4 本） ・「日本のアート市場調査」実施

外部有識者により、日本の現代アートを取り巻く諸問題の洗い出し、論点整理を行い、今後の現代アート振興の方向性についてとりまとめた。



現代美術の海外発信に関する検討会「論点の整理」

第5章 まとめ：基金を母体とした現代美術振興支援機構の創設をめざして

1. 長期目標：統括支援のための現代美術振興支援機構の創設

日本の現代美術は、作家、研究者、キュ레이ター、ギャラリスト、美術館などの関係者・関係機関が個別に努力し支えているが、それら関係者の活動を全体的に把握し、必要な情報発信を行ったり戦略を立てて支援を行ったりする中心となる機関が存在しない。組織的に展開する音楽や舞台芸術などの活動と比べると、資金調達や、人材育成等様々な面で、限界や不都合が生じているのが現状である。こうした状況を解消し、今回の議題に上がった問題点（作品購入の促進、作家支援、現代美術に関する教育、美術館との連携・協力、情報の集約と発信、調査・研究、翻訳の推進、人材育成等）を包括的に解決していくためには、長期的には、例えば国と民間からの出資による基金を母体とすることも視野に入れた、現

代美術振興支援機構のような組織の創設を目指していくことが考えられる。その機構では、アメリカのNEA（全米芸術基金）や、イギリスのアーツカウンシル・イングランド（英国芸術評議会）のような、海外の先駆的事例を参考にしつつ、第3章、4章で述べた収蔵庫の課題や、修復、美術品の梱包に関する技術指導、アーカイブの構築運営などの業務も関連づけ、日本が、アジアさらには世界に対して貢献しうるモデルとなるような、新たな役割と仕組みを持つ組織を模索するべきである。世界の各國とどのように協力していくかということを視野に入れた、新しいタイプの支援機構のあり方を日本から発信していくべきである。

2. 中期目標：現代美術振興支援機構創設を視野に入れた組織（構想室）の立ち上げ

上述の現代美術振興支援機構の設立は長期的な課題であり、組織や運営の形態などは、新しい時代にあった仕組みを十分に検討することが必要である。これらの課題について検討するためには、我が国の現代美術分野の関係者の意見を幅広く集約し、議論を行うことができる場となる組織が存在することが望ましいが、現状において、そのような機能を有する組織は存在しない。

このため、機構創設を長期目標として目指しつつ、当面、実現に向けた検討と準備を行うため法人格を持つ、いわゆる構想室的な組織を立ち上げることが適当である

と考える。この組織においては、比較的短期間で実施が可能な情報発信とアーカイブに関する検討を行うチームと、長期的な課題について戦略を練り検討していくチームを設け、専門家の意見を取り入れながら調整・検討していくことが適当である。

また、この組織では、海外から研究者を招聘するシンポジウムや日本の現代美術に関する資料の翻訳事業などを実施していくことにより、海外の機関等とのネットワークを構築するなど、機構設立に向けた気運の醸成につなげていくことが適当である。

3. 短期目標：日本現代美術サミット等の開催

国においては、我が国の現代美術の海外発信が効果的・効率的に、また継続的におこなわれるよう、その基盤となるプラットフォームを構築していくことが必要である。このために例えば、日本の現代美術を研究している海外の研究者やキュ레이ターと日本の研究者、批評家、ギャラリスト等が一堂に会し、討論する場を設けたり、研究者等のネットワークを構築・拡大することによって、情報の交換や、研究の深化を図り、その報告書の作成等、成果を積み重ねることで、歴史的文脈の形成を図ることが考えられる。これまで海外の研究者を招聘したシンポジウムが開催されているが、いずれも小さな規模のものがほとんどであり、国主催によって全体会の他、分科会なども行うなど相当の規模のシンポジウム等を開催することが期待される。

このような活動を継続的に行なうことが、世界に向けた日本の現代美術の大きなアピールとなり、さらには関係者・関係機関の間のネットワークが形成され、展覧会を世界各国へ巡回していく下地作りにもなりうる。定期的に海外の研究者等を日本に招聘してこのようなシンポジウム等を開催するとともに、同時期に全国の美術館やギャラリーなどに対して、海外から招聘された関係者が興味を持ち、立ち寄るような展覧会やイベント等の開催を働きか

けることにより、国内の関係者・関係団体との連携や情報交換も深まることになる。このような場を通じて、全国の現代美術の関係者についても交流、連携や相互理解を深めることが期待される。また、今回議論に上がった、作家への作品制作支援や、基本文献の翻訳への助成、現代美術の海外発信のための業務に通じた人材育成の支援など、従来の支援制度の拡充についても併せて図られることを望むものである。

委員（当時、敬称略）

逢坂恵理子	横浜美術館館長
藏屋美香	東京国立近代美術館美術課長
後藤繁雄	京都造形芸術大学教授
南條史生	森美術館館長
林道郎	上智大学国際教養学部教授
松井みどり	美術批評家
宮島達男	現代美術家
宮津大輔	アート・コレクター
山本豊津	東京画廊代表取締役
山本裕子	山本現代代表

2. 主な柱

●優れたコレクションの形成と民間コレクションの継承：国内外の歴史に残ると思われる作品（未来の古典）の同時代購入と民間コレクション（私）の美術館コレクション（公）への継承により、現在及び将来の国民の資産を殖やす。どの作品が歴史に残る作品なのか、可視化を検討。

▶同時代の作家の代表作の収集／コレクターと美術館の関係強化／現代アート版文化財指定の検討等

●批評・研究の充実／アート・アーカイブの整備：作品の価値を明らかにする批評・研究の充実が不可欠。批評が活発化し、読まれる環境の創出とそれらの土台となる作家・作品の関連資料の保存・活用環境の整備が必要。

▶国際的な批評家・研究者の育成／美術館アーカイブ資料の整備／国立映画アーカイブの対象領域拡大等

●鑑賞教育の抜本的充実：鑑賞教育を表現教育とは別に独立した内容であると捉え、生涯にわたる鑑賞活動の基礎を築くと同時に、鑑賞の基本である「作品（現物）」を実際に（気軽に）見ることができる環境の整備が必要。

▶鑑賞教育が活発化しない要因の分析／日常的に鑑賞できる美術館コレクション展示の充実等

参考：文化審議会文化経済部会アート振興WG報告書（2022年文化庁）

文化審議会文化政策部会の下にワーキンググループを設置し、我が国のアート市場の活性化に向けた課題の整理と必要な政策的対応等の検討を行い、報告書をまとめた。

アート振興WG報告（概要）

1. 今後取り組むべきアート振興政策

グローバル化やアジア圏域の経済成長に伴う目覚ましいアート界の拡充に対応し、これまでとは異なる振興策が必要。自国の文化芸術に対するプライドを醸成し、アジア各地との協働という新しい世界との関係性の構築が急務。

文化庁アートプラットフォーム事業（2018年度-）を継承する組織として、独立行政法人国立美術館「国立アートコミュニケーションセンター（仮称）」が設置されることになり、これまで我が国に欠けていた「アート振興の主体」が実現する見通し。同センターの美術館振興機能の充実が望まれる。

今後は、同法人が対象領域をメディア芸術（映画、マンガ、アニメーション、ゲーム等）、デザイン、建築、ファッ

ションといった現代の文化芸術領域全般に拡大し、我が国文化の魅力（ソフトパワー）の最大化、持続的な振興システムの形成へ。

「経済的価値」「社会的価値」の向上に向け、国内にアート振興を担う人材を育て、良質な作品が支持され、国内に蓄積され、資産化していくという好循環を創り出す事が必要。そのために、日常的に良質の作品に触れられる美術館コレクションの充実と作品の価値を“言葉”で伝える批評の充実、アート・アーカイブの整備、鑑賞教育の充実が必要。

臨時委員（当時、敬称略）

大館奈津子	芸術公社／一色事務所
黒澤浩美	金沢21世紀美術館学芸部長／チーフ・キュレーター

専門委員（当時、敬称略）

加治屋健司	東京大学大学院総合文化研究科教授
片岡真実	森美術館館長
來住尚彦	一般社団法人アート東京代表理事
小松隼也	三村小松山縣法律事務所代表弁護士
千葉由美子	ユミコチバアソシエイツ
保坂健二郎	滋賀県立美術館館長（ディレクター）
宮島達男	現代美術家

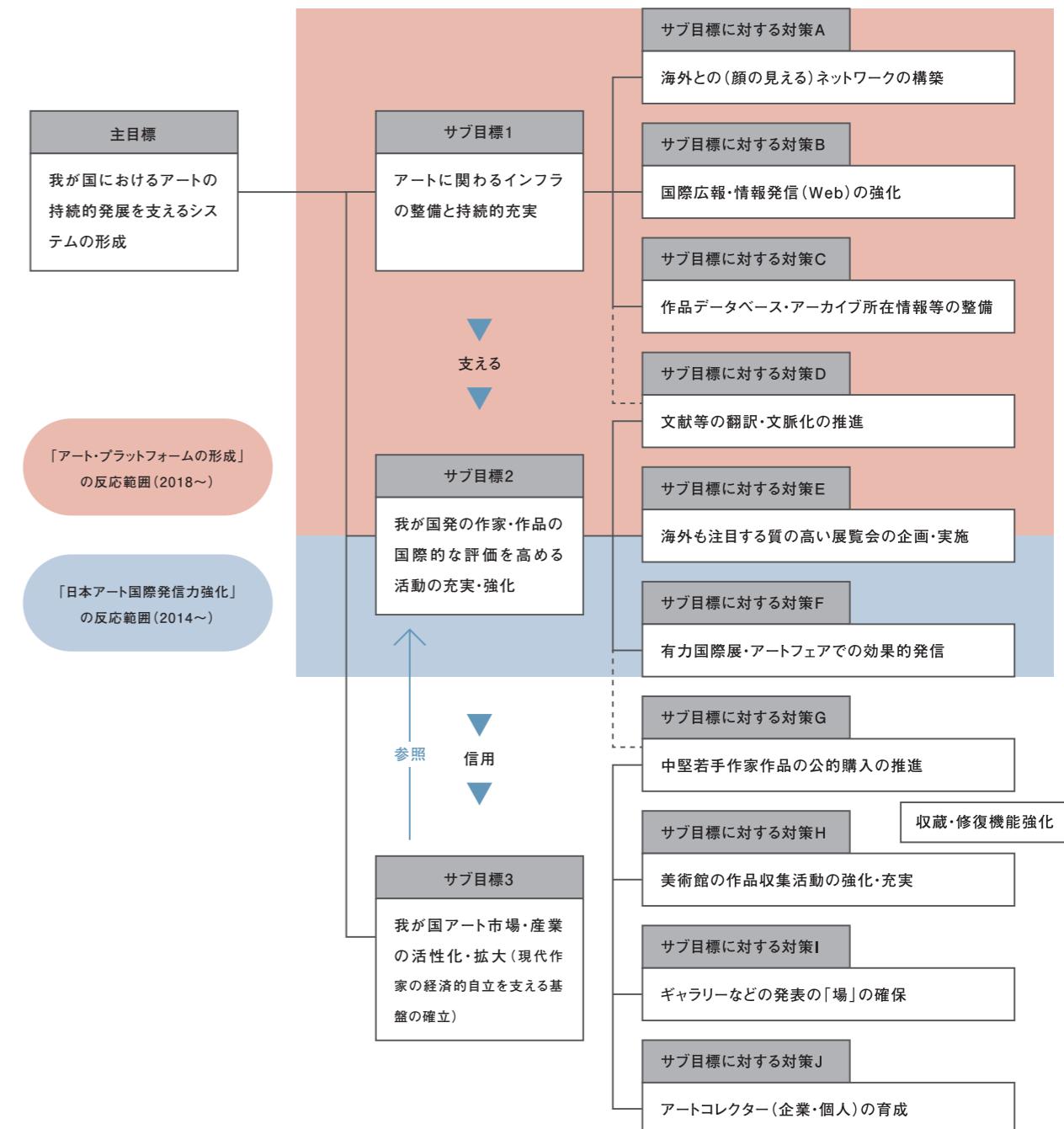
4 本事業の背景

日本はこれまで、国際的に認められる優れた現代美術家を輩出してきており、特に戦後は、欧米に次いで多数の作家と作品を重層的に生み出してきたが、日本の現代美術に対しての価値付けや評価については、長らく海外からの逆輸入という形で行われてきた。そのため、国際社会における日本の存在感の相対的な低下に伴い、現代美術も国際的に存在感を示すことが難しい状況が長らく続き、結果として、日本の現代美術作家が国際的に高く評価される存在になりえていなかった。

また、平成の30年間には現代美術の世界でもグローバル化が浸透し、美術館活動に加えてビエンナーレやアートフェアなどが世界各地で創設され、それまで現代美術を牽引してきた先進国だけでなく、経済発展の目覚ましい新興国においても多様な活動が繰り広げられるようになったことで、国際的なアートシーンにおける日本の現代アートの存在感は相対的に希薄化してしまった。

その打開策としての議論が平成25年頃に生まれ、平成26年度の日本における優れた現代美術の海外への発信を促進することおよびその効果的な方策等を検討するための会議体として、「現代美術の海外発信に関する検討会」が発足した。当該検討会での議論に基づく短・中・長期目標「論点の整理」に基づき、文化庁は平成30年度に具体的な対策検討と実施に向けて「文化庁アートプラットフォーム事業」を始動した。

目標及びその達成に向けた文化庁事業の対応状況

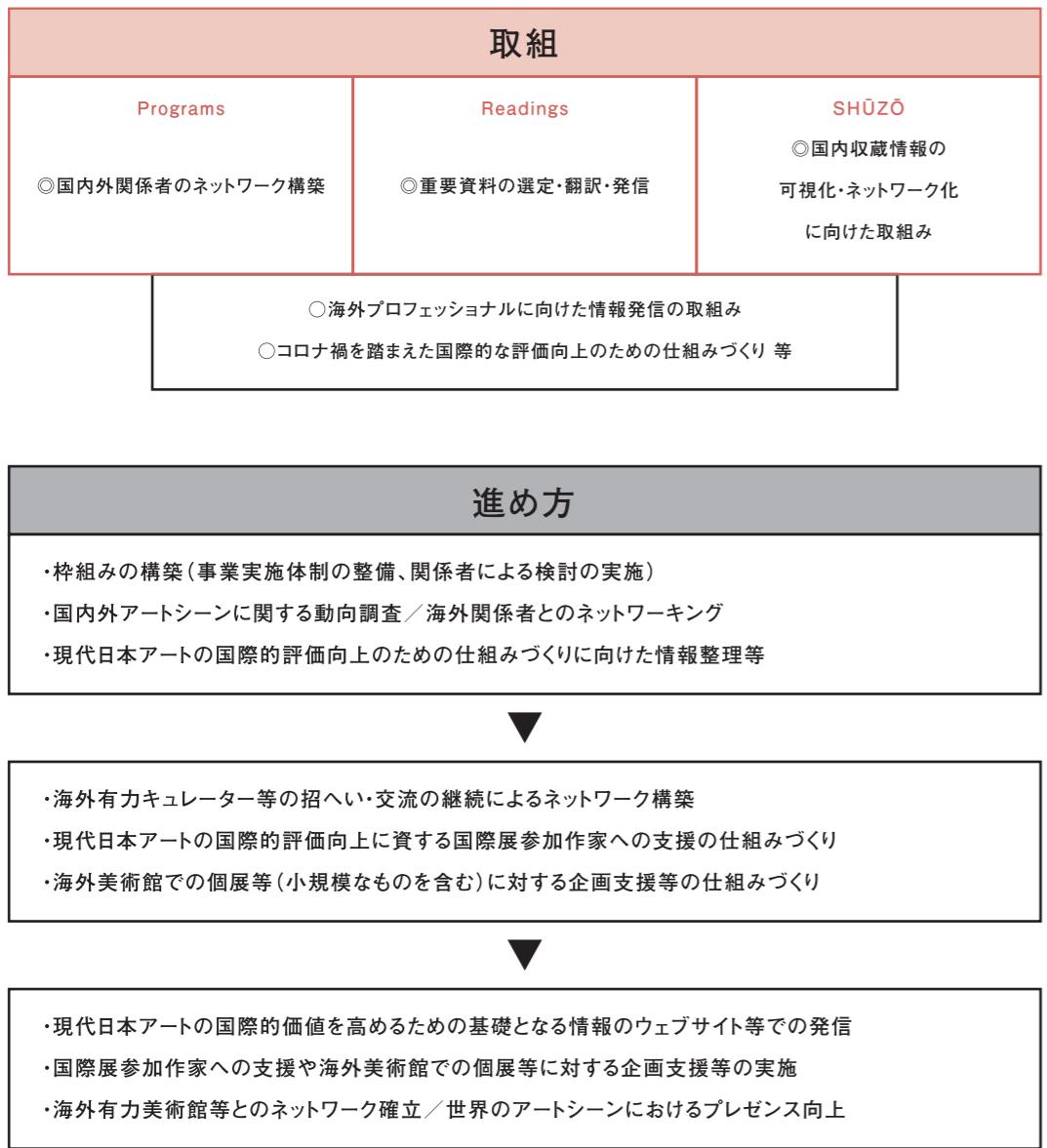


5 文化庁アートプラットフォーム事業概要（2018-2022年度）

「文化庁アートプラットフォーム事業」とはアートプラットフォームの形成につながる以下の取り組みを複合的に推進することを通じ、「世界における現代日本アートの評価向上」に取り組み、日本におけるアート・エコシステムの形成に資するとともに、日本におけるアート創造活動の活性化と持続的な発展の実現を目指す。

す。ステアリングコミッティーとして現代アート分野の専門家による「日本現代アート委員会」を設置し、その意見を取り入れながら、複合的かつ中長期的な戦略を調整・検討するとともに機動的な実践を進めてきた。

事務局 国立新美術館（逢坂恵理子館長）



（文化庁資料より）

6 Programs

「国際的な専門家の相互ネットワーク構築」事業

国際的な専門家による相互ネットワーク構築のための招待制ワークショップ（文化庁現代アートワークショップ）および連続ウェビナーを毎年開催。本プログラムを通して、国内外の様々な情報源や人とのつながりが生まれるとともに強化され、国際発信に必要なネットワークの拡充を目指す。2020年度は連続

ウェビナーとして実施。参加者同士の深い議論を通して、日本における制作を取り巻く環境やその認知度および受容の状況に加え、海外発信を文化政策の一環としてしていく際の課題や、国境を越えて議論されている重要な問題についても掘り下げるプログラム。

文化庁「現代美術の海外発信に関する検討会」の指摘

海外とのネットワークの構築

- ・海外の鑑賞者や研究者の求めている日本の現代美術についての情報、例えばまとまって作品が見られる場所はどこか、あるいはどのような関連文献が何処にあるのかなどの要望に対して、十分に応えられていないのが日本の現状である。
- ・日本の作家の海外における活躍を支援し、相互に情報を共有するためには、諸外国の美術関係者といわゆる顔の見えるネットワークを構築することが重要である。

- ・国においては、我が国の現代美術の海外発信が効果的・効率的に、また継続的におこなわれるよう、その基盤となるプラットフォームを構築していくことが必要である。このために例えば、日本の現代美術を研究している海外の研究者やキュレーターと日本の研究者、批評家、ギャラリスト等が一堂に会し、討論する場を設けたり、研究者等のネットワークを構築・拡大することによって、情報の交換や、研究の深化を図り、その報告書の作成等、成果を積み重ねることで、歴史的文脈の形成を図ることが考えられる。

これまでの課題

- ・専門家が必要とする情報に対する英語によるアクセシビリティが低く、一部の個人的なネットワークに依存している
- ・海外で作品・作家の紹介につながる国際的なネットワーキング構築や調査の機会が少なく、また資金面の支援も不足している
- ・美術館・大学等の研究機関の発信力（英語力・ウェブサイト等）に必要な人的・資金的リソースが不足しており、サポートも少ない

ワークショッププログラム：日英二言語での継続的な開催

実践的な調査・研究を進めるために欠かせない国際的な専門家ネットワークの構築

展覧会の開催や国際的な研究成果の発表へ

日本発の作家・作品の国際的評価が向上
▶ 世界市場でも正当な評価
▶ 国内アート市場も反応・活性化・拡大 ⇒日本におけるアートの持続的発展を支えるシステム形成へ

文化庁現代アートワークショップの概要(2018-2022)

2018 東京	2019 大阪・京都	2020 ウェビナー	
日程：2019/3/19-3/21 会場：アカデミーヒルズ 国立新美術館 国内参加者：10名 海外参加者：12名 国内登壇者：10名 海外登壇者：5名 キーノート：2名 委員：10名 公開プログラム参加者：269名	日程：2019/11/29-12/1 会場：国立国際美術館 京都造形大学 国内参加者：8名 海外参加者：13名 国内登壇者：5名 海外登壇者：1名 委員：8名 オブザーバー：13名	日程：2020/8-2021/1 会場：ウェビナー(全5回) 国内登壇者：7名 海外登壇者：8名 委員：5名 ライブ視聴者：1231名/5回 見逃し配信視聴者：1156名/5回	
2021 福岡	2022 愛知		
日程：2022/1/28-1/30 会場：福岡アジア美術館 国内参加者：21名 国内登壇者：9名 海外登壇者：3名 委員：9名 オンライン視聴者：1052名	日程：2022/9/23-9/25 会場：愛知芸術センター 国内参加者：17名 海外参加者：1名 国内登壇者：8名 海外登壇者：6名 委員：10名 オブザーバー：2名 オンライン視聴者：1588名		



*スケジュールおよび参加者リストは巻末P94～

2018年度

人材育成および人的ネットワーク構築のための国際ワークショップ「日本現代アートサミット2019」(翌年度から「文化庁現代アートワークショップ」にプログラム名を変更)を東京で開催し、国内および欧米、アジアの主要美術館において企画決定に関わるキュレーター、日本現代美術に关心を持つ研究者を招聘し、3日間にわたって、日本現代美術の海外発信の可能性について議論した。

第一回目の開催となる2018年度のプログラムでは、新しいテクノロジーを採用した作品からパフォーマンスやソーシャリー・エンゲイジド・アートといった非物質的な表現まで、その概念を拡張させている世界各地の現代美術の現状を俯瞰し、そのなかで一国家の現代美術を言説化することの今日的意義、さらには国の枠組みを超えたトランスナショナルな美術史の解釈や共同研究の可能性などを議論。

本プログラムの成果を踏まえ、3-5年程度の間に解消されるべき課題として、次の3点が共有された。

- (1) 日本人作家の作品・資料に関する情報および文献に関する情報といった専門家が必要とする情報について、英語によるアクセシビリティが低く、既存の一部の個人的なネットワークに依存している。
- (2) 海外で作品・作家の紹介につながる国際的なネットワーキング構築や調査の機会が少なく、また資金面の支援も不足している。
- (3) 美術館・大学等の研究機関の発信力（英語力・ウェブサイト等）に必要な人的・資金的リソースが不足しており、サポートも少ない。

海外の美術関係者からの日本現代アートへの関心は低くないものの、他の文化的先進国に比して上記の3点で後れを取っているために国際的なアートシーンにおける日本の現代アートのプレゼンスが低いことが改めて浮き彫りとなり、アートプラットフォーム事業が今後進むべき道筋が示された。

日本現代アートサミット 2019 トランス／ナショナル：グローバル化以降の 現代美術を語る

日程：2019年3月19日（火）-21日（木・祝）

会場：六本木アカデミーヒルズ及び国立新美術館

言語：日本語および英語（全てのプログラムで日英同時通訳）

参加者：

招待参加者22名（キュレーターおよび研究者）

招待講師10名、オブザーバー38名

公開キーノート・レクチャー1

アメリカにおける日本のアート：キュレーター、研究者、アクトィヴィストとしてのライフワークから

日時：2019年3月19日（火）18:30-20:00

講師：アレクサン德拉・モンロー（ソロモン・R・グッゲンハイム美術館アジア美術部門サムソン上級キュレーター／グローバル美術部門上級アドバイザー、グッゲンハイム・アブダビ・プロジェクト キュレトリアル部門暫定ディレクター）

会場：六本木アカデミーヒルズオーディトリアム

言語：英語（日英同時通訳）

参加者数：149名

公開キーノート・レクチャー2

再構成、伝達、そしてステレオタイプ：日本現代美術への3つのアプローチ

日時：2019年3月21日（木・祝）17:00-18:30

講師：デヴィッド・エリオット（紅專廠 Redtory Museum of Contemporary Art (RMCA) 副館長兼シニアキュレーター）

会場：国立新美術館講堂

言語：英語（日英同時通訳）

参加者数：120名



撮影：松尾宇人

2019年度

世界各地域に共有する普遍的な課題、グローバルな課題を見据え、国内美術館と海外美術館のキュレーターが共同で調査を行い、双方で展覧会企画を実現するような、相互依存的な展覧会づくりのモデルに可能性があるのではないかという考えに基づき、第2回目となる文化庁現代アートワークショップを3日間にわたり大阪・京都で開催。前年度のワークショップで議論した問題意識をさらに深め、「多様性」、「脱植民地化」、「生態系／環境」という3つの国際的な課題に焦点を当てた。

日本の現代美術を単純に奨励するのではなく、現代美術を通じたグローバルな議論に日本の現代アーティストも参画することで、共通のプラットフォームを築くという考えをベースに講師・参加者を招聘。国際的な現代アートの実践について、個々の課題を通してどのような問題や可能性を明らかにできるのか。日本の現代アートの標準的な文脈と比較しながら、新たな歴史的観点や議論を語り直す機会とし、ひいては具体的なアイディアの交換や将来の共同研究および国際的な展覧会の実現につながる機会へとつなげていくこと、そして「国境を越えた展覧会制作」における課題についても議論し、また展覧会のアイディアについても直接的に意見交換をする場面も、セッション中、休憩中などを問わず、多く見られた。

具体的には海外から招待されたゲストが所属する機関と日本国内の参加者の所属先が共催で一連の展覧会を開催することを通して、国際的な枠組みの中で日本の現代アートを育成することが語られた。また、参加者の一部からは、「すでに多くの参加者同志での議論をする機会を持つことができたことで、何人のメンバーと共同でプロジェクトに取り組んでいる」という報告や「今後も積極的に国際展に関わっていきたいと考えているが、チームキュレーションのメンバーやアドバイザー、シンポジウムのゲストなどにこのネットワークを生かして行きたい」という報告もあった。別の参加者からは、「このイニシアチブが持続的な性質を持ち、何年にもわたって展開されていくという事は、日本でアートを深め、多様化するための優れた機会を確保するために実施可能な、非常に現実的で実用的な手段だと確信している」というフィードバックも得られた。

今年度の新しい取り組みとして、参加者を3つのグループに分けたセッションを実施し、美術館関係者が互いに考えていることを直接的に語り合うことで、具体的なアイディアの交換や将来的な共同研究および国際的な展覧会の実現につなげる機会とした。

文化庁現代アートワークショップ

トランス／ナショナル：グローバル化以降の現代美術を語る

日程：2019年11月29日（金）-12月1日（日）

会場：[11/29-30] 大阪大学中之島センター

（大阪市北区中之島4-3-53）

[12/1] 京都造形芸術大学

（京都市左京区北白川瓜生山2-116）

協力：京都造形芸術大学、

クリエイティブアイランド中之島実行委員会

言語：日本語および英語（全てのプログラムで日英同時通訳）

参加者：招待参加者 21名（キュレーターおよび研究者）、

招待講師 7名、オブザーバー 12名



撮影：前谷開

2020年度

新型コロナウイルスの世界的流行を受け、例年通りの形でのワークショップ実施は見送ったが、一方で、コロナ禍という状況下においてこそ、専門家同士の国際的な相互ネットワークの重要性が浮き彫りとなった。特に、国際交流や海外発信、国際間輸送、リサーチ、レジデンスなど、国境を越える活動は当面の見通しが立たず、全世界的に諸処の再考を迫られた。そういう状況にどのように向き合っていくことができるのかという課題に対する議論を深めるため、「連続ウェビナー：『コロナ以降』の現代アートとそのエコロジー」（全5回）を開催した。全てのプログラムを日英同時通訳ありでオンラインライブ配信。「日本の現代アートの国際的評価を高める」という本事業の目的に立ち返り、コロナ以降の国際交流や国際展、キュレーション、アーティストの支援と表現など、国際的なアート界を取り巻くエコロジー全体という視点で、15名の登壇者を招聘した。

文化庁アートプラットフォーム事業連続ウェビナー

「コロナ以降」の現代アートとそのエコロジー

第1回 日時：2020年8月7日（金）16:30-18:00

美術分野におけるコロナ以降の海外発信、国際交流とは？

第2回 日時：2020年9月10日（木）18:30-20:00

「コロナ以降」の国際展とは？

第3回 日時：2020年10月29日（木）13:00-14:30

「コロナ以降」の展覧会づくりとは？

第4回 日時：2020年12月4日（金）18:30-20:00

「コロナ以降」の美術とは？

アーティストの視点から見る表現・支援の課題

第5回 日時：2021年1月28日（木）18:30-20:00

「コロナ以降」の美術とは？：新たな批評性の展開

概要：

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2020-webinar>



撮影：金田幸三

2021年度

国内美術館の現状を共有しつつ、海外での展示および国内巡回の可能性について具体的な提案を募り、議論する機会とするため、新型コロナウィルス対策を十分に行いながら、第3回文化庁現代アートワークショップ（招待制）を福岡アジア美術館にて開催した。

限られた時間でより具体的な議論を行うため、招待参加者から事前に企画案を提出してもらい、ワークショップ初日のセッションで一人5分のプレゼンテーションを行った。企画案は、パンデミック以降の移動制限、輸送費の高騰、サステナブルな展覧会制作なども勘案し、単館あるいは複数館のコレクションによって構成されるもの、デジタル化された資料やエフェメラなども含むアーカイブ展示的なもの、映像を中心とした展示、インストラクションなどコンセプチュアルな作品、その他、新しいキュレーションの枠組みなどを考慮したものとなり、参加者同士の国際的ネットワークを通し、実現可能なアイデアについて深い議論をする3日間とした。

講師を招いてのセッションでは、日本人および日本で活動するアーティストの実践紹介や、海外のインスティテューションにおける具体的な事例紹介をモデルケースとしたディスカッション、アカデミックな議論の場などを設けることで、日本現代アートの国際発信の可能性について包括的に検討した。これらのセッションは、オンラインでライブ配信（後日アーカイブ動画公開）し、来場参加者以外の多くの国内外の参加者ともオンラインでつなぎ、国際的な共同研究の可能性について議論した。



撮影：白木世志一

文化庁現代アートワークショップ

日程：2022年1月28日（金）-1月30日（日）

会場：福岡アジア美術館

（福岡市博多区下川端町3-1リバインセンタービル8階）

言語：日本語および英語

（セッション2、3、5は日英同時通訳オンライン配信あり）

参加者：（国内）21名

登壇者：（国内）9名、（海外）3名

委員：8名、文化庁・新美術館・事務局：10名

アーカイブ：

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2021-workshop>

2022年度

文化庁の委託事業として最終年度となる今年度、第4回目では、これまで五ヶ年の取り組みの総括的なプログラムとして捉えた。具体的には、この間のアジア太平洋地域の現代アートにおける新しい動向、ネットワーキングの拠点について学びつつ、美術館活動やキュレーションの実践、ならびにアカデミアにおける議論から、特定の地域における美術および美術史の発信と需要、共同研究、次世代への知識や経験の継承等について共に考えを深める機会とする目的に開催した。

また、アーティストのプレゼンテーションや、会場となる愛知県美術館／愛知芸術文化センターで開催中の国際芸術祭「あいち2022」の視察も実施した。

この「文化庁現代アートワークショップ」で築かれたネットワークが、今後も長く継続され、発展していくことを共有し、プログラムは閉幕した。

文化庁現代アートワークショップ

日程：2022年9月23日（金・祝）-9月25日（日）

会場：愛知芸術文化センター

（名古屋市東区東桜一丁目13番2号）

言語：日本語および英語

（セッション1～4は日英同時通訳オンライン配信あり）

参加者：（国内）17名、（海外）1名

登壇者：（国内）8名、（海外）6名

委員：10名、文化庁・新美術館・事務局：9名

アーカイブ：

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2022-workshop>



撮影：仙石健（.new）

顔の見える国際的な人材交流の成果

直接対面し、数日間にわたって議論を交わすというプログラム構成に対し、非常に有意義であり、長期的に多くの影響をもたらし、継続開催することで効果がより大きくなり、日本におけるアートを世界に発信するための現実的で実用的な手法であるという意見が多くの参加者から聞かれた。日本の公立美術館では、専門職同士の横のつながりが薄いと言われる中、本プログラムに参加することで、顔の見えるネットワークが生まれ、共通する問題意識を持って活動している方々と話をする機会を持つことができ、日々の業務で悩んだ時に気軽に相談できるような関係が生まれるきっかけとなったとする参加者も多い。海外からの参加者は、このようなプログラムをきっかけとして顔の見えるネットワークが作られることで、日本の美術館がドメスティックに閉じない世界的な視野の中での活動をイメージできるようになると述べている。

3日間のプログラムはかなりハードではあるものの、自分の住んでいる地域以外の政策や関心事に触れたことで、美術館や行政の制度的な課題に対する前向きな議論も活発に行われ、日々の業務に追われ視野が狭くなっていたところ、新たな使命を描くことができ、業務へのモチベーションとなったというコメントや、今この時代の議論を次世代に受け継いでいくことの大切さも言及されている。より広い視野やスパンで美術や美術館活動を問い合わせ直すきっかけとなったことで、問題意識の共有や理解が必須であるという課題も浮き彫りとなった。アートプラットフォーム事業開始当初は、海外での展覧会開催を成果として掲げていたが、新型コロナウィルスの影響もあり、5ヶ年事業の中での展覧会開催は難しくなったが、参加者からは、展覧会という成果を生み出すことよりも、このような直接的な話し合いの場を作り続けることがより重要であり、中長期的に何かが生み出されることを念頭に置きながらネットワーキングの場を持ち続けることの重要性も示された。

異なる地域やジェネレーションの専門家たちと直接交流することで、自身の研究に役立つネットワークが生まれ、新しいプロジェクトに対する多くのアイデアも交換でき、将来の共同研究の可能性をもたらしていることへ高い評価をしている参加者も多い。すでにワークショップ参加者同士が共同でプロジェクトに取り組んでいる事例も複数あり、国際展の中核に関わる参加者からはチームキュレーティングのメンバーやアドバイザー、シンポジウムのゲストなどにこのネットワークを活かしていきたいというコメント

もあり、本プログラムを契機とした世界各地での展開も非常に期待できるものとなった。継続開催を希望するという意見がほぼ全員から寄せられ、目的意識を同じくする人たちで集い、さまざまな単位で議論が継続できるようなアソシエーションのようなものの設立も提案された。集まり、課題を共有し、実際に声を上げ、意見を出し、コンセンサスにして訴えていくということが非常に重要であることも共有された。

参加者からのフィードバック（2018-2022）、今後の展望

国立アートリサーチセンターへの期待

ワークショップの参加者からは、新設されることが発表されている国立アートリサーチセンターに関する期待のコメントが多く寄せられた。既存のコレクションをはじめとし、主に日本で活動を展開する作家の国際的な評価を高めるための活動の強化につながるような取り組みが期待されており、各現場の活動がよりスムーズに進めやすくなるようなプラットフォームやインフラの整備、各館がすべき・したいと思っているけれども十分に手が回っていないことに対して、APJで推進している各事業を継承することを軸として、各館を補完・円滑にするプラットフォーム機能の導入、美術館の機能を集約し、業界全体で制度を作っていく中心としての役割を望む声が多い。日本は前例主義が根強いことを受け、海外の美術館を例にした専門性の高いアートセンターができれば、他の美術館が後に続く一つの目標になるという指摘もあった。

また、主要美術館同士を繋ぐだけではなく、地方の小規模な美術館や大学などの連携も望まれており、センターの運営方針について、職員や関係者が発言しやすい構造の組織が作られることへの期待が高い。

情報や人材のオープンリソース化への期待も多く寄せられた。具体的には、収蔵品情報画像のデジタル化や図書や展覧会図録等へのアクセス性の向上、どこからでもアクセス可能なアーカイブ構築への期待、研究者や専門家同士のプラットフォームとなるような仕組みの構築など、国の施設だからこそ実現可能な国・地域・組織の形態を超えての繋ぎ役としての機能を希望する声が多かった。

柔軟な研修制度や人材交流の仕組みへの期待も大きい。海外からの問い合わせ拠点となるような役割は日本現代アート委員会でも長らく議論されてきたが、研修制度等の結果としての

材のネットワークが現時点で確実な成果をもたらしている事例も紹介された。海外からの研究者の招聘によってもたらされる国際化はもちろんのこと、国内研究者同士のプロジェクト単位での研修プログラム、キュレーター以外のスタッフが参加するプログラムなどを期待する声も多い。所属する組織内での問題意識が追いついていないという課題が浮き彫りとなり、キュレーターだけではなく、美術館に関わる行政や事務職員も含めて、組織内の意識格差を埋めるための先進的な考え方やシステム等を学ぶ機会を継続的に持つことで、組織に変化をもたらす提案もなされた。

国や制度への期待

美術館におけるスペシャリストの育成や、組織の垣根を越えたコーディネーターの必要性を切実に訴える声が多く聞かれた。既に美術の現場で活躍している専門性の高いフリーランスのコーディネーターや翻訳家、弁護士等にアクセスできるプラットフォームを整備することによる人的資源のオープンリソース化を希望する声が多数寄せられた。また、アーティストも含めたフリーランスに対する正当な対価の支払い（フェアペイ）実現や業界水準の底上げに向けたガイドラインの策定なども提案された。

せっかく存在している制度を有効活用するための手続きのスマート化や不必要的プロセスの簡略化、役所の文化政策担当者との対話の機会も望まれている。また、美術を志す若い世代を育てていく環境作りが急務であることも指摘された。人材育成は10年20年というスパンでの視点が必要であり、国際的な動向も踏まえながら、ユニークな活動をしている作家が評価されるような発信の仕組みを作ったり、グローバルかつ長期的な視点で日本の美術界の状況を俯瞰することの必要性、アジアや世界の美術館コミュニティとどう付き合うべきか、展覧会を見やくする具体案などが共有された。

美術館の課題

美術館における恒常的な人材不足により、研修の機会があつたとしても、行きたいと言い出せない、言い出せたとしても肩身の狭い思いをするという実情が複数の参加者から共有された。限られた人員で美術館としての従来の業務と並行して新たな取り組みを行うことは、現場にとってかなりの負担であるが、意欲的なプログラムの実現には、調査し、ネットワークを広げるという流動的な動きが欠かせない。そのような前向きなモチベーションが実績につながるような仕組みを考えることは、美術館が意

欲的なプログラムを継続していくためには喫緊の課題であるといえる。美術館の組織の中に国際的な視点を持つ人材がいるような仕組みの構築や、日本におけるキュレーターの正当な評価や待遇を実現するための議論の機会の必要性についても多くの言及された。時代によって美術館に求められることが変わってきたが、人類の遺産としての美術品を背負っていくという美術館本来のミッションがおざなりとならざるを得ない業務量や、社会の変化や喫緊の課題にタイムリーに反応できるような柔軟性の欠如が、生産的な仕事を妨げていることも言及された。併せて助成金額などとなっている現状やそのための書類の多さといった、様々な悪循環も指摘されている。

日本の美術館においては組織としてのマネジメントの課題も長らく語られている。組織のトップのグランドビジョンの不在や人事権が現場にないこと、学芸員以外のスペシャリストの不在、ルーティーン業務に終始取り組まざるを得ない現場、悪循環に伴う予算の削減など、様々な課題は一通り言い尽くされてきた。

解決の第一歩として、このプログラムで議論されたことを職場に可能な限り持ち帰り、組織内で共有することを通して、意識改革につなげてほしいという提案も共有された。

また、美術館の評価軸については、論文や連携の場、所蔵品の貸し出し数など、入場者数以外にも様々な評価ポイントがあるべきであるという意見多くの参加者が賛同していた。

プログラムの内容・運営への提案

毎年、関連性を持たせながらもよく考えられているテーマが、日本の近現代美術の歴史や批評に対する理解を深めるために非常に有益であるという高い評価が多かった。2022年度は国際展に合わせて開催したことを評価する声の多く、やはり議論だけではなく、実践の場とセットで開催することの重要性が示された。

今後のテーマや開催方法、登壇者等に関する積極的な提案も多数提示され、参加者のモチベーションの高さと今後のプログラム継続への期待を表す結果となった。

コロナ禍以降は、プログラムのオンライン配信が必須となったが、映像を専門とする若手アーティストを中心としたチームに撮影・配信を依頼することで、高度な技術による高品質な配信が実現しただけでなく、アーティストの支援にもつながったという評価を得ることができた。APJのプログラムをきっかけとして配信・開催手法を参照する美術館もあり、配信の現場での出会いが、次の展開へと広がりを見せた。参加者・視聴者からは、開催地

から離れた地域の方でも気軽に参加できることへの評価が高く、会場と配信のハイブリッド開催の継続が強く望まれている。



撮影：白木世志一

7 Readings

「国際的な評価を高める上で重要なテキストの国際展開」事業

日本語が国際的にあまり使われないことが原因で、日本と国際社会の間に生じる情報格差や文化格差のことを「日本語の壁」という。日本で行われる文化やビジネスの情報は、日本語で発信されることが多く、海外では理解されないことが多いため、国際社会との交流や情報共有が難しくなる。同様に、海外での出来事や情報は選択されたものだけが日本語で発信されるため、日本国内では情報が不足する。このような「日本語の壁」は、グローバル化が進む現代において、日本の国際的な存在感を弱める要因となる。また、海外からの情報や文化を遮断することにもつながり、国際社会との交流を制限する結果となる。

この現象は当然のように美術界でも起きている。日本の戦後美術及び現代美術は、近年、欧米を中心とする海外での評価が高まっているが、その背景の一つには、欧米の文脈とは異なる文脈で作られ、議論されてきたことがあると考えられる。こうした欧米での評価とともに、日本の側も、日本で作られてきた文脈や言説を紹介することによって、その解釈や評価に積極的に関わることが求められている。特に言説が重要視される現代美術の世界では非常に大きな弊害となっている。「現代美術の海外発信に関する検討会」では、以下のような課題と解決法が示された。

文化庁「現代美術の海外発信に関する検討会」の指摘

翻訳の推進および質の向上を実現するシステム構築

- ・日本で行われている展覧会等は言語の問題もあり、海外の動きと切り離され、国際的な発言力のある独自の評論・研究等も少ない。
- ・文化の異なる国の人にとっては、作品を見るだけでは分からぬことが多い。そのため日本の現代美術に関する様々な文献等が海外で読まれるよう、翻訳を推

進することが必要である。それによって日本の現代美術の歴史を、学問的な意味も含めて世界が共有できるよう、一つの流れをつくることが必要である。また、展覧会などで作品を展示するだけでなく、関係する研究・評論・論文などを海外の人々が参照できるようにするため翻訳を行っていく必要がある。翻訳には大変なエネルギーと資金が必要であり、質の高い翻訳を確保し、効果的に発表するシステムを構築していくことが求められる。

これまでの課題と「翻訳事業」が目指すこと

これを踏まえて、翻訳事業では以下の課題と目標を設定した。

これまでの課題

- ・日本における現代美術の評論や研究の全貌が海外から見えにくい状況
- ・質の高い翻訳人材・ノウハウ・予算等の不足
- ・困った時の拠り所となるような情報へのアクセスの難しさ

翻訳事業の目標

- ・質の高い英訳公開による、日本の言説の国際的かつ継続的な情報発信
- ・基礎となる資料の共有および関心を持つ国際的な研究者の増加
- ・美術史、現代美術に関わる国際的な議論、対話への参画

翻訳事業の概要（2018-2022）

1. 未英訳重要文献の新規翻訳およびオンライン出版

翻訳事業の中心的事業として進めてきたのが、論文の新規英訳とオンライン出版である。（ウェブサイトでは「文献資料」のなかの「新訳文献」として公開）日本の現代美術の国際的な研究喚起のために、戦後美術を対象とした未英訳の文献（単行本、評論、学術論文、カタログ寄稿文等）を集め、特に需要が高いと考えられるものをテーマ別に選定。最終年度の39本を含み5年間で計65本のテキストを新規翻訳、オンライン出版した。

選書

翻訳すべき文献の選択にあたり、過去から現代社会への流れを繋げるためのテーマ設定が行われた。10個のテーマを設定し、各テーマ専門のアドバイザーによる推薦により、多角的な視点からの情報収集が行われ、候補文献の収集に幅広い視野が反映された。文献推薦のクライテリアは以下の通りである。

翻訳事業で推進したプロジェクト

1. 未英訳重要文献の新規翻訳およびオンライン出版
2. 書籍の翻訳および海外出版
3. 翻訳プロセスの確立
4. 翻訳の重要性とテクニックを広く発信するプログラム実施
5. 既訳論文およびリーディングリストの公開

テーマ

1. コレクティヴィズム/Collectivism
2. 批評家/Critics
3. 展覧会・出来事・場/Exhibitions, Events and Sites
4. 日本のアートとフェミニズム/Feminism and/in Japanese Art
5. アジアの中の日本/Japan in Asia (変更前は日本⇄アジア /Japan⇄Asia)
6. 写真とメディア/Photography and Media
7. 環境/社会/制度/State and Ecology
8. アーティスト・ライティング/Artists' Writings
9. 学校・教育/Art Schools and Education
10. 80年代/The 1980s

このようにして提出された745本の書誌情報をもとに、選書チームが分担して文献を読み、会議で議論を重ね、最終的に選ばれた候補を全員で読書することで、翻訳すべき文献が決定された。このプロセスは、各メンバーの意見を取り入れ、グループでの意思決定を行う上で大変有効であった。また、翻訳に携わるメンバー全員が選書プロセスに参加したことで、チームとして一体感を持って作業に取り組むことができるようになるというメリットもあった。しかしながら、非常に時間がかかる作業であった上に、それぞれ多忙な日々のなかで大量の読書を必要とされる個々の負荷が高い作業であった。

結果としてテーマ毎に10本の文献を選定、10テーマで計100本という当初の目標を達成することができた。本事業での新訳は65本で終わったが、残り35本の英訳はアトリサーチセンターに引き継ぐこととなった。

著作権許諾

このプロジェクトにおいて、最初に乗り越えなければならないのが、著者の許諾を得ることである。現在も活躍されている著者の場合、連絡を取りやすいことが多いが、亡くなられている場合や、著作権者に辿り着くことが難しい場合、許諾を得たとしても著作権使用承諾書が返送されない場合など、翻訳ができない場合がある。また、鼎談記事など複数人の許諾が必要な場合に、一人だけ連絡がつかないこともあった。著者とメールや手紙、電話等でのコミュニケーションが難しい場合は、展覧会にあわせてギャラリーまで会いに出かけたり、著者と付き合いの長い編集者を探し出してつないでもらうなど、様々な手段を試

みた。

また、挿図として使用されている画像もできる限り許諾を得て使用するようにした。著作権許諾申請先が容易に見つからない場合も多かったが、問い合わせ手順としては以下が考えられる。

- ・現存作家であれば所属先ギャラリー、物故作家であれば取り扱いのあるギャラリー
- ・作品を所蔵している美術館
- ・日本美術著作権協会（JASPAR）
- ・日本美術家連盟
- ・過去に展覧会を開催した美術館
- ・その作家を研究している研究者

問い合わせ先が不明な場合には、ネットワークを駆使して幅広く問い合わせた。しかし、物故作家の著作権継承者が高齢化しており、インターネットを使用できなかったり、郵送書類でもやりとりが難しいケースも多数発生した。法人化している場合には問題ないが、個人で処理を行っている場合、今後著作権許諾が取れず、「美術界にとって大きな痛手」となりうることが選書チームからも指摘されており、今後の喫緊の課題である。

著作権処理に際して、インターネットでの無料使用申請が多く、作家にとって死活問題であること、きちんと著作権料を請求するためにも、基準が必要であるという要望も寄せられた。遺族や研究者からの資料寄贈の要望もある。このように、著作権者には様々な問題があるため、著作権者が相談できる窓口の必要性も委員会で報告された。

翻訳作業

翻訳作業は後述の通り、翻訳者とのマッチングが重要視される。まずは、これまでにヒアリングを行ったAPJの翻訳者リストから候補者を探すが、適任者がいない場合はCiNiiで同じテーマのテキストを扱っている翻訳者や、過去に同じ著者の翻訳をした人物を探したり、または海外大学の教授などそのテーマの専門家に問い合わせて翻訳者を推薦してもらった。候補者には必ず事前ヒアリングを行い、この事業の趣旨に賛同してくれた人物に翻訳を依頼した。それでも、残念ながら予定通りに進まない事態が発生することが多々あり、進行管理は柔軟に対応する必要があった。その分野に最適な第一人者である場合は、スケジュールを臨機応変に調整して一年以上かかって完成した文献もある。スケジュールや校正のプロセスなどについてもしっかりと

りと説明・合意した上で作業を開始することの重要性は五ヶ年を通して常に関係者で共有された。

美術分野に特化した優秀な翻訳者は限られているのが現状だが、国際的な研究喚起のためには、優れた翻訳者の育成も喫緊の課題である。本事業のような実践を通して蓄積されたテクニックやプロセスを継承し、今後の人材育成につなげることの必要性も委員会等で提言された。

レイアウト・オンライン出版

新訳文献のレイアウトは、オンライン出版に最適な英文レイアウトのフォーマットを作成し、文献毎に効果的な配置で対応する必要があったため、英語ネイティブのデザイナーに依頼した。国内にはそのような人材が限られているが、フォーマットに沿って作業できるデザイナーを複数人置くことで作業スピードの向上が期待される。

翻訳の進行管理

本事業では、事務局がいわゆる編集者の役割を務める形で進行した。翻訳者、クロスチェック、校閲者との窓口とテキストのとりまとめ、入稿作業、レイアウト、著作権許諾取得、テキストのとりまとめ、オンライン公開作業、法務・会計手続きなど、翻訳し公開するまでの多岐にわたって同時発生するプロセスを複数の事務局メンバーで分担しながら進めることで、結果として65本の英訳文献の公開が実現した。翻訳者の育成と同様、適切な進行管理ができるコーディネーターの育成が重要であることも委員会等で共有された。

2. 書籍の翻訳および海外出版

翻訳書籍決定

日本現代美術の研究促進のため、主要文献の英語化が急務であるという課題に対し、まずは海外の研究者からの翻訳希望も高く、平成22年度芸術選奨評論等部門大臣新人賞を受賞した黒ダイ児氏の著作『肉体のアナキズム』(grambooks、2010年、総752ページ)を対象とし、翻訳者の選定等の準備に取りかかった。2020年度には『美術の日本近現代史』(東京美術、2014年、総956ページ)から戦後日本美術について記載された7~9章の翻訳が決定された。

この時点で海外出版の可能性についてはまったく見えていなかったものの、著者、版元の許諾を得て翻訳に着手した。なお、

東京美術からは、書籍全体の英訳出版を希望する版元が出てきたときにはそれを制限しないことを条件に翻訳出版の許諾を得ている。

翻訳家選定

翻訳家の選定は非常に困難を極めた。探していた翻訳家の条件としては、日本美術に造詣が深い、書籍翻訳の経験がありこのボリュームに対応可能である、英語ネイティブが望ましく、校正でやりとりが発生する著者との相性もよいこと。書籍と同時に進行でオンライン出版の論文翻訳も進めていたため、ただでさえ人材不足の美術翻訳家だが、さらに選択肢が狭まっていた。予定通りに進まない事態も頻発したが、有識者から多くの素晴らしい翻訳者を紹介していただきたり、著者の多大なる協力などがあり、人員を充填しながら五ヶ年の間に出版まで辿り着くことができた。

特に『肉体のアナキズム』は、本文以外に100ページを超える年譜があるなど、資料の翻訳にも労力が必要とされた。ただ、著者の黒ダイ児氏が単語一つ一つまで徹底的に細かにクロスチェックを行ってくれたため、抜けや誤訳が非常に少なくなっているであろう。

また、どちらも翻訳者とは別に英文校閲の専門家をおくことにより、複数人による翻訳原稿となるべくフラットにする努力がなされた。

出版社探し

海外出版を手がける出版社の編集者や、海外出版の版権ビジネスを行っているエージェント、出版経験のある有識者などに紹介をお願いするところから始めたものの、壮大なボリュームであることもあり、なかなかことが進まなかった。しかし、海外出版という目標を実現させるために、アメリカ在住の英語ネイティブメンバーを事務局に迎え、出版社探しを本格化させた。ネットワークを介したアプローチを試みた後、最終的には日本美術を扱う学術出版社のウェブサイトに記載されていた企画募集担当窓口に思いつく限りアプローチをし、打ち合わせの機会を持つた後にLeuven University Pressと契約するに至った。

翻訳から入稿まで

先述の通り、翻訳者を見つけること自体が困難な作業であったが、実際に翻訳作業が開始された後も、出版までは遠い道のりであった。特に、『肉体のアナキズム』の翻訳作業は、翻訳・

著者のクロスチェック・校閲・著者のチェックといった複数の工程を何度も繰り返す必要があり、その都度修正を行うという丁寧かつ複雑なプロセスを踏みながら進められた。また、入稿後の校正作業も黒ダイ氏と事務局で責任を担うこととなつたが、これらの作業を事務局とともに、最後まで駆け抜けてくれた黒ダイ児氏には、心から感謝の意を表したい。

また『美術の日本近現代史』は、本来、幕末から現代までの日本美術の通史を俯瞰する書籍である。しかし、翻訳版では戦後期のみを対象としたため、前章にあたる時代背景を補完するため、本書を選出した委員を代表して加治屋健司氏が序文を執筆した。今回翻訳されなかった1~6章の内容が簡潔に要約されるとともに、翻訳本の意義がまとめられたものである。日本の読者にも有益なテキストであることを踏まえ、Art Platform Japanウェブサイトに日本語原文の「英語版の序」をPDF形式で公開した。

画像許諾

『肉体のアナキズム』には250以上の画像が含まれており、すべてにおいて許諾申請を行った。原書で使用した写真よりも綺麗な写真を掲載できたものも数点あり、また出版社のレイアウト手法により、ほぼ全ての写真が原書より大きく掲載されているため、資料性としての価値向上にも繋がった。

幸い、著者黒ダイ氏が著作権者と良好な関係性を築いていたことにより、ほとんどの画像の許諾をスムーズに取得することができたが、著作権者の記憶があいまいなケースもあり、日本語版制作時の綿密な調査により事実を明らかにする必要があった。今回は翻訳本であったため、このように判明できたが、このような場合にどのように史実を残すべきか、課題があるといえる。

海外出版事業のPR

国内外向けに、アートプラットフォーム事業のシンポジウムと合わせての出版記念トーク、APJのニュースレター配信を行った。Leuven University Pressから各書籍60部づつ献本があり、著者、翻訳者、編集者、著作権者、協力者に加え、アジアと西洋の日本美術研究者に献本を行った。

3. 翻訳プロセスの確立

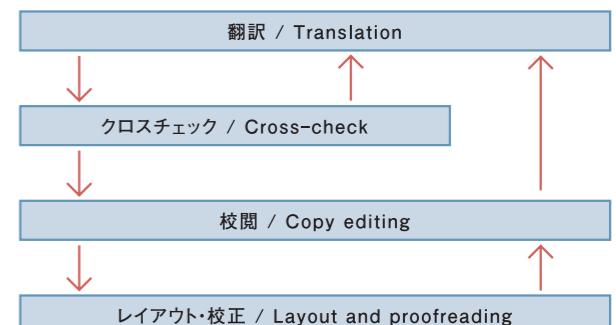
スタイルガイド

国際的な基準を満たす質の高い美術文献翻訳を目指し、翻

訳のガイドとなるスタイルシート（編纂：アンドリュー・マークル氏）を2021年3月にAPJサイトに公開した。シカゴマニュアルをベースに有識者とのヒアリングを重ねながらまとめた美術翻訳に特化したスタイルガイドとなり、以降、翻訳作業を進める際には、このスタイルガイドを基準にして進めることとなった。この取り組みにより、作業が円滑に進むだけでなく、翻訳品質やスタイルの統一も図られるようになった。また、公益財団法人小笠原敏晶記念財団の「現代美術の翻訳助成」事業でも、このスタイルガイドに準拠することが推奨されるなど、各方面で活用されている。委員会では、全国の美術館でもこのスタイルガイドに準拠することが推奨されることにより、日本の美術館全体の翻訳クオリティ向上につながってほしいという期待が共有された。

エディティング・チーム

国際的な基準を満たす質の高い翻訳を実現するため、欧米では一般的であるエディティング・チーム体制を確立。翻訳、クロスチェック、校閲（ゲラチェック）の3人体制でチームを組み、翻訳を仕上げるようにした。



翻訳者は日本語ネイティブ、英語ネイティブなど様々な人材を登用したが、やはり英文作成には英語ネイティブが好ましいことが判明した。日本語ネイティブが翻訳する場合は、どうしても日本人に読みやすい英文になりがちであることが英語ネイティブより指摘され、また、英文の読みやすさよりも日本語をいかに正確に英語にするか、ということの方が優先されるため、結果として読みづらい英語になることが多かった。

クロスチェックは、専門性の高い文献が選ばれていることもあり、その分野について造詣が深い日本語ネイティブの専門家を選んだ。誤訳をなくすためには、日本語をしっかりと読み込める力が必要だからである。その分野に特化した単語を選んだり、過去に翻訳されていた単語があることを指摘いただくなど、翻訳の質と専門性を高めるために非常に重要な役割である。英語が

堪能な著者のなかには、クロスチェックを自ら担当してくれた方もいたが、的確なチェックが行われた。著者が細かい翻訳チェックができる場合、質の高い翻訳が実現しやすくなるため、翻訳事業が成功する道のひとつである。クロスチェックのガイドラインは公開までは至らなかつたが、五ヶ年の翻訳事業で培ってきたノウハウと共に国立アートリサーチセンターに引き継ぐこととなつた。

校閲は、最終的に読みやすい英文にするために、英文校閲の専門家に依頼した。新聞や雑誌で校閲を担当してきた方が多く、レイアウト後のゲラチェックも依頼した。最終的に誤字脱字がなく、ネイティブにとっても読みやすい、海外論文にも引用されるような翻訳に仕上げるためには欠かせないプロセスである。日本人が慣れ親しんでいる英語とネイティブが扱うアカデミックな英語との差異も改めて明らかとなつたが、国際的に通用する英語が国内でも広く浸透することで、発信力の強化につながることが確認された。

また、翻訳者によって、責任の範囲の捉え方が異なるケースも多く見られたが、エディティング・チームにおいて各担当者が期待される役割について、事前に合意しておくことも、スムーズな進行においては大変重要であった。

マッチング

翻訳者と文献のマッチングは翻訳の成功そのものに関わってくる最初のキーポイントである。テーマに特化した専門性の高い文献はその分野の研究者でもある翻訳家、日記やエッセイなど専門性の知識よりも感情表現の翻訳が重要視される文献は文学系の翻訳家に依頼するなど、マッチングには翻訳者のバックグラウンドと適正を事前に調査することが重要であった。本事業では、仕事を依頼する前にすべての候補者と顔合わせの機会を持った。事業の目的とプロセスを理解してもらうとともに、バックグラウンドや興味、翻訳の方向性などについてヒアリングするのが目的である。5年間でヒアリングした人数は200人弱にのぼった。

これまで日本の美術界の翻訳は、翻訳者がひとりで仕上げ、著者のみがチェックするという孤独な作業が多かったことが指摘されているが、一つ一つの論文でもチームで協力して作り上げていくことが、モチベーション維持とクオリティの担保につながるケースが多く、このような体制が日本においても一般化することを望む声が多方面から聞かれた。

4. 翻訳の重要性とテクニックを広く発信するプログラムの実施

日本国内における現代美術の評論や研究は長年にわたって行われており、その全貌は依然として海外からは見えにくい状況にある。海外において日本の現代美術の評論や研究はどう捉えられているのか、また、日本の現代美術について、どのような研究や評論、展示がなされているのか、海外で日本近現代美術の研究に携わってきた研究者を招き、こうした問題を議論しつつ、今後どのように日本の現代美術の海外発信を行うのがよいかについて考察する機会をもつため、2022年度に翻訳をテーマとするシンポジウム「日本の現代美術を翻訳する：言説、文脈、歴史」を開催した。登壇者の富井玲子氏は、日本の現代美術

が世界美術史に定着するためには、学術、市場、美術館（収集）の三つの歯車を合わせる必要がある、ということを力説した。まさに翻訳事業が必要とされる所以がここにある。

このシンポジウムは、参加申込者が500名を超える、リアルタイムのオンライン視聴者も200名を超えるという非常に注目を集めたものであったが、翻訳と海外発信について課題を感じている美術関係者が多いことの表れであるといえる。また、翻訳プロジェクトがこれまで確立したプロセスと翻訳テクニックを広く普及させるために、翻訳従事者を対象とするワークショップを行つた。アンドリュー・マークル氏が講師として行った「Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop:Translating Art Writing」では、事前質問とともに、このようなプログラムを続けてほしい、といったフィードバックが数多く届いた。

「日本の現代美術を翻訳する：言説、文脈、歴史」
2022年7月7日（木）12:00-13:30
オンライン開催登壇者：富井玲子、大館奈津子、ウィリアム・マロッティ、中嶋泉、山本浩貴、大久保玲奈
言語：日本語、英語（日英同時通訳あり）
<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2022-symposium2>

Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop: Translating Art Writing
2022年11月15日（火）10:00-11:30
講師：アンドリュー・マークル
言語：英語（同時通訳なし）
<https://artplatform.go.jp/ja/programs/translation-workshop>

Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop: 翻訳と出版プロセス
2022年12月7日（水）12:00-13:00
登壇者：大館奈津子、神谷幸江、アンドリュー・マークル
言語：日本語（同時通訳なし）
<https://artplatform.go.jp/ja/programs/translation-workshop2>



5. 既訳論文およびリーディングリストの公開

既訳文献

文献選定のため、テーマ毎に3-4名のアドバイザーを迎え、1人につき20-30本の重要文献を推薦して頂いた。その結果、計745本の書誌情報が提出された。アドバイザーから推薦されたものの中に英訳されていた文献や、選書チームが推薦した英語文献の中から、著作権許諾を得られた下記4点を Art Platform Japan 上に転載した。

- ・複数性のなかの單一性——大衆社会における表現者の位置について（近藤幸夫、1997年）
- ・The Woman in Kimono: An ambivalent image of modern Japanese identity（児島薫、2011年）
- ・Tricks and Vision（中原佑介、1968年）
- ・デ・ジェンダリズム（長谷川祐子、1997年）

他の英訳事業と同様、個人の著作権者の場合の許諾プロセスが難航するケースも多いが、文献へのアクセスの要望が非常に大きいので、課題を一つ一つクリアしていく必要があることが委員会でも議論された。例えば、美術館から一括でカタログに掲載された既訳論文の許諾を得るなど、数を増やしてアーカイヴとして充実させることなどが提案されたが、展覧会カタログでは、英訳される論考が多いものの、海外からアクセスすることは極めて難しいのが現状であり、海外の専門家からも度々指摘されていることである。これらが多数オンライン公開されることで、国際的な研究が進む一助となるであろう。なお、著作権許諾が得られていない文献のリストについては、国立アートリサーチセンターに資料として引き継ぐこととなった。

101リスト

これから日本の現代美術を勉強しようとする海外の大学生に向けて、英文で書かれた基礎的文献リストを作成し、PDFを3月末に Art Platform Japan 上に公開。

書誌リスト

論文選書用に各テーマのアドバイザーが推薦した文献の書誌情報を纏めたリストである。2022年度は10テーマのうちの「日本のアートとフェミニズム」と「批評家」の書式を整え、Art Platform Japan 上に掲載した。他8テーマの書誌リストとその

オンライン公開作業は、国立アートリサーチセンターに資料として引き継ぐこととなった。

8 SHŪZŌ: Japanese Museum Collections Search 「収蔵情報の可視化」事業

美術作品の所在確認に資する基礎資料集成を主旨として、日本全国の登録博物館、博物館相当施設が収蔵する美術作品およびその作家情報等を日英二か国語で総合的にアクセス可能にするオンラインサーチ・システム、全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」の構築に取り組む。とくに、国内外の美術研究者等が特定の作家について調査・研究し、作品の所在情報を収集することを可能にする本格的なシステムの実現を目指す。

また、平成30（2018）年度事業の成果である「日本の美術館における現代美術展—開催記録とその展覧会カタログ一覧（1953年-2018年）」の活用、令和元（2019）年から進めている「日本の画廊調査1945年以降」に関する成果の公開など、日本美術史に関わる情報の可視化に関する取組みを推進する。

文化庁「現代美術の海外発信に関する検討会」の指摘

コレクションの所在の可視化が不十分

海外を意識した評価獲得への努力を促すためには、日本語による情報の他言語への積極的かつ戦略的な翻訳や、アーカイブの整備、コレクションの所在や研究成果の可視化が不可欠であるが、それらの対応があまりにも不十分であるために、我が国の現代美術を世界に向けて適切に発信できないばかりか、国内においてすら根本的な価値付けができるていないのが現状である。

これまでの課題と「収蔵情報活用事業」が目指すこと

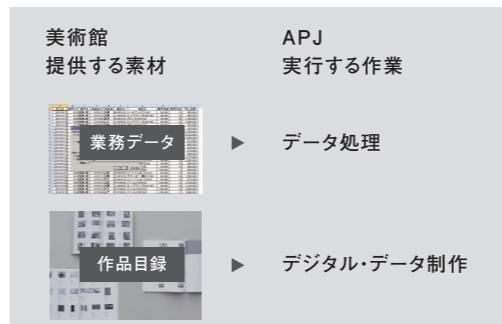
これまでの課題

日本全国の美術館コレクション——どうすれば網羅的に検索できるようになるか？

▼
「文化遺産データベース（2004年-）」や「ジャパンサーチ（2019年-）」など、これまでにもさまざまな取り組みは行われているが、データ作りが美術館次第であることから、データが増えない、英語化が進まないといった構造的課題を残していた。

SHŪZŌ の主な取り組み

APJ側がデータ処理／作成



作家データを統制し、英語での発信を実現



全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」の経緯

2018年度

国内美術館等に収蔵された作品のデータベース化、情報共有を促進し、アクセシビリティを向上させることで、研究および活用の振興を図ることを目的として、操舵組織として日本アート創生委員会収蔵情報活用分科会が発足した。

これまでの美術品データベースが構造的に持つ課題と各美術館がデジタル化作業の負担に耐えられなくなっている現状から、各館の収蔵管理業務デジタル化の推進と連動したデータベース化促進の方向性やセンター機能を持つ拠点による総合的な支援の二方向から検討を進めた。

外部有識者へのヒアリング等の予備調査を実施するとともに方向性を検討し、「共同利用機関『美術品総合デジタルアーカイブセンター』の設立（提言）」を作成した。

なお、予備調査の結果、全国美術館会議の情報・資料研究部会が編集した『全国美術館会議会員館収蔵品目録総覧2014』を基礎情報とする方針を決定した。

データベースの方向性については、以下のような点が議論された。

- ・公開データを吸い出して繋ぎ合わせる（フランス文化省／「カーリル」方式）は使い勝手はよくないが、少ない投資で早期に実現可能なのではないか
- ・作品情報のみを扱うのか、メタデータまでか、また作品のみなのか、資料も含めるのか
- ・国立美術館のデータベースを拡充しつつ使いやすいUIにし、ジャパンサーチと連携するなど、フォーマットを決めて、各館で共有、将来的に横断的に探せる準備を合わせて進めるべきなのではないか

過去20年近くにわたる美術館収蔵情報における横断検索の取り組みが成功していないことを直視し、本事業の予算の中でできる範囲としては、まずは印刷されたものやデジタル化されても形式がバラバラなデータをとりまとめてデジタル検索可能な形にすること、および作家別で進めるというアプローチが検討された。

2019年度

前年度の提言を踏まえ、実現可能性の高いロードマップを策定するとともに、実際の試行に向けたパイロット版データ作成や作家リストの作成および海外の検索データベースに関する調査を行った。

海外財団等収蔵品情報公開事例調査では、Tate（英国）、MoMA（米国）、M+（香港）、AAA（香港）、その他（ノルウェー、フィンランド、スイス、英国）の各機関の情報公開事例を調査し、データを公開するにあたってのフォーマットやデータモデル、多言語対応、利用のしやすさ、API等に関する方向性を示した。

データベースの検討と同時にウェブサイトワーキンググループとの連携を進め、2020年度のオンラインサービスの試行を見据えた各種仕様や実施体制を検討した。

また、全国美術館会議事務局に本事業について共有し、2020年度に加盟各館へ情報提供依頼の書面を送付し目録およびデータ提供をお願いする予定となった。

2020年度

2020年6月から全国美術館会議の会員館を中心とした登録博物館、博物館相当施設等の各機関に収蔵品情報（管理用デジタルデータ、紙媒体の収蔵品目録、年報等）の提供依頼を開始した。

並行し、システム構築および公開業務に関する調達の実施、提供された収蔵品目録・年報等の紙媒体の入力業務に関する調達の実施を行った。

受領した収蔵品情報について、データの加工・編集を行い、令和3年3月に全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」（ベータ版）を公開した。

また、データの収集、編集等に関する方針について協議を重ね、ウェブサイト内の「研究資料について」および「凡例」等で公開した。

2021年3月時点のデータ公開状況

収蔵品:69,990件

作家情報:1,243名

美術館:85件

2021年度

著作権法第47条3項及び著作権法施行令第7条の2第1項における「原作品展示者～に準ずる者」として、独立行政法人国立美術館が文化庁長官から指定を受けることにより、収蔵品の画像を一定の条件の下に公開した。

2022年2月時点の収蔵品画像公開館は下記のとおり
・東京都歴史文化財団（東京都現代美術館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、東京都美術館）
・愛知県美術館

その他、検索機能およびインターフェースの改善、文献資料（英訳文献）との情報連携機能の追加、作家名・美術館名の後ろに検索結果件数を表示するなど、ユーザーの利便性を高めるための改修に取り組んだ。

2022年3月時点のデータ公開状況

収蔵品:143,005件（前年度比:+73,015件）

収蔵品画像:8,312件（全体143,005件のうち）

作家情報:2,194名（前年度比:+951名）

美術館:150館（前年度比:+65館）

2022年度

令和4（2022）年4月、文化庁がアートプラットフォーム事業の一環として2018年から2021年まで推進した全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」事業は独立行政法人国立美術館本部国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室に継承された。

日本の作家とその作品の国際的評価向上のための情報の可視化に関する取組みを継続的に推進するべく、システムに関するドキュメントやデータ作成時のマニュアルなど、継続的な運用に必要な資料の整備およびチーム体制の強化に着手した。

ウェブサイトのトップページをリニューアルし、収録情報の増加に伴い充実しつつあるコンテンツの内容がより伝わりやすいインターフェースに整えるほか、「ベータ」表記を削除し、五ヶ年の事業の成果としてのウェブサイトの完成度を高めた。

次年度の実装に向けて、サイト内の全てのコンテンツを横断的に検索する機能のプロトタイプを作成し、準備を進めた。

2023年3月時点のデータ公開状況

収蔵品:161,021件（前年度比:+18,016件）

収蔵品画像:13,354件（全体161,021件のうち）

作家情報:2,520名（前年度比:+326名）

美術館:163件（前年度比:+13館）

SHŪZŌ の成果

日本全国の美術館が所蔵する美術作品の情報は、目録、年報、ウェブサイトなど各館の努力で公開されているものの、それぞれが分散しているため総覧しづらい状況にある。SHŪZŌでは、アクセシビリティが高いとは言い難いそれらの情報をどのようにすれば横断的に検索することができるかという課題に対して、既存の目録または日常の業務で使われている管理データそのまま提供いただき、事業側でデータ作成またはデータ処理を行う方法を採用した。この方法により、各館の労力を低く抑え、財政難や人員不足などのために十分に情報を公開できていなかった館をサポートすることができた。今まで各館のウェブサイトでも公開がされていなかった収蔵品情報が、SHŪZŌでは公開を実現できた事例もあり、期待した結果につながっている。実質的に3年という短期間の作業時間で16万件を超える収蔵品情報を公開できたことは、前例のない大きな成果といえる。

一例として、情報提供をいただいた北海道にある美術館からは「当館では北海道外の美術館の所蔵品図録をほとんど所蔵しておらず、また中枢になるような美術館や図書館からも遠く離れているため、本事業の恩恵が非常に大きい。他の地方小規模館も同じだろうと思う」というフィードバックがあり、事業の意義と、すでに有効に活用始めていることが確認できた。

紙目録からのデータ起こしをはじめ、分類項目の設定と統合、各館で異なる表記方法の統制などの専門的な知識を要する処理に至るまで、膨大な作業を介して、先々の使用に堪えるだけの土台を築くことができたと自負している。専門家に限らず一般にもわかりやすく使いやすいインターフェイスも構築することができた。また、作家の基礎情報を作成し、その人名典拠データを各収蔵品に紐付けるという手法は美術作品の検索システムとしてはSHŪZŌ特有のものであり、各館の作家表記に異同がある場合においても同一作家として検索できるほか、各館から作家の英語名表記の提出が無い場合でも英語での作家名表示を可能にしている。

作品画像の掲載に関しては、著作権法第47条3項及び著作権法施行令第7条の2第1項における「原作品展示者～に準ずる者」として、独立行政法人国立美術館は文化庁長官から指定を受ける国内初の事業者となり、一定条件下での収蔵品画像の公開を実現することができた。SHŪZŌからの画像提

供の依頼が、各館の内部で画像の公開に関する議論の契機となる事例も多く、画像公開に関する関心の高さを感じることが多かった。

本事業の方針を検討してきた、収蔵情報活用分科会（2018年度～2021年度）、研究資料委員会（2022年度）には、美術館学芸員の他、アート・ドキュメンテーション、データベースシステム、ウェブサイト、著作権など、各分野の専門家が集まり、議論を重ねた。会議で方向性を決めるだけでなく、メンバーが実際に調査や情報整理などに手を動かし、同じ針路に向かい熟意とともに事業を推し進めたことが、本事業が限られた期間の中で一定の成果を上げることができた大きな要因であったといえる。

SHŪZŌ の展望

本事業は2022年4月から国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室に引き継がれ、本センターの設立後も継続的に日本の作家とその作品の国際的評価の向上に取り組むことが予定されている。

当面は認知向上と利用促進に向けて、継続的な広報宣伝が必要である。内容面では、レファレンスツールとしての有用性を高めるため、より充実した典拠情報の追加を行うことが計画されているほか、Art Platform Japanのその他データベースを含めた横断検索機能の実現が待ち望まれている。また、各館のウェブサイト等で公開されていない収蔵品情報でも、SHŪZŌによってデータの公開が実現できている実態を踏まえ、公開範囲を日本近現代以外にも広げる可能性の検討が求められる。データの整備に加えて、作品画像を公開するためのデータリサイズのテクニカルガイドやワークショップなど、美術館の情報提供に関する支援や意識向上につながる取り組みも有効であろう。

その他、長期的な管理体制に移行するにあたり、担当職員が操作しやすい管理画面への改修など、持続的な管理に必要な課題への対応が期待される。一方で、情報提供館、掲載件数の一層の拡充と作品画像の公開件数の増加への利用者の期待は非常に高く、今後引き続き注力していく必要がある。

常に新鮮な視点で振り返り、情報技術の発展と足並みを揃えながら、本検索システムが日本の美術に関する調査研究に欠かせないツールとしてより一層成長することが望まれる。

9 その他事業

「学芸員等の業務を下支えする共有情報の蓄積」を目的とし、アートプラットフォーム事業では様々な調査を実施した。

日本現代美術展調査

国内外の美術館等で行われた日本現代美術展の開催記録情報を収集・データ化し、公開することを目的として調査を実施した。

2018年度

平成30年度「国内アート市場に関する基礎情報調査等委託事業」の一環として実施された日本の美術館における現代美術展の取り組みについての調査に基づき、中島理壽氏によって「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」が編纂された。

2019年度

戦後の現代美術展に関するカタログデータベースの整備を行った。

- 1) 人名別の生没年・読みのデータを作成
- 2) MS Word形式の展覧会開催データの構造を解析しデータベース用データに加工

2020年度

「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」（中島理壽編）と「国外で開催された日本現代美術展」（光山清子編）のPDF版を公開した。その他、下記の調査および編纂を進めた。

- 1) 「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧:執筆者別目録」

(A4、836ページ、編纂:中島理壽)

「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」に収録された展覧会カタログから執筆文献を取り上げ、その執筆文献を執筆者別に目録化したもの。3部構成（美術館関係者編、美術関係者編、作家編）によりそれぞれ執筆者の50音順に配列。執筆者にはそれぞれ名前の読み、生年もしくは生歿年を記載し、加えて美術館学芸員等には所属

美術館名を記載。これにより、展覧会カタログに収載された現代美術に関する論考が執筆者別に総覧できるとともに、物故者を含め日本の近現代美術を扱う美術館学芸員の基礎データ（名前の読み、所属美術館名、生年もしくは生歿年など）が初めて一つのツール（編纂物）にまとめられ一覧できるようになった。

- 2) 「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧:追録」（242ページ、編纂:中島理壽）

「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」編纂の際に、国立新美術館ライブラリー等に未着・未収蔵であった展覧会カタログを追跡調査し収録。「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」では割愛したテーマ性を有するコレクション展（収蔵作品展）カタログ・リーフレットを調査・収録。これにより、テーマ性を有するコレクション展（収蔵作品展）は、全国美術館所蔵作品のデータベース化にリンクして活用することが期待される。

- 3) 「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧:個展」（編纂:中島理壽）

「日本の美術館における現代美術展一開催記録とその展覧会カタログ一覧」の続編として、日本の美術館で開催された現代美術の個展に関して調査を進めるため、入力フォーマットを作成し、いくつかの展覧会カタログから試行的にデータの入力を行った。

- 4) 「海外で開催された戦後日本現代美術展」リサーチ・プロジェクト（編纂:光山清子）

光山清子編纂による研究プロジェクト「国外で開催された日本現代美術展一開催記録（1945年以降）」。戦後から現在まで海外で日本の現代美術を紹介した展覧会および展覧会カタログの情報を調査する。2020年度は1945年から1995年の期間に西欧で開催された日本現代美術展のリストを公開した。

2021年度

平成30年度「日本の美術館における現代美術展－開催記録とその展覧会カタログ一覧」の増補版として編纂された、「日本の美術館における現代美術展・開催記録とその展覧会カタログ（1953年-2018年）増補版」（編纂：中島理壽）をPDFで公開した。

そのうち第1部「現代美術展一覧」のデータベース化を実施したほか、「国外で開催された日本現代美術展（1945年以降）－中間報告書：西欧で開催された日本現代美術展（1945年-1995年）」（編纂：光山清子）をもとに基本情報をデータベースに収録した。国内外の展覧会を一つのデータベースにまとめて公開し、管理画面を整備し、情報の追加更新ができる環境を整えた。

具体的な実施内容としては以下の通り：

- ・収蔵情報活用分科会において公開する項目と項目名（日英）、ウェブサイトの公開用画面レイアウト等を検討し、システム開発担当と連携しながら、データベース開発に取り組み、2022年2月に公開した。
- ・基本的な詳細検索、ソート機能について要件を協議し実装した。
- ・作家情報、美術館情報を紐付け、展覧会情報からAPJウェブサイト内の他の研究資料の情報へアクセスできるようにした。
- ・管理画面から情報の追加更新ができるようにし、編纂者、事務局で情報の校正を行なった。

日本現代美術展調査

Contemporary Japanese Art Exhibitions Research

2022年3月時点 公開件数

展覧会：2,152件

2022年度

本調査は、令和4（2022）年4月、全国美術館収蔵品サービス「SHÜZÖ」事業とともに独立行政法人国立美術館本部国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室に継承された。

国内展についてはデータを再確認して情報の精度を高め、国外展については1995年以降に西欧で開催された日本現代美術展を中心に情報を追加した。

日本現代美術展調査

Contemporary Japanese Art Exhibitions Research

2023年3月時点 公開件数

展覧会：2,399件（前年度比：+247件）

日本の画廊調査 1945年以降

戦後日本における美術の発表の場として大きな役割を果たし、国際的なネットワークの重要な拠点となってきた画廊（ギャラリー）に関して、基本情報を収集・データ化し、公開することを目的に調査を実施した。

趣旨・目的

日本の戦後美術は欧米の芸術動向から様々な影響を受けながらも、独自の発展・熟成を遂げてきた。とりわけ、具体・反芸術、ネオダダ、もの派など所謂戦後の前衛を含む1950年代から1970年代の美術は、この20年の間に再評価や研究が進み、国際的な評価が高まっているという認識が一般的になりつつある。

一方、美術史研究においては、作家や作品に関する研究については深化が図られてきたものの、作品の「発表の場」であり、時には制作にも深く関与してきたギャラリーに関する研究については、体系的になされてきたとは言い難い現状にある。

しかしながら、日本における上記の美術が如何にして出現してきたのかを考える場合、美術家と鑑賞（購入）者＝社会との間を結び付けてきたギャラリー・画商の存在は極めて重要であり、関係者の高齢化を考えると、その調査は喫緊の課題である。本事業は、ギャラリーの歴史をアーカイブすること＝美術がいかにして生まれてきたかという創造の一端に触れることを通して、戦後日本の美術を新たに捉え直すことを目指すものである。

事業開始当初は、様々な調査の方向性が示されたが、有識者会合での議論を重ねた結果、まずは、基本情報を収集・データ化し、公開することになった。2022年2月には、調査によって明らかになった画廊のうち、1957年から2006年の間に発行された「美術手帖増刊美術年鑑」の画廊欄に掲載の画廊から順に情報の公開が始まった。

2019年度

「戦後日本におけるギャラリー史に関する調査事業」のプロジェクトチームを組成、2020年1月に開始した。アーカイブを行なう対象の特定や、ネットワーク構築に向けた各方面への打診、南画廊の元従業員である浅川邦夫氏へのインタビューをトーキイ

ベントとして実施するなどした。また、全国の各都市で日本の戦後美術に関わる研究を行っている美術館学芸員、研究者など35名にインタビューを実施。ネットワークの構築を続行し、情報の提供および共有などの連携進めることを確認すると共に、各地のギャラリーリストの作成を開始した。

2020年度

画廊調査に詳しい有識者による意見交換会議を設置し、本事業の成果として画廊の基本情報の公開を目指すことを確認した。『美術手帖』臨時増刊『美術年鑑』と篠原誠司氏による関係機関での調査、関係者へのインタビュー・聞き取り調査を元に画廊リスト（ギャラリーネーム、住所、経営者等）の作成を進めた。また、本事業の名称を以下に決定した。

日本語：日本の画廊調査 1945年以降

英語：Survey on Japanese Art Galleries from 1945

2021年度

前年度までの調査で明らかになった画廊に関する基本情報をデータベース化し、公開を進めた。また、情報の追加更新ができる管理環境を整えた。開廊・閉廊の時期、所在地、経営者等の情報を収集することに加え、典拠情報として各種書誌の調査、研究機関での一次資料の調査、および関係者に対する28件の聞き取り調査を実施した。

具体的な実施内容としては以下の通り：

- ・画廊調査に関する意見交換会議において公開する項目と項目名（日英）、項目名（日英）、ウェブサイトの公開用画面レイアウト等を検討し、システム開発担当と連携しながら、データベース開発に取り組み、2022年2月に公開した。
- ・基本的な詳細検索、ソート機能について要件を協議し実装した。
- ・管理画面から情報の追加更新ができるようにし、編纂者、事務局で情報の校正を行なった。
- ・ギャラリーリストの凡例を作成した。

日本の画廊調査 1945年以降

Survey on Japanese Art Galleries from 1945

2022年3月時点 公開件数

画廊：2,397件

2022年度

本調査は、令和4（2022）年4月、全国美術館収蔵品サービス「SHÜZÖ」事業とともに独立行政法人国立美術館本部国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室に継承され、研究資料委員会のもとに、画廊調査作業部会が設置された。

典拠の細かな再確認（掲載年、掲載ページ）を行うなど、データの精度を高める他、活動年代での検索の実装や関連画廊の表示など、利便性の向上に取り組んだ。また、本調査の今後の展開方針について検討し、文献情報等の追加情報の収集方針と掲載方法に関する検討を進めた。

日本の画廊調査 1945年以降

Survey on Japanese Art Galleries from 1945

2023年3月時点 公開件数

画廊：2,409件（前年度比：+12件）

日本のアート市場調査

2018年度

日本のアート産業に関する市場調査2018

企画・調査：一般社団法人アート東京

調査協力（共同調査）：一般社団法人 芸術と創造

アート市場の活性化を目的とし、日本のアート産業市場規模の調査・分析、及びアート購買層への意識調査を実施し、2018年度の調査では、日本全体の美術品市場規模を2,460億円と推計。

<https://artfairtokyo.com/press/134/pdf>

・対象、サンプル数：

インターネットアンケート（日本全体の分布にあわせてウェイトバック集計）

サンプル数：1次調査 20,475件、2次調査 299件（2次調査では、1次調査の回答者のなかから「国際経験豊かな」、「一都三県在住の20代-50代の就労者」で「過去1年間に2回以上美術館・博物館を訪問した」者を対象）

・結果

・美術品の購入額は2,460億円と推計される。うち2,125億円が国内事業者からの購入である。購入先は国内の画廊・ギャラリー（735億円）、国内の百貨店（644億円）が大きかった。「美術館・博物館入場料」の合計は408億円、アートプロジェクト消費の合計は96億円であった。これらをあわせた「美術関連サービス市場」は504億円になる。

「美術館市場（2,460億円）」「②美術関連品市場（470億円）」「③美術関連サービス市場（504億円）」の全てを合算した「アート産業」の市場規模は3,434億円と推計される。

・2018年のアート産業（①+②+③）の市場規模はこれまで最大となった。あわせて、美術品市場については緩やかではあるが毎年増加傾向にある。画廊・ギャラリーや百貨店は毎年若干の増減はあるが、画廊・ギャラリーは700億円台、百貨店は600億円台で推移している。

・2017年の世界の美術品市場（約7.16兆円）における日本の美術品の市場（2003億円）をあてはめると、日本の割合は2.8%と推計される。

・1990年に6,000億円規模まで膨らんだ美術品輸入も1993

年以降は500億円未満で推移してきたが、2011年以降は再度拡大傾向にあり、2017年は580億円となっている。

・輸入・輸出ともにアメリカが最大の相手国となっている。

輸入はそのほか、フランスやスペインなども多く、輸出はアジア（中国・韓国・台湾等）が多い。

・ミュージアムの訪問状況については、37.2%は過去1年間に1回以上ミュージアムに訪問している。そのほとんどは1-2回の訪問（27.7%）であり、月に1回以上訪問する者は少數（1.5%）である。

・20代・30代では特に週末の訪問が多く、また実施しているミュージアムはまだ限定的ではあるが金曜日・週末の17時以降の訪問も比較的多い。60代は曜日による差がほとんどない。

・ミュージアムへのニーズに関しては「入場料金（企画展・常設展）の低廉化」「著名な芸術家の展覧会の充実」「アクセスの利便性」「人気の展覧会の混雑の緩和」などのほか、「自由・気軽に滞在・休憩できるスペースの充実」「レストラン・カフェの充実」などの割合も高かった。

・一方、近年話題のナイトミュージアムに繋がる「開館時間の延長（夜）」の割合は過去1年間1回以上ミュージアムに訪問した方でも17%に留まり、顕在化したニーズではないことがわかる。

・国際経験豊かなビジネスパーソンの美術品購入状況に関しては、約半数は美術品を購入した経験を持ち（日本全体では約16%）、さらには購入したことない者でも約3割が購入に関心を持っている。

・購入経験がないビジネスパーソンの美術品非購入理由に関しては、「美術品を購入することに関心がないから」（41%）、「購入できそうにないから（値段が高そうだから）」（26%）のほか、「画廊・ギャラリーの仕組みが分からぬから（気軽に訪問していいのものが分からぬから）」（26%）、「それぞれの画廊・ギャラリーでどのような企画を行っているか知らないから（わかりづらいから）」（22%）など、関係者による情報発信で解消できそうな要素の割合も高かった。

・外国人に「美術館・博物館」を紹介しない理由として最も多かったのは「展覧会が日本文化に関するものが少ないから」（23%）であった。

2022年度

「日本のアート市場調査」

企画・調査：藤原羽田合同会社

国際的なアート市場における日本国内の現状調査を行い、日本の美術品の売買額を網羅的に把握するための基礎的な情報収集を行った。また、本調査で取得したデータを国外のマーケット調査と接続することを通じて、今後の調査方針策定に向けたロードマップを策定。

現在、国内のアート市場の実態は「日本のアート産業市場調査」（エートーキョー／芸術と創造：<https://artmarket.report/>）にて知ることができるが、国外における主要なアートマーケット調査と調査形態が大きく異なっており、海外のアート市場と比較分析が出来ず、適切な現状把握が出来ていない状況にある。

そこで、本業務においては、日本国外において英語で実施されている国際的なアート市場調査に関する先行事例をまとめ、その動向を踏まえて日英バイリンガルでの基礎調査項目を設計し、業種別の調査対象者に対して、調査票を配布・回収・翻訳し、調査結果を国外主要調査主体に対してデータを送付することにより、国外において日本のアート市場の実態を可視化することを目的に実施する。

調査方法：

① 郵送：一般社団法人全国美術商連合会（以下、全美連）

加入者1,007件へ、

・文化庁からのカバーレター

・郵送した調査票見本

・返信用封筒見本を、全美連からの住所と宛名印刷済みの封筒に封入して郵送

② オンライン：以下88件へメールにてご案内

・ギャラリー、ディーラー向け 合計77件

・団体65件

一般社団法人日本現代美術商協会（CADAN）（加入者37画廊）

一般社団法人 日本現代美術振興協会（APCA）（加入者9画廊）

日本芸術写真協会（FAPA）（加入者19画廊）

・百貨店10件

・オンライン販売2件

・オークション向け 合計11件

・調査対象、調査数

上記合計1,095件

調査結果：

・ギャラリー向け

日本からの回答数は、213件

（うち有効回答数が169件 ※オンライン・郵送を含む）

・オークション向け

オークション会社11件（オンラインにて）のうち、回答4件

アーツエコノミクス社が行う、世界的なマーケット調査と、日本の調査を接続させることを目的とした調査は日本初の試みであり、文化庁から日本のギャラリー等販売側に対しての調査依頼も手探りでの試みとなつたため、配布先や調査方法、集計方法などについて、有識者へご意見を伺いながら、それをアーツエコノミクス社側の調査方針やタイムラインに乗せていく調査となつた。

市場規模の適切な把握を行うための調査であること、また本調査が日本のアート市場を適切に把握するために重要であることは多くの方にご理解いただけが、調査対象者の数が膨大であり、また設問が用意されてから回答締切までの期間も短く、かつ年末年始と重なるなどしたため、当初期待していたよりは回答数が下回ったが、今後、繰り返し同じ時期に、調査方法を改善しながら行うことで、調査を定着させられれば、回答数はまだ増加の余地があることが見込まれる。また、日本と海外ではカレンダーサイクルも異なり、また商慣習も異なるため、今回調査を実際に始めてみてから見えてきたことなどを次回の調査に生かすこと、で、改善できるところが多数あると思われる。

回答対象としている1月から12月についての売り上げの数字を、12月に見込みで調査を進めたが、その後の集計期間や、バーゼル側の公開時期のスケジュール変更により、3月中に調査結果の公開まで進めることができなかつたが、次回以降は、接続先のタイムラインを踏まえての調査設計をすることが重要であると言える。

海外文化芸術支援組織調査

海外の文化芸術支援組織による国外の文化芸術機関（ミュージアム、アートセンター等）や国際芸術祭主催組織などへの支援体制や支援額などについて、日本を含む8カ国の文化芸術支援組織を比較できるように情報を整理した。

- ・国際交流基金（日本）
- ・アンスティチュフランセ（フランス）
- ・モンドリアン財団（オランダ）
- ・プロ・ヘルヴェティア文化財団／スイス・アーツ・カウンシル（スイス）
- ・オーストラリア・カウンシル・フォー・ジ・アーツ（オーストラリア）
- ・韓国文化芸術委員会／アーツ・カウンシル・コリア（ARKO）（韓国）
- ・ドイツ対外文化交流研究所（ifa）（ドイツ）
- ・アダム・ミツキエヴィチ・インスティテュート（ポーランド）

2021年3月現在オンラインで得られる内容と、各支援組織へのヒアリング結果に基づき、下記の各支援組織の組織概要や海外文化芸術支援事業内容、組織形態や設置母体など基礎的な情報をまとめ、主に現代美術分野を中心とした海外展助成プログラムなどに関する具体的な事例を掲載。

今回の海外文化芸術支援組織調査は、「国際連携・国際発信への官民支援に関する調査」の一環として、OECD諸国及び中国などの主要国を対象に、日本の事例と対比させる形で行った。しかしながら、文化芸術機関を対象とした国際連携・国際発信支援事業を実施している海外文化芸術支援組織は非常に限定されており、英国のアーツ・カウンシル・イングランドやブリティッシュ・カウンシルにおいても対象となる事業は現在確認できていない。また、米国最大の支援組織である全米芸術基金（NEA）は、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展アメリカ館展示の選考審査や一部助成と、ローマでのアーティスト・イン・レジデンス助成事業を除き、海外文化芸術支援事業を実施していないことがヒアリングを通じて判明した。加えて、昨年からの世界的な新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、各國海外支援組織においても国際連携・国際発信支援事業の中止や減少が目立ち、関連情報の公開見送りなどの影響もあり調査困難な状況から、上記8カ国の支援組織の調査結果に至った。

公的機関による造形芸術の国際的なプロモーションに関する比較調査

主に文化を担当する中央省庁およびパブリック・ディプロマシー機関による造形芸術の国際的なプロモーションについて、2019年11月現在オンラインで得られる情報に基づき情報を整理した。調査対象は以下の通り。

日本

- ・文化庁
- ・国際交流基金
- ・Tokyo Arts and Space

イタリア

- ・文化財・文化活動省
- ・イタリアン・カウンシル
- ・ローマ・クアドリエンナーレ財団

イギリス

- ・アーツ・カウンシル・イングランド
- ・ブリティッシュ・カウンシル
- ・British Art Network

シンガポール

- ・ナショナル・アーツ・カウンシル
- ・シンガポールアートセンター
- ・シンガポールビエンナーレ

韓国

- ・文化体育観光部
- ・韓国国際文化交流振興院
- ・国内ビエンナーレ等

「(国際的な活動を含む) 人材育成事業」「文化交流事業」「産業振興政策」など一口にプロモーションといつても、どのような結果を求めるのかで事業形態も大きく異なることが示された。また政府機関が直接行うのか、公的機関（財団、パブリック・ディプロマシー機関など）が行うかで意味合いも異なる。

例えば、韓国の事例は「販売すること」が条件になっているなど、かなり「産業振興政策」としての位置づけが強いと思わ

れるが、政策の位置づけによって関連機関とのパートナーシップなどの可能性も変わることを考慮する必要があることが示された。また、国内・海外のどちらに資金を投じるかというのも大きなポイントである。ヴェネチア・ビエンナーレに対してサポートがあるのは各国共通しているが、ではそれ以外は国によって何が異なるのかも慎重に見ていく必要がある。シンガポールでは、アートセンターといった、国内イベントの振興を自国のアーティストの国際的な地位を高める活動として位置づけている。国際的な地位向上のためとはいえ、公的な資金を海外の団体に助成することをどう捉えるのかについても国・組織によって様々であり、場合によっては説明責任が生じうるポイントである。例えば、アーツ・カウンシル・イングランドの例では、助成への応募にあたり、国際的な活動が「英國に住む人々の利益につながることを明確に書け」と示されている点は検討に値するポイントと言える。

国際展に招聘された作家への支援

国際的な評価を高める上で重要な機会を得た作家への適時適切な支援を目的とし、国外で開催される国際展もしくは国外の主要美術館等の組織に招聘され、原則として新作の発表を予定している作家（個人またはコレクティブ）に対し、他からの資金調達が見込めないために作家自身が負担を求められることが慣例となっている経費の一部もしくは全部を支援するプログラム。

2019年度

作家支援事業初年度となる2019年度は、ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展に出演する3組の作家に対する支援をおこなった。

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展

出展作家：池田亮司、片山真理、久門剛史

展覧会名：

Biennale Arte 2019: *May You Live In Interesting Times*

会期：2019年5月11日-11月24日

開催地：イタリア

ディレクター：ラルフ・ルゴフ

ウェブサイト：<https://www.labienale.org/en/art/2019>

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展での経験や本支

援事業については、片山真理氏、久門剛史氏より、2019年9月11日に開催された文化庁アートプラットフォームシンポジウムで紹介され、その概要はRealTokyoに掲載されている。

<https://www.realtokyo.co.jp/out-and-about/the-globalization-of-the-art-world-and-japan-outlookinto-the-current-state-and-the-future-bunka-cho-art-platform-japan-symposium/>



片山真理、ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 2019
「May You Live in Interesting Times」展示風景

2021年度

本事業2年目の2020年度は、コロナ禍により支援予定であった国際展が全て延期となった。2021年に延期開催されたサンパウロとビエンナーレとソウル・メディアアーティビエンナーレに参加した2組の作家に対する支援を行った。

第34回サンパウロ・ビエンナーレ

出展作家：毛利悠子

展覧会名：The 34th Bienal de São Paulo:

Though It's Dark, Still I Sing

会期：2021年9月4日-12月5日

開催地：ブラジル

ウェブサイト：<http://www.bienal.org.br/>



View of the works by Yuko Mohri
© Levi Fanan / Fundação Bienal de São Paulo

第11回ソウル・メディアシティビエンナーレ

出展作家：山城知佳子

展覧会名：One Escape at a Time

会期：2021年9月8日-11月21日

開催地：韓国

アーティスティック・ディレクター：ユン・マ

ウェブサイト：<https://mediacityseoul.kr/2021/en>



Chinbin Western: Representation of the Family (2019).
Exhibition view: One Escape at a Time, 11th Seoul Mediacity Biennale. Courtesy Seoul Mediacity Biennale.
Photo: Cheolki Hong, glimworkers.

コロナ禍における国際展の事例報告については、毛利悠子氏、山城知佳子氏より、10月23日に開催された文化庁アートプラットフォームシンポジウムで紹介され、その概要是RealTokyoに掲載されている。

<https://www.realtokyo.co.jp/out-and-about/bunka-cho-art-platform-japan-the-globalization-of-the-art-world-and-japan-what-lies-ahead-for-the-advancement-of-contemporary-art-2021-10-23/>

2022年度

2020-2021年にかけてコロナ禍によるビエンナーレ延期が重なり、2022年度に開催される国際展の数が通常よりもかなり増えたことを受け、2022年度は、国際展に出演する作家に対し、最大 350万円×10組という予算措置が取られた。日本現代アート委員会での議論やプロジェクトの予算調整の結果、最終的に12組の支援を行うこととなった。作家を公募するまでには至らなかつたが、過去の支援実績を踏まえた実施要項の骨子の作成は完了し、プロセスやノウハウと共に、新設される国立アートリサーチセンターに引き継ぐこととなった。

第59回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展

出展作家：笹本晃、池田龍雄

展覧会名：

Biennale Arte 2022: *The Milk of Dreams*

会期：2022年4月23日-11月27日

開催地：イタリア

ディレクター：セシリア・アレマーニ

ウェブサイト：<https://www.labbiennale.org/en/art/2022>



池田龍雄、ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展2022
「The Milk of Dreams」展示風景

ドクメンタ15

出展作家：栗林隆+Cinema Caravan

会期：2022年6月18日-9月25日

開催地：ドイツ

アーティスティック・ディレクター：ルアンルバ

ウェブサイト：www.documenta-fifteen.de



documenta fifteen: Cinema Caravan + Takashi Kurabayashi,
screening in Outside of Mosquito Net (Out of the Loop) ,
2022, Karlswiese, Kassel, June 19, 2022, photo: Nils Klinger

釜山ビエンナーレ2022

出展作家：鎌田友介、Chim↑Pom from Smappa!Group

展覧会名：

Busan Biennale 2022: *We, on the Rising Wave*

会期：2022年9月3日-11月6日

開催地：韓国

ディレクター：キム・ヘジュ

ウェブサイト：<http://www.busanbiennale2022.org/en>



Yusuke Kamata,
Japanese Houses, Stone Garden of Imperialism (2022).
Exhibition view: Busan Biennale, *We, on the Rising Wave*.
Courtesy Busan Biennale Organizing Committee.

Ars Electronica Festival

出展作家：吉藤オリィ、水尻自子、藤幡正樹、真鍋大度

展覧会名：CyberArts Exhibition

出展作家：株式会社 細尾・東京大学 篠原康明研究室・株式会社 ZOZO NEXT

展覧会名：STARTS Exhibition

出展作家：中里唯馬

展覧会名：STUDIOTOPIA — Welcome to Planet B

会期：2022年9月7日-2022年9月11日

開催地：オーストリア

ウェブサイト：<https://ars.electronica.art/planetb/en/exhibitions/>



Ars Electronica 授賞式にて、全受賞者のグループ写真
Photo: tom mesic

第17回イスタンブル・ビエンナーレ

出展作家：中村裕太

会期：2022年9月17日-11月20日

開催地：トルコ

キュレーター：デイヴィッド・テ、ウテ・メタ・バウアー、

アマル・カンワル

ウェブサイト：<https://bienal.iksv.org/>



Nakamura Yuta, *Atatürk's Catafalque: Another Utopian Architecture?*, installation view at Barın Han, Istanbul, 2022

バンコク・アート・ビエンナーレ 2022

出展作家：片山真理、塩田千春、宮島達男

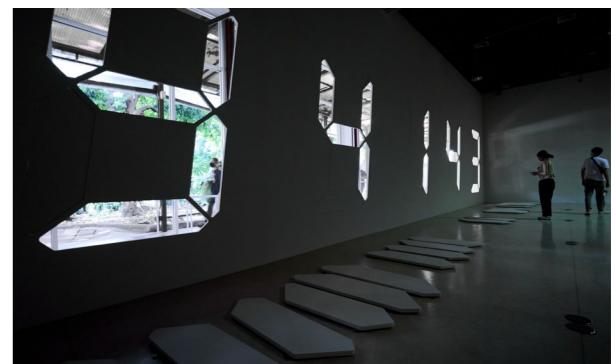
展覧会名：BAB 2022 CHAOS: CALM

会期：2022年10月22日-2023年2月23日

開催地：タイ

ディレクター：アピナン・ポーサヤーナン

ウェブサイト：<https://www.bkkartbiennale.com/>



Tatsuo Miyajima,
Changing Landscape_Changing Wall, 2022.
Image courtesy of the artist and Bangkok Art Biennale

コチ＝ムジリス・ビエンナーレ

出展作家：今村洋平

展覧会名：

Kochi-Muziris Biennale 2022-23:

In Our Veins Flow Ink and Fire

会期：2022年12月12日-2023年4月10日

開催地：インド

キュレーター：シュビギ・ラオ

ウェブサイト：<https://www.kochimuzirisbiennale.org/>



今村洋平、コチ＝ムジリス・ビエンナーレ2022-2023

「In Our Veins Flow Ink and Fire」展示風景

Artist Space

出展作家：刀根康尚

展覧会名：Yasunao Tone: *Region of Paramedia*

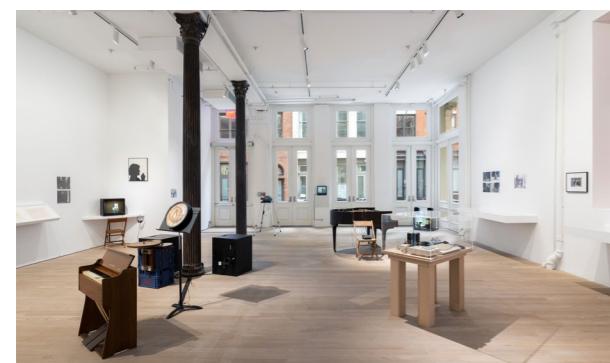
会期：2023年1月13日-3月18日

開催地：アメリカ合衆国

ディレクター：ジェイ・サンダース

ウェブサイト：

<https://artistsspace.org/exhibitions/yasunao-tone-region-of-paramedia>



Installation view, Artists Space, 2023.

Photo: Filip Wolak.

シンポジウムの開催

現代アートの振興施策に関し、文化庁アートプラットフォーム事業が果たすべき役割をテーマとし、振興策の現状と今後の見通しを展望する「文化庁アートプラットフォームシンポジウム」。

日本における文化政策や美術館のあり方について議論を深める機会として、国内外のアーティストやキュレーター、評論家、美術史家、コレクター、ギャラリスト、修復家、建築家、音楽家、弁護士、政治家、行政官、経済学者、メディア、コーディネーター、編集者、翻訳家など、さまざまな有識者を招聘しての公開プログラムを毎年複数回にわたって開催した。

現代アートの関係者が集い、歴史的な検証やグローバルの最前線で起きていることを共有しながら、なぜ日本において現代アートのプラットフォーム形成が必要なのか、そのために何をすべきなのか、どのような可能性が啓けるのか、幅広い視点から文化庁アートプラットフォーム事業が果たすべき役割を議論してきた。それぞれのスピーカーの立場から、法整備を含む具体的提言も議論され、新たな時代を迎える動き出す日本のアート界の未来や、今後の展望が共有された。

海外の事例も多数紹介され、グローバルなネットワークを構築する美術館界における日本の課題と現状を明らかにするとともに、持続可能な調査研究・収集のためのシステムの整備やナショナル・コレクションの形成、専門家ネットワークの構築やコレクションの活用、アーティストの国際的評価を高める取り組み、美術館と市民との生きた交流、いかにして国際発信をしているのかといったトピックについて、多くの参加者と共に考える機会となった。

文化庁アートプラットフォームシンポジウム

2018年11月30日（金）17:00-19:00

芸術資産「評価」による次世代への継承—美術館に期待される役割—

近年「フローからストックへ」という経済構造の変化が指摘される中、人口減少と超高齢化が進む日本では、芸術作品や文化財の価値を国民共有の「資産」として適切に評価し、積極的に活用することを通して新たな価値を創出するとともに、その価値が文化に再投資され、持続的な発展に繋がる好循環を構築していくことが重要になっている。通常、実物資産の価値は時間の経過とともに減じていくが、美術品などの芸術資産は「評価」によって逆に上昇する可能性を持つことから、国民共有の「資産」として維持しながら適切な評価を形成することで次世代に継承していくことが極めて重要であり、芸術資産評価の実践者の役割を担う美術館の重要度が増してきている。こうした

中、美術館の体制強化、芸術教育、文化芸術に関する税制等を中心に、今後の美術館の役割や在り方について、美術関係者のみならず、一般社会においても関心が高まっている。この機を捉え、文化・芸術資産の活用の重要性や、こうした資産の価値評価を高めていくための方策、美術館の在り方等に関して様々な立場から議論する機会として、文化庁はこの度「芸術資産「評価」による次世代への継承—美術館に期待される役割—」と題したシンポジウムを開催。美術館関係者のみならず、経済学者、美術史家、建築家など様々な分野からスピーカーを招聘し、ダイアローグやパネルディスカッションを通して、それぞれの立場から議論した。

2019年3月16日（土）15:00-18:00

芸術資産をいかに未来に継承発展させるか—コレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言—

近年「フローからストックへ」という経済構造の変化が指摘される中、人口減少と超高齢化が進行する日本では、芸術作品や文化財の価値を国民共有の「資産」として適切に評価し、積極的に活用することを通して新たな価値を創出し、その価値が文化に再投資され、持続的な発展につながる好循環を構築していくことが重要になっている。こうした中、文化庁は、昨年11月に文化・芸術資産の活用の重要性、資産の価値評価を高める方策、美術館の在り方等に関して問題意識を共有するシンポジウム「芸術資産「評価」による次世代への継承—美術館に期待される役割—」を開催した。

第二回目となる今回は、文化・芸術資産の価値評価を高めていくための具体的な方策について、より議論を深めるため、どのように日本の美術コレクションをまもり、増やし、社会に生かしていくかという観点から、保存修復家の美術館常勤体制の整備、税制改正及びコレクター文化の育成、美術館やコレクション間での所蔵作品交換やレンタル、関連アーカイブ公開の重要性などを中心に、法整備を含む具体的提言を議論した。

17:00-17:10 キーノートスピーチ

青柳正規（東京大学名誉教授、山梨県立美術館館長、前文化庁長官）

17:10-17:50 ダイアローグ 芸術資産の価値を高めるには？

青柳正規（東京大学名誉教授、山梨県立美術館館長、前文化庁長官）

柴山桂太（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

18:00-19:00 パネルディスカッション

岩崎かおり（アートコレクター）

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

田根剛（建築家）

名和晃平（彫刻家）

柴山桂太（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

会場：国立新美術館 講堂

参加者数：191名

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2018-symposium1>

15:00-15:20 キーノートスピーチ

園府寺司（大阪大学大学院文学研究科文学部教授）

15:30-17:00 パネルディスカッション

池上裕子（神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）

岩井希久子（絵画保存修復家/IWAI ART 保存修復研究所）

鴻池朋子（現代アーティスト）

小松隼也（長島・大野・常松法律事務所 弁護士/コレクター）

建畠哲（埼玉県立近代美術館館長）

会場：国立新美術館 3階講堂

参加者数：119名

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2018-symposium2>

2019年9月11日（水）15:00-17:45

グローバル化する美術界と「日本」：現状と未来への展望

現代アートの関係者が集い、グローバルの最前線で起きていくことを共有しながら、なぜ日本において現代アートのプラットフォーム形成が必要なのか、そのために何をすべきなのか、どのような可能性が啓けるのかについて、議論を深めることを趣旨に開催した。

15:00-15:20 文化庁アートプラットフォーム事業について

片岡真実（森美術館副館長兼チーフ・キュレーター／日本現代アート委員会 座長）
林道郎（美術評論家／上智大学国際教養学部教授／日本現代アート委員会 副座長）

15:30-17:00 ゲストプレゼンテーション【ヴェネチア・ビエンナーレ 2019 企画展招聘作家】

片山真理（アーティスト）
久門剛史（美術作家）

16:00-17:00 パネルディスカッション

石井孝之（タカ・イシイギャラリー代表／日本芸術写真協会代表理事）
田口美和（タグチ・アートコレクション）
片山真理（アーティスト）
久門剛史（美術作家）
モデレーター：片岡真実、林道郎

会場：国立新美術館3階講堂

参加者数：194人

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2019-symposium>

2021年10月23日（土）14:00-16:00

グローバル化する美術界と「日本」：現代アート振興の地平線

文化庁は、日本の現代アートがグローバルに適切な評価を得るために、官民が一体となって効果的・国際的な情報発信を実現するとともに、国内外の関係者の強固なネットワークを構築することが第一歩と考え、平成30（2018）年度より、「文化庁アートプラットフォーム事業」に取り組んできた。

具体的には、①日本の現代アートに関する国際的な研究を喚起するような文献を英訳し、世界の関係者が身近なものとして知ることができるようにすること、②関心を持った世界の関係者が、日本国内の美術館の収蔵品情報を横断的に検索できるデータベースの開発、③日本人・外国人を問わず、日本の現代アートの研究者やキュレーターのネットワーク化につながる機会の提

供等を進め、一定の成果を収めている。

本シンポジウムは、主として国内外の美術関係者を念頭に、上記①～③を中心とする取組や取組を通じた成果（物）を紹介することで、関係者の間で日本の現代アートについての認知を高めて頂くとともに、より深い研究や、世界への発信が容易になっていることを知って頂くことを目指すプログラム。

また、物理的な往来が困難となった新型コロナウイルス禍を経て、急激なオンライン化・デジタル化の進展など、新たなグローバル化の時代を迎えた世界の美術界に向けて、日本の現代アートの発信を強化し、理解を高めるための今後の振興策のあり方について、参加者・視聴者とともに考える機会とした。

14:00-14:05 開会、ご挨拶

逢坂恵理子（独立行政法人国立美術館理事長、国立新美術館長）

14:05-14:20 基調講演「現代アート振興の地平線—アート新世紀を創造する—」

平山直子（文化庁企画調整課長）

14:20-14:30 セッション1「アートプラットフォーム—日本の現代アートと世界をつなぐ—」

片岡真実（森美術館館長、日本現代アート委員会座長）

14:30-14:50 セッション2 ゲストプレゼンテーション

「世界に響く国際展—アーティストの国際的な活動の場を支援する—」

毛利悠子（アーティスト、サンパウロ・ビエンナーレ 2021 招聘作家）

山城知佳子（アーティスト、ソウル・メディアシティビエンナーレ 2021 招聘作家）

14:50-16:00 セッション3 パネルディスカッション、質疑応答

植松由佳（国立国際美術館学芸課長、日本現代アート委員会副座長）

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授）

成相肇（東京国立近代美術館美術課主任研究員）

川口雅子（国立西洋美術館情報資料室長）

大館奈津子（芸術公社／一色事務所）

毛利悠子（アーティスト、サンパウロ・ビエンナーレ 2021 招聘作家）

山城知佳子（アーティスト、ソウル・メディアシティビエンナーレ 2021 招聘作家）

モデレーター：片岡真実（森美術館館長、日本現代アート委員会座長）

会場：オンラインライブ配信

ライブ視聴者数：日本語 202 / 英語 13

アーカイブ再生回数：日本語 2,191 回 / 英語 488 回

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2021-symposium>

2022年3月11日（金）18:30-20:30

グローバル化する美術領域と日本の美術界：我が国現代アート振興の黎明期
—アート・コミュニケーションセンター（仮称）と国立美術館に期待する役割—

今後の日本のアート振興や美術館支援を展望し、平成30年より開始したアートプラットフォーム事業の今後の展開、令和4年（2022）度に独立行政法人国立美術館が開設予定の「アート・コミュニケーションセンター（仮称）」が日本のアートの発展に果たすべき役割などを紹介し、これからの日本のアート振興についてともに考えるプログラム。

セッション2では英国、オーストリア、シンガポールからゲストを迎える、各国におけるアート支援の事例を紹介。グローバルなネットワークを構築する美術館界において、持続可能な調査研究・収集のためのシステムをいかに整備し、ナショナル・コレク

ションを形成しているのか。専門家ネットワークの構築やコレクションの活用、アーティストの国際的評価を高める取り組みを通して、いかに国際的に発信をしているのか。具体的な事例を通して、日本の課題と現状、そして将来の展望を考察した。

後半のディスカッションでは、国内の美術関係者がパンデミックを経た時代の日本において実現可能なプラットフォームについて議論。新たな時代を迎える日本のアート界の未来や、その中でアート・コミュニケーションセンター（仮称）が担う役割について、登壇者・視聴者とともに考えた。

18:30-18:35 開会挨拶

逢坂恵理子（独立行政法人国立美術館理事長、国立新美術館長）

18:35-18:50 オープニングトーク「日本のアートの未来と日本の美術館への期待」

鰐淵洋子（文部科学大臣政務官）

18:50-19:00 セッション1「アート・コミュニケーションセンター（仮称）が目指すべきこと」

片岡真実（森美術館館長、日本現代アート委員会座長、アート・コミュニケーションセンター（仮称）エグゼクティブ・アドバイザー）

19:00-19:40 セッション2「諸外国のアート支援事例」

デヴィカ・シン（テート・モダン インターナショナル・アート部門キュレーター）

ジャスパー・シャープ（フィリアス ディレクター）

堀川理沙（ナショナル・ギャラリー・シンガポール ディレクター（キュレトリアル&コレクションズ））

モデレーター：片岡真実

19:40-20:30 ディスカッション「アート・コミュニケーションセンター（仮称）が果たし得る役割」

登壇者：保坂健二朗（滋賀県立美術館ディレクター（館長））

小池 藍（THE CREATIVE FUND, LLP 代表パートナー）

塩見有子（NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] ディレクター）

椿昇（現代美術家）

植松由佳（日本現代アート委員会副座長、国立国際美術館学芸課長）

モデレーター：片岡真実

会場：オンラインライブ配信

ライブ視聴者数：日本語 203 / 英語 28

アーカイブ再生回数：日本語 2,171 回 / 英語 431 回

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2021-symposium2>

2022年6月30日（木）17:00-18:30

人々が作るパブリック・コレクション：独・ルートヴィヒ美術館における現代美術コレクションの形成

18世紀末より、市民が主体的に活動する「ケンストフェライン（芸術協会）」の伝統を持つドイツでは、公的な美術館の活動にも市民が積極的にかかわってきた。ドイツのケルン市が運営するルートヴィヒ美術館もまた、その設立と活動に市民が大きな役割を果たしている公的美術館の一つである。美術館の構想は、ペーター&イレーネ・ルートヴィヒが、ポップ・アートやロシア・アヴァンギャルドなど、約350点の作品をケルン市に寄贈した1976年に始まった。また同館は、ケルンの弁護士だったヨーゼフ・ハウプリヒが1946年にケルン市に寄贈した表現主義や新即物主義などの近代美術や、レオ・フリット&レナーテ・グローバーの協力から始まった膨大な写真コレクションなど、多数の個人コレクターに由来する作品群を所蔵する。

一方、ルートヴィヒ美術館の現代美術コレクションの形成には、「ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会」も大きく貢献して

いる。1985年、現代美術振興と美術館支援を目的に設立されたこの組織は、現在約650人の会員からなり、2018年にはアメリカに国際支部も設けられた。協会は、さまざまなプログラムやイベントを実施するほか、作品の購入も支援している。また、ルートヴィヒ美術館の現代美術コレクションの拡大には、「ルートヴィヒ美術館芸術財団」が担う役割も大きい。2008年にケルン市が設立したこの財団は、地方自治体が設置したドイツで初めての財団のひとつであり、作品の寄贈に専念するコレクターを支援することで、美術館のコレクション拡大に寄与している。このようにルートヴィヒ美術館では、市民の協力を得るさまざまなシステムがうまく機能している。今回のプログラムでは、同館館長のイルマーズ・ズィヴィオーリを招聘し、美術館と市民との生きた交流とその成果を紹介いただき、日本における市民と美術館との関係について考える機会とした。

講師：イルマーズ・ズィヴィオーリ（ルートヴィヒ美術館館長）

モデレーター：片岡真実（日本現代アート委員会座長／アート・コミュニケーションセンター（仮称）エグゼクティブ・アドバイザー／森美術館館長）

会場：国立新美術館3階講堂およびオンラインライブ配信

参加者数：38名

ライブ視聴者数：日本語 127 / 英語 30

アーカイブ再生回数：日本語 797 回 / 英語 232 回

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2022-symposium>

2022年7月7日（木）12:00-13:30

日本の現代美術を翻訳する：言説、文脈、歴史

日本の戦後美術及び現代美術は、近年、欧米を中心とする海外での評価が高まっている。その背景の一つには、欧米の文脈とは異なる文脈で作られ、議論されてきたことがあると考えられる。こうした欧米での評価とともに、日本の側も、日本で作られてきた文脈や言説を紹介することによって、その解釈や評価に積極的に関わることが求められている。

本事業では、日本における文脈や言説の形成が海外からも見えるように、日本現代美術に関する重要文献を翻訳し、ウェブサイトで公開してき。また、翻訳、クロスチェック、校閲というプロセスを導入し、日本語を翻訳する際のスタイルガイドを作

成するなど、美術翻訳の質的向上にも力を入れてきた。日本国内における現代美術の評論や研究は長年にわたって行われており、その全貌は依然として海外からは見えにくい状況にある。海外において日本の現代美術の評論や研究はどう捉えられているのか、また、日本の現代美術について、どのような研究や評論、展示がなされているのか、海外で日本近現代美術の研究に携わってきた研究者を招いて、こうした問題を議論しつつ、今後どのように日本の現代美術の海外発信を行うのがよいかについても考察した。

12:00-12:05 開会挨拶

片岡真実（日本現代アート委員会座長／アート・コミュニケーションセンター（仮称）
エグゼクティブ・アドバイザー／森美術館館長）

12:05-12:20 事例紹介 文化庁アートプラットフォーム事業が進める文献翻訳

大館奈津子（日本現代アート委員会委員／翻訳事業意見交換会メンバー／芸術公社／一色事務所）

12:20-12:40 セッション1 戦後美術史「三位一体」論：どうしたら日本の現代美術が世界美術史に定位置を確保できるか

富井玲子（美術史家）

12:40-13:00 セッション2 アートを世界に向けて翻訳する：日本からの対話者不足とアートの危機

ウィリアム・マロッティ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学部准教授）

13:00-13:30 セッション3 ディスカッション、質疑応答

富井玲子

ウィリアム・マロッティ

大館奈津子

中嶋泉（翻訳事業意見交換会メンバー／大阪大学大学院人文学研究科准教授）

山本浩貴（翻訳事業意見交換会メンバー／金沢美術工芸大学美術科芸術学講師）

大久保玲奈（文化庁アートプラットフォーム事業事務局／翻訳家）

モダレーター：加治屋健司（日本現代アート委員会委員／翻訳事業意見交換会メンバー／東京大学大学院総合文化研究科教授）

会場：オンラインライブ配信

ライブ視聴者数：日本語 211

アーカイブ再生回数：日本語 1,171 回／英語 195 回

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2022-symposium2>

2023年2月23日（木・祝）14:00-18:15

日本のアート振興のこれから：五ヶ年を振り返り今後を考える

平成30（2018）年度より五ヶ年計画で始まった本事業は、令和5（2023）年度より継続的な事業として、独立行政法人国立美術館に引き継がれる。本シンポジウムでは、きたる3月で文化庁の委託事業としての区切りを迎えるのを機に、本事業の五ヶ年の成果を振り返りながら、日本のアート振興を展望した。

第一部では、文化庁アートプラットフォーム事業が推進してきたワークショップ、国際シンポジウム、ウェビナー、翻訳事業、全国美術館収蔵品データベース「SHÜZÖ」など、日本におけるアート振興のための基盤を整備する数々のプロジェクトを振り返った。本事業の運営委員会「日本現代アート委員会」の委員が登壇し、令和5（2023）年度以降の活動も含め、今後期待されるアート振興策、美術館政策などについて議論した。

第二部は、アートプラットフォーム事業の中核事業の一つと

第一部：アートプラットフォーム事業五ヶ年の歩みと今後求められるアート振興策

14:00-14:10 第一部開会、ご挨拶

片岡真実（森美術館館長、日本現代アート委員会座長、独立行政法人国立美術館エグゼクティブ・アドバイザー）

14:10-15:15 アートプラットフォーム事業五ヶ年の歩みと今後求められるアート振興策

植松由佳（国立国際美術館学芸課長、日本現代アート委員会副座長）

大館奈津子（芸術公社／一色事務所、日本現代アート委員会、翻訳事業意見交換会メンバー）

川口雅子（国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室 情報資料グループ グループリーダー、日本現代アート委員会）

成相肇（東京国立近代美術館美術課主任研究員（コレクション情報発信室長）、日本現代アート委員会）

モダレーター：片岡真実

15:15-15:30 質疑応答

第二部：英訳書籍刊行記念トーク

16:00-16:10 第二部開会、ご挨拶

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本現代アート委員会、翻訳事業意見交換会メンバー）

16:10-16:50 英訳書籍刊行記念トーク①『美術の日本近現代史：制度・言説・造型』

光田由里（多摩美術大学大学院教授、多摩美術大学アートアーカイブセンター所長）

聞き手：中嶋泉（大阪大学大学院准教授、翻訳事業意見交換会メンバー） 加治屋健司

16:50-17:05 質疑応答

17:20-18:00 英語書籍刊行記念トーク②『肉体のアナキズム：1960年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』

黒ダイライ

聞き手：大館奈津子

山本浩貴（金沢美術工芸大学講師、翻訳事業意見交換会メンバー）

18:00-18:15 質疑応答

して進めてきた二冊の書籍の海外出版を記念し、著者によるトークセッション。令和5（2023）年3月にベルギーのルーヴェン・ユニバーシティ・プレスからの出版された『History of Japanese Art after 1945: Institutions, Discourse, Practice』（原書：『美術の日本近現代史：制度・言説・造型』から7～9章を翻訳、著者：光田由里、北澤憲昭、暮沢剛巳、東京美術、2014年）から光田由里氏、そして『Anarchy of the Body: Undercurrents of Performance Art in 1960s Japan』（原書：黒ダイライ児『肉体のアナキズム』grambooks、2010年）の黒ダイライ児氏をお招きし、日本美術が海外に紹介される際の課題や、今後の日本・アジア美術研究に期待することなどについて有識者と掘り下げる。

会場：国立新美術館3階講堂およびオンラインライブ配信

参加者数：67名

ライブ視聴者数：日本語282／英語34

アーカイブ再生回数：日本語666回／英語159回

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/2022-symposium3>



撮影：金田幸三

対談企画

アートプラットフォーム事業が包括的に取り組んでいる様々なプログラムの成果が公開されているウェブサイト、Art Platform Japan (APJ) を有効活用するヒントをわかりやすく伝えるための読み物ページを作成し、ウェブサイトに掲載した。

APJウェブサイトは、掲載されている情報が複合的かつ膨大なため、アートプラットフォーム事業について詳しく知らないユーザーにとっては、一体何ができるのか、何が掲載されているのか、どのように有効活用すべきか、一見わかりにくい作りとなっていることが課題であった。また、エンターテイメント性をもつコンテンツや定期的に更新される情報も少ないため、ウェブサイトがどのような頻度で更新されているのかが見えづらく、コンスタントに訪れようとするモチベーションを保ちにくいという指摘もあった。

そのような課題を解決するため、APJについて何も知らないユーザーにとっても、APJとは何か、収蔵品情報、翻訳、プログラムの各柱について、わかりやすく理解を深めることができる対談スタイルの読み物ページとして編集を行った。



アメリカの視点から：アートプラットフォーム事業の現状と今後

チエルシー・フォックスウェル×ガブリエル・リッター×パート・ワインザー＝タマキ×大館奈津子

写真：仙石健 (.new)

編集・文：ヨンシャン・ガオ

翻訳：齊藤香菜

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/conversations2>



APJとは何か。5年の成果と行方

ロバート・キャンベル×片岡真実

写真：細倉真弓

編集・文：合六美和

翻訳：Lisa Hofmann-Kuroda

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/conversations1>



作家支援のあり方をめぐって。

笹本晃×神谷幸江

写真：Ofra Lapid

編集・文：合六美和

翻訳：Lisa Hofmann-Kuroda

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/conversations3>



「知らないことを知る」から学ぶ、国際文化交流とアーティスト支援のあり方

キャシー・ハルブライヒ×神谷幸江

写真: Ofra Lapid

編集・文: Kiri Falls

翻訳: 小出彩子

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/conversations4>



「SHÜZÖ」はどう使う? アーティストと考える収蔵品データベース

活用の道

藤井光×飯山由貴×成相肇×副田一穂×手錢和加子

写真: 細倉真弓

編集・文: 合六美和

翻訳: Lisa Hofmann-Kuroda

<https://artplatform.go.jp/ja/programs/conversations5>

10 ウェブサイト

海外の専門家から頻繁に指摘されている「日本のアートに関する情報にアクセスすることが難しく、知りたくても手がかりがない」という状況を改善すべく、日本における現代アートに関する情報を日英バイリンガルで国際的に発信するウェブサイトの構築を目指した。

文化庁アートプラットフォーム事業が取り組む3つの主要コンテンツ（収蔵品情報の可視化、英訳文献、プログラム）を軸に、ウェブサイト「Art Platform Japan」を制作し、2021年3月15日に一般公開。

国内外の研究者、キュレーター、アーティスト、学生、美術関係者や愛好家をメインターゲットとし、日英バイリンガルでの運用、サイト内での横断機能、全体のユーザビリティ（UX/UI）、リピーター・ユーザー維持といった視点から、様々な検討を進めてきた。

2018年度

初年度は、「文献の英語発信」と「オンライン発信」の2つについて発信強化分科会でワーキンググループを形成して検討を行った。ウェブサイトを通して達成すべきこととして、国内収蔵作品へのリサーチ件数の増加や国際協働事業の増加が挙げられ、その結果としての収蔵品の貸し出し数の増加は一つの指標となることが示された。

発信するコンテンツとして必要性が検討されたのは以下の情報。多岐にわたる情報を全て一つのサイトで完結すべきなのかについても議論が重ねられた。

1. 情報のオンライン提供

- ・ グラント: 展覧会助成金、リサーチグラント、レジデンシー、プライズ
- ・ 国内美術館のリンク、地図
- ・ 国際展の情報
- ・ コレクション
- ・ 資料データベース
- ・ 文献リスト（図書館情報へのリンクを含む）
- ・ 英訳された文献そのもの

2. その他のサービス

- ・ 作品や資料に関する情報照会の仲介
- ・ ワークショップの開催や参加者募集
- ・ 助成金へのサポートレター作成 など

なお、検討にあたっては、国内外における収蔵品や情報発信サイトの事例も比較検討した。

■総合

モンドリアン財団

<https://www.mondriaanfonds.nl/en/>

FRAME (フィンランド)

<https://frame-finland.fi/en/>

Office for Contemporary Art Norway

<https://www.oca.no>

■リサーチデータベース（総合、コレクション含む）

英国のナショナルアーカイブ

<http://www.nationalarchives.gov.uk/help-with-your-research/research-guides/art-and-artists-records-held-by-other-archives/>

スミソニアン: ワンクリックで画像、ビデオ、展覧会などキーワードをタグ別に結果表示

<https://www.si.edu/explore/art>

■コレクションデータベース

フランス文化省

http://www.culture.fr/eng/collections/resultats?keywords=art+contemporain&only_image=on&sel_search_mode=tous_les_termes&display_mode=mosaic

FRAC のコレクションデータベース

<http://www.lescollectionsdesfrac.fr/Search-and-view-artworks#>

シンガポールナショナルギャラリー

<https://www.nationalgallery.sg/artworks>

■その他海外サイト

Art UK:作家名を検索すると、所蔵場所一覧、画像（一部画像なし）、作家略歴などが見られる。Arts Council Englandが2003年から始めたもので、調査当時3,250組織、22万作品、4万アーティストの情報がアーカイブされていた。

<https://artuk.org/>

■国内ウェブサイト

YCAM

<https://www.ycam.jp>

静岡県立美術館

<http://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

横浜トリエンナーレ

<http://www.yokohamatriennale.jp/>

日本美術オーラルヒストリーアーカイブ

<http://www.oralarthistory.org/archives/>

アートイット（フォトレポート）

<https://www.art-it.asia/>

MAPPS Gateway

美術館所蔵品・資料の横断検索が可能なサイト。各美術館のウェブサイトの公開情報とリンク。

<https://gateway.jmaps.ne.jp/>

2019年度

構想当初は、あらゆる日本近現代美術の情報の入口になるポータルサイトを目指すとされたが、自主プログラムではない情報を集め、英語化していくという運用体制に懸念が生じることと、コンテンツによってそれぞれユーザーの行動が異なることも、ウェブのオリジナリティを損ない、サイトの特性を見えづらくることが共有された。そのため、アートプラットフォーム事業の主プログラムである3つのコンテンツに絞ったウェブサイトとして作成し、相互にリンク（+各サイトの ABOUTにおいて説明）および、大きな傘として名称に「Art Platform Japan」をつけることで、同じ枠組み内でのウェブサイトであることを示すこととなった。

また、他国運営のアート情報発信サイトを調査し、具体的な項目・サイトコンテンツの検討と絞り込みが進められた。

・OCA（ノルウェー）：映像に力を入れている。また、OCA主催のグラントプログラムがあり、APJとしても参考に。

・Frame（フィンランド）：日本の国規模では導入は難しいかもしれないが、インデックス機能は利用者にとって有効。

グラント情報もメインコンテンツとしてしっかり見せている。

- ・SIK-ISEA（スイス）：アーカイブが充実。重要な資料、作家や様々な分野のつながりの見せ方を参考に。
- ・Cultural Maestros（台湾）：作家一人一人とのインタビューなどあり、興味深い。
- ・Modern Art in Singapore（シンガポール）：昔の新聞記事や批評も閲覧可能で、アーカイブとして興味深い。

様々な事例を比較検討した結果、下記のような意見が交わされた。

- ・専門家がをターゲットとするウェブサイトとしては、書誌情報的な見せ方は一つの有効な方法かもしれない。
- ・ヨーロッパよりアジア各国がどう見せているかを見た方が、言語の差をどう乗り越えることができるのかということが見えるであろう。
- ・コレクションデータベースと連携していくことが重要。国会図書館のデジタルアーカイブとリンク（シンガポール）したり、作家のプロフィールページ（台湾）と連動するなど、まずはデータベースに掲載する作家情報の検討が必要なのではないか。

ブログ形式のページを設置することによって翻訳およびワークショップとデータベースの連携を示すこと（例：ワークショップのテーマに合わせて翻訳文献を選定、また関係するアーティスト・作品をデータベースエントリーするといった活用方法）、海外の作家などに対して対象とする助成金情報などの発信することなどが検討された。データベース構築チームとウェブデベロッパーとの連携は課題として翌年に引き継がれた。

2020年度

委員によるワーキング・グループでの議論が大方で揃ったことを受け、ワーキング・グループという形をなくし、事務局が各ワーキング・グループにヒアリングをしながら、コンテンツやサイト設計の連携を進めた。

前年度にはコンテンツを3本柱構成に絞り込むこととなったが、結果としてスタティックなデータ（収蔵、翻訳文献）とダイナミックな情報（プログラム）という枠組みをもとに、Resources（研究資料）と Programs（プログラム）の二つの入り口を開設する形で、2021年3月15日にArt Platform Japanウェブサイトがローンチされた。

制作にあたっては、日英バイリンガルであること、ウェブア

セビリティ、プライバシー・クッキーポリシーなどが考慮された。

2020年度の時点でのウェブサイト構成は以下の通り。

Programs（プログラム）

担当：ワークショップ・ワーキング・グループ

Resources（研究資料）

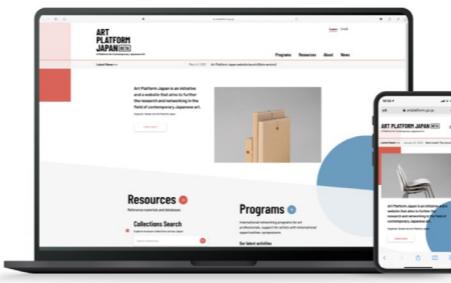
・SHŪZŌ: Japanese Museum Collections Search

（全国美術館収蔵品サーチ）

担当：収蔵情報活用分科会

Texts（英訳文献）

担当：翻訳ワーキング・グループ



2021年度

2020年度末に公開されたウェブサイト「Art Platform Japan」のユーザビリティ強化のため、下記の改修に向けた検討・調整を行った。

- ・プライバシー・クッキーポリシーへの対応
- ・アクセス解析ツールの導入
- ・新規データタイプの追加
- ・「日本の美術館における現代美術展」、「海外で開催された戦後日本現代美術展」のデータベース化と公開
- ・「日本の画廊 1945年以降」のデータベース化と公開
- ・既存データベースへの情報拡充（収蔵・作家・美術館・文献資料）
- ・作品画像表示機能の追加
- ・研究資料のページのメニュー構成を整理
- ・新規ページの追加
- ・既約文献
- ・Book Project
- ・サイト内データ間のエンティティリンク（収蔵品・作家・文献）
- ・サイト全般のユーザインターフェイスの改善と使い勝手の向上
- ・詳細検索機能の充実

・さまざまな画面サイズの端末にデザインを最適化

・行間などを見直し読みやすさを向上

・フリーワード検索の精度の向上

・作家、美術館での検索結果件数を（）内に表示

・ユーザテストの実施

・研究者（国内）・キュレーター（国外）の2名の有識者にヒアリングを実施し現サイトにおける課題の洗い出しを実施

・海外メディアへのバナー広告出稿の実施

・広告用ランディングページ（LP）の作成

・API公開、ドキュメント整備

・運営チーム・開発チームでの開発・承認フローの確立

2022年度

令和4（2022）年4月、文化庁がアートプラットフォーム事業の一環として2018年から2021年まで推進したウェブサイトの制作進行は独立行政法人国立美術館本部国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室に継承された。2022年度は下記の改修に向けた検討・調整を行った。

- ・2022年12月にトップページのリニューアルを実施「ベータ」表記の削除
- 作品画像や文献資料がランダムに表示され、各コンテンツの内容がより伝わるデザインに変更
- ・Amazon ElasticsearchからAmazon OpenSearchへの切り替え
- ・OpenSearch環境での新しい管理画面の作成
- ・SPARQLの公開
- ・収蔵品IDのルールを他のIDのルールと統一（ゼロ桁揃えは無し）
- ・作家情報のトップページに詳細検索機能を追加
- ・作家詳細ページのデザインの変更（活動領域、性別）
- ・美術館情報のトップページに詳細検索機能を追加
- ・展覧会のトップページでデータベースの元となる調査資料（PDF）へのリンクを作成、および凡例へのリンクを強化
- ・展覧会カタログのデータベースを公開
- ・画廊調査に詳細検索を追加、関連画廊を表示
- ・文献資料ページの検索機能を追加
- ・プログラムに対談企画のページを追加

アクセス解析

2021年9月22日よりGoogle Analyticsでのアクセス解析を開始した。GDPRに準拠したプライバシーポリシーの下で運営されている本サイトでは、Cookie取得に同意をしたユーザーの数字のみしか取ることができないため、表に出てくる数字と実態には数倍の乖離があるものと思われる。アクセス解析の傾向としては、公開以降ユーザ数やページビュー数ともに数値は増加しており順調に伸びている。

本サイトは非常に専門性の高い情報を扱うウェブサイトであるため、Google Analyticsなどの定量的な計測ツールと平行して、実際の主要ターゲットユーザー（海外の研究者やキュレーターなど）へのインタビューやユーザーテストといった定性的な分析を行うことが重要になる。

2021年度には、国内外3名の研究者、キュレーターなどにご協力いただき、インタビューやユーザーテストによる課題の洗い出しを行い、多くの課題の発見と改善につながった。

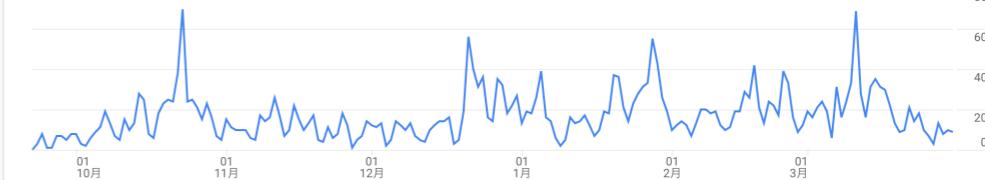
今後も、SHŪZŌ、翻訳、作家一覧などのコンテンツの増加に合わせ、適切なタイミングでユーザーテストを行うことで、アクセス解析では見えてこない細かなユーザビリティ改善を行うことが重要である。

2021年度

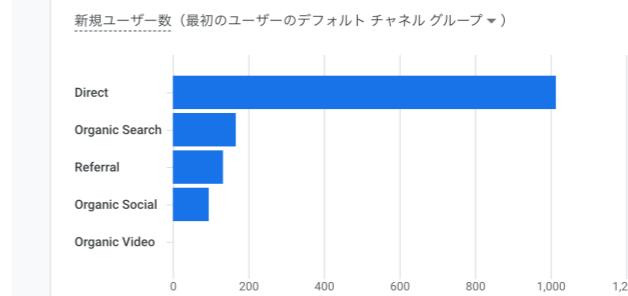
← 戻る
統合レポート

カスタム 2021年9月22日～2022年3月31日 保存...

ユーザー 新規ユーザー数 平均エンゲージメント時間 合計収益
1,409 1,410 5分46秒 ¥0



新規ユーザーの参照元



上位のキャンペーン

セッション	2,706
セッションのデフォルト チャンネル グループ	セッション
Referral	2,706
Direct	1,844
Organic Search	728
Organic Social	230
Unassigned	171
Organic Shopping	7
Display	4

ユーザー獲得レポートを表示 →

トラフィック獲得レポートを表示 →

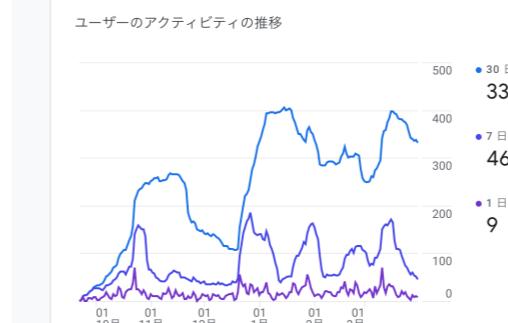
ユーザー ▾ (国)



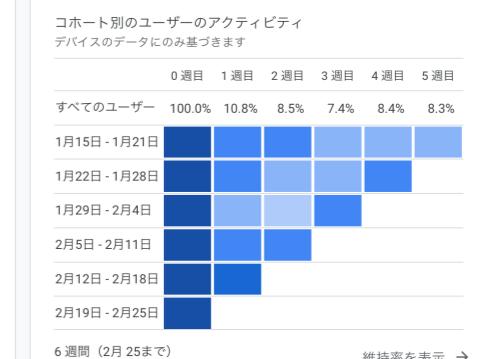
国	ユーザー
Japan	1,110
United States	112
United Kingdom	24
South Korea	17
France	14
Germany	12
China	11

国を表示 →

アクティブユーザーの傾向



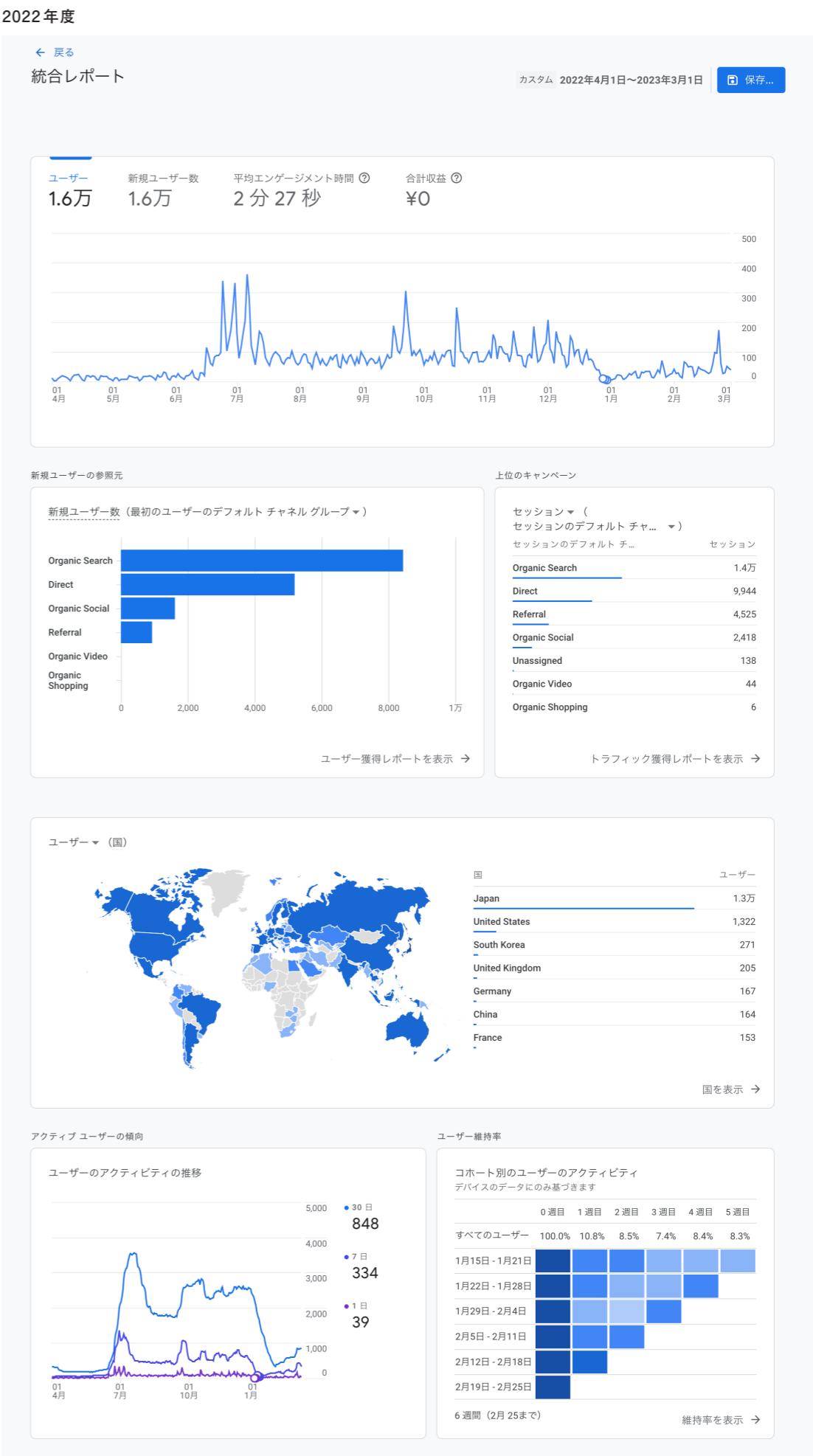
ユーザー維持率



維持率を表示 →

Google Analyticsより抜粋

10 ウェブサイト 69





11 事業広報

広報活動の概要

「文化庁アートプラットフォーム事業」について、メディアを通して、様々な現代アート関係者や、広く一般の方に正しく認知していただくため、同事業の取り組みを継続的にメディアに紹介。現代アート振興にまつわる政策課題や日本の現代アート市場に关心の高かった文化系メディアに加え、広く現代アート振興の問題や課題に关心を持つ一般メディアやオンラインメディア、アート業界関係者や一般の参加者などに向けて間口の広い広報活動を行なった。

イベントPRについては、開催告知としては美術関連のメディアに対するメールやSNS、電話などを駆使した周知の徹底、記者クラブや外国特派員協会（FCCJ）への投げ込み、開催当日や開催後のメディアアプローチなどを継続し、メディアとの良好な関係を維持した。プログラムの内容によってはメディア向けの勉強会も実施し、情報を交換し互いの理解を深めつつ、継続的な関係構築を行なった。

日英バイリンガルの Art Platform Japan ウェブサイトが立ち上がった2021年3月以降は、国内にとどまらず、海外に向けての広報も積極的に行い、国際的に活躍するアートの専門家に向けた情報発信および連携を行なった。

メディアリレーションズ以外にも、メーリングリスト（2023年3月時点3,204件）やAPJウェブサイト内のニュースページにおいて、日英バイリンガルでイベント告知やアーカイブ記事や動画のお知らせなどの発信を継続して行なった。

2022年2月21日-3月20日にかけては、海外のウェブアートメディア5媒体において1ヶ月間のウェブナー広告キャンペーンを実施し、また、2023年2月にはアートにおける世界規模の情報網であるe-fluxでの情報配信を実施し、Art Platform Japanウェブサイトの国際的な周知につとめた。

広報活動の総括

事業内容が多岐にわたるArt Platform Japanのプログラムは、専門性の高いテーマが多いこともあり、シンポジウム等のイベント単発の広報となる場合、メディア露出は限定的となることもあったが、リサーチや学びの観点で継続して参加していたメ

ディアも多く、日本の文化政策の現状がわかる機会となったという肯定的な意見が多く聞かれ、メディアのアクションは総じて良好であった。プレスへの継続的啓発という意味でも、国が主導してアカデミック層を巻き込んでこのようなディスカッションの場を実施する意義は大きいという意見も聞かれた。

メディア露出の観点からは、政策としてのメディアへの継続的な紹介、交流の機会の継続、文脈の創出によるメディア露出の確率増、集客力・人的ネットワークを持つ組織との連携等も提案された。

[広報協力]

- ・株式会社井之上パブリックリレーションズ
- ・スタートPR合同会社
- ・クレアブ株式会社
- ・リレーリー有限責任事業組合

[配信網、SNS]

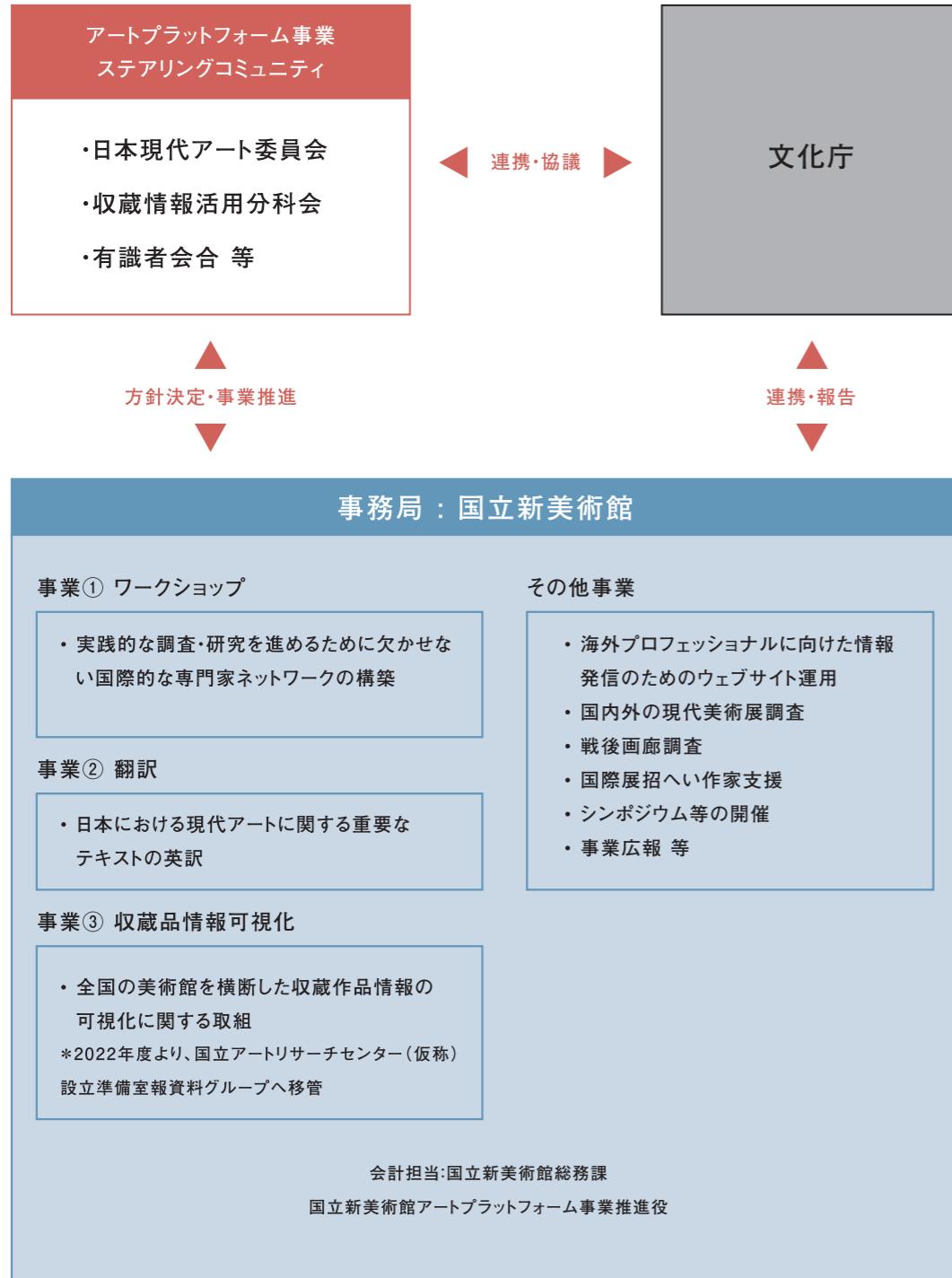
- ・PR TIMES (文化庁)
- ・ツイッター (@prmag_bunka)
- ・Global PR Wire
- ・e-flux

[ウェブナー広告キャンペーン掲載媒体]

- ・The Art Newspaper
- ・ArtAsiaPacific
- ・Frieze
- ・CAA Review / Hyperallergic



2018-2022年度の本事業は、文化庁からの委託を受けた国立新美術館（館長：逢坂恵理子）が事務局を運営。



2023年3月時点

日本現代アート委員会（2022年度）

文化庁アートプラットフォーム事業の実施に係るステアリングコミッティーとして、美術館関係者、評論関係者、美術メディア関係者、学識経験者、コレクター等、幅広い立場の関係者による「日本現代アート委員会」を設置、運営。

（敬称略、五十音順、2023年3月時点）

[座長]	片岡真実	森美術館館長
[副座長]	植松由佳	国立国際美術館学芸課長
[委員]	大館奈津子	芸術公社／一色事務所 岡部美紀
	加治屋健司	東京大学大学院総合文化研究科教授
	神谷幸江	美術評論・キュレーター
	川口雅子	国立アートリサーチセンター設置準備室情報資料グループリーダー
	成相肇	東京国立近代美術館美術課主任研究員（コレクション情報発信室長）
[臨時委員]	碓井千鶴	アーツカウンシル東京企画室企画助成課シニア・プログラムオフィサー
	小山登美夫	一般社団法人日本現代美術商協会（CADAN）代表理事
	今野真理子	アーツカウンシル東京企画室企画助成課シニア・プログラムオフィサー
		一般社団法人日本芸術写真協会（FAPA）石井代表理事、石田理事、高橋監事
[顧問]	中尾浩治	アートコレクター／アートプロデューサー

翻訳事業意見交換会メンバー（2022年度）

大館 奈津子	芸術公社／一色事務所
加治屋 健司	東京大学大学院 総合文化研究科 教授
中嶋 泉	大阪大学大学院 文学研究科 准教授
山本浩貴	金沢美術工芸大学 美術工芸学部美術科芸術学専攻 講師

国際的なギャラリー、国内外の美術館・文化団体、アーティストスタジオ、翻訳・通訳、出版社、金融機関などでの幅広い経験を持ち、日本語および英語での文化事業のプロジェクトマネジメント実績が豊かなメンバーが集まり、2018年度から国立新美術館と連携し、アートプラットフォーム事業の事務局業務を推進。

(2023年3月時点)

野崎真理	(国立新美術館)
土井未穂	(2018年11月～：事務局ディレクター、ワークショップ事業主担当)
五十嵐三慧	(2019年3月～：翻訳事業主担当)
大久保玲奈	(2019年3月～：翻訳事業主担当)
手錢和加子	(2019年8月～：収蔵品情報可視化事業主担当)
望月麻美子	(2020年8月～：翻訳事業主担当)
小池麻紀	(2021年9月～：翻訳事業主担当)
作田知樹	(2018年5月～2020年3月：事務局ディレクター)

全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」

リサーチャー：岡俊一郎（2019年7月～）、小林紗由里（2021年1月～2022年3月）

日本現代美術展調査

国外展調査協力：高部尚子（2021年4月～）

ウェブサイト

柴原聰子（2019年8月～2021年3月：ウェブサイト制作担当）

萩原俊矢（2019年9月～：ウェブサイトディレクション）

インフォ・ラウンジ株式会社（2020年度、2021年度、2022年度：ウェブサイト制作・データベース構築）

株式会社ジーコモ

三村小松山縣法律事務所

その他、多くの有識者や実務の専門家の皆さんにより本事業は推進された。



APJ 予算額	2022	2021	2020	2019	2018	合計
	予算額	2022	2021	2020	2019	2018
事業別						
委員会運営関連費用	668,738	639,981	671,640	1,054,590	1,765,890	4,769,597
プログラム事業	25,443,541	20,602,348	13,663,854	18,877,095	24,506,927	101,969,803
翻訳事業	42,753,420	18,994,975	9,511,077	8,348,013	(委員会に含む)	74,834,015
収蔵品情報可視化事業・ウェブサイト	2,527,970	33,815,533	34,899,439	4,721,775	669,680	76,628,457
その他調査事業	3,432,097	3,846,717	3,605,450	5,409,215	15,691,090	29,488,647
作家支援事業	40,814,301	3,133,656	0	4,880,078	na	26,959,029
事務局関連費用	28,414,234	17,306,790	36,098,540	30,470,853	14,766,413	128,761,001
事業費合計	144,054,301	98,340,000	98,450,000	73,761,619	57,400,000	443,410,549

主なスケジュール・操舵組織（2018-2022年度）

2018年度

日本アート創生委員会

国際情勢に精通する国内の近現代美術館キュレーター、美術史家、ジャーナリスト等を委員とし、国際交流基金および現代美術市場に精通したギャラリストをオブザーバーとした検討委員会「アート市場活性化事業日本アート創生委員会」を創設。10月以降、6回の委員会を開催し、具体策について議論した。あわせて、文献等翻訳のためのワーキンググループおよび海外発信のためのウェブサイト検討ワーキンググループを設立し、具体的な推進事業の検討に着手し、その後の取り組みの基礎を築いた。

日本アート創生委員会構成員

[本会委員]

絹谷 健二 (株)三井住友銀行 成長産業クラスター 第4グループ グループ長
園府寺 司 大阪大学大学院文学研究科・文学部教授
柴山 桂太 京都大学大学院人間・環境学研究科准教授
田中 大 思文閣代表取締役社長
中村 政人 3331 Arts Chiyoda 統括ディレクター / 東京藝術大学美術学部教授
蓑 豊 兵庫県立美術館館長
山本 豊津 (一社)全国美術商連合会常務理事 / 東京画廊代表取締役社長
油井 清光 神戸大学大学院人文学研究科教授

[内部委員]

青木保 国立新美術館館長

日本アート創生委員会

2018年9月7日（金）15:00-16:10 国立新美術館4階会議室
2019年3月13日（水）13:00-15:00 国立新美術館3階研修室A/B

収蔵情報活用分科会

1、目的と方針

[目的]：国内美術館等に収蔵された作品のデータベース化、情報共有を促進し、アクセシビリティを向上させることで、研究および活用の振興を図る。

[方針]：これまでの美術品データベースの課題とデジタル化作業の負担に耐えられなくなっている現状から、各館の収蔵管理業務デジタル化の推進と連動したデータベース化促進の方向性、およびセンター機能を持つ拠点による総合的な支援の二方向から検討する。

2、経緯と進捗

2018年11月20日に第一回の委員会を開催した。主に公立館・私立館の若手学芸員を中心に、情報社会政策に関連する研究者を加えた委員により、具体的な情報収集および調査・検討の必要性と課題についての検討を行った（訪問ヒアリング2回、会合4回）。検討の結果を踏まえ、《共同利用機関「美術品総合デジタルアーカイブセンター」の設立（提言）》として委員会に上程した。

収蔵情報活用分科会委員（2019年3月時点）

生貝 直人 東洋大学経済学部准教授、デジタルアーカイブ学会理事
伊東 謙介 東京大学学際情報学府 社会情報学博士課程
井波 吉太郎 東京都現代美術館
大下 裕司 大阪中之島美術館準備室
小金沢 智 太田市美術館・図書館
小林 絵美子 藤沢市アートスペース
高橋 洋介 金沢21世紀美術館
成相 肇 東京ステーションギャラリー *座長
藤本 兵馬 アートプロデューサー
山峰 潤也 水戸芸術館 *副座長

収蔵情報活用分科会

2018年11月20日（火）19:00-21:00 東京ステーションギャラリー
2018年12月18日（月）19:00-20:45 東京ステーションギャラリー
2019年1月28日（月）19:00-20:45 東京ステーションギャラリー
2019年2月22日（金）19:00-21:45 東京ステーションギャラリー

ヒアリング実績

2019年1月7日（月）15:00-17:00 早稲田システム開発社

- ・全国美術館会議等との連携
- ・早稲田システム開発社ヒアリング報告

2019年2月2日（土）13:30-15:30 横浜美術館学芸グループ

- ・オンライン型収蔵管理データベースシステムの現状と課題
- ・ヒアリング報告
- ・提言案の検討

発信強化分科会

1、目的と方針

[目的]：すでに学術的、市場的な理解が深まりつつある戦後日本美術に加え、80年代、90年代から最も新しいアートの動向までについて積極的に海外に向けて発信し、海外の関係者（特に美術館、キュレーター、学術関係者、批評家など）の理解を深化させ、アート自体の評価を高める為の活動を行う。結果として経済価値の向上を図る。

[方針]：推進期間は五ヶ年とし毎年継続させる。調査・検討などをベースに取り組み、目的の実現を目指す。またその後も同様の事業が継続されるようなシステムあるいは組織の構築が行われるよう、関係各所をリードし、実現に結びつける。

2、経緯と進捗

2018年10月24日に課題を共有するメンバーで第一回の委員会を開催後、全8回の会合を開催。

各WGごとに実施事業を策定・推進。

2018年の実績：

WG (1)：2019年3月にキュレーター・サミット会議（日本現代アートサミット）を開催。

WG (2)：第一段階として既存の著作、資料の選定、英訳、翻訳者、出版社などを検討中。

WG (3)：日本における現代アートの情報について議論し、Webを活用した海外向け発信が必要との結論。今後、具体論に入る。

五か年の目標：

WG (1)：海外関係者とのネットワークづくりを推進し、海外での企画展を実現する。

WG (2)：既存資料や著作の英文化、アンソロジー・通史などの英文書籍の発刊を目指す。

WG (3)：80年代、90年代に限定せず今日までを入れた日本の現代アートの情報や状況

（作品リスト、企画展、アーティスト、関係資料など）についてWebを活用し海外発信を推進する。

発信強化分科会（2019年3月時点）

[委員]

植松 由佳	国立国際美術館
大館 奈津子	芸術公社／一色事務所
片岡 真実	森美術館キュレーター *座長
神谷 幸江	NY ジャパンソサエティ
中尾 浩治	アートプロデューサー *副座長
林 道郎	美術評論家、上智大学教授
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
鷺田 めるる	インディペンデントキュレーター

[オブザーバー]

岡部 美紀	国際交流基金
藏屋 美香	東京国立近代美術館企画課長
蜷川 敦子	Take Ninagawa 代表

発信強化分科会

2018年10月24日（水）10:00-12:30	国立新美術館
2018年11月9日（金）10:00-12:30	国立新美術館
2018年12月18日（月）19:00-21:00	丸ビルカンファレンスホール
2018年12月28日（金）10:00-12:00	文化庁会議室
2018年12月28日（金）12:30-14:30	文化庁会議室
2019年1月13日（日）13:00-15:00	国立新美術館
2019年2月6日（水）13:00-15:00	国立新美術館
2019年3月5日（火）12:00-13:00	国立新美術館

2019年度

平成30年度の成果を受け、令和元年には新たに「文化庁アートプラットフォーム事業」を立ちあげ、検討委員会も「日本現代アート委員会」と名称を変え、委員も増強した。

文化庁ワークショップワーキンググループ、翻訳ワーキンググループ、ウェブサイトワーキンググループの活動を継続し、また、平成30年度に別途検討を進めていた国内美術館における収蔵品のデータベース化の事業についても、ウェブサイトワーキング

グループと連動しながら推進。文化庁アートプラットフォーム事業としては、令和5年度以降を目指し、日本の現代美術が継続的に国際的なアートシーンへ発信されていく持続可能なモデルの構築を目指す。そのなかではウェブサイトの継続的な運営、海外キュレーターや研究者の調査の窓口などの機能を備えた安定的な組織の設置も視野に入れた。

日本現代アート委員会（2020年3月時点）

〔委員〕

片岡 真実 森美術館館長 *座長
植松 由佳 国立国際美術館主任研究員 *副座長
岡部 美紀
大館 奈津子 芸術公社／一色事務所
神谷 幸江 NYジャパンソサエティ
アンドリュー・マークル ライター／編集者
中尾 浩治 アートプロデューサー
成相 肇 東京ステーションギャラリー学芸員

〔内部委員〕

長屋光枝 国立新美術館学芸課長

〔臨時委員〕

一般社団法人日本現代美術商協会
一般社団法人日本芸術写真協会

〔日本現代アート委員会（予備会合・臨時会合3回を含む全9回）〕

2019年4月10日（水）10:15-12:15 新美術館 3階 研修室A
2019年6月5日（水）13:00-15:00 旧文部省庁舎2階第2会議室
2019年7月10日（水）13:00-15:00 国立新美術館 4階会議室
2019年9月17日（水）13:00-15:00 国立新美術館 3階研修室C
2019年10月3日（木）12:30-13:45 国立新美術館 4階会議室
2019年11月6日（水）13:00-15:00 国立新美術館 3階研修室C
2019年12月11日（水）13:00-15:00 国立新美術館 3階研修室C
2020年1月22日（水）13:00-15:00 国立新美術館 3階研修室C
2020年2月27日（木）13:00-15:00 国立新美術館 3階研修室A+B

ワークショップ・ワーキンググループ担当委員（2020年3月時点）

植松 由佳 （国立国際美術館主任研究員）*2019年度主担当
片岡 真実 （森美術館館長）*主査
岡部 美紀

ワークショップ・ワーキンググループ会合（全4回）

2019年8月6日（木）14:00-16:00 国立新美術館 4階会議室
2019年8月28日（水）17:30-18:45 国立新美術館 4階会議室
2019年9月10日（火）12:30-14:00 国立新美術館 4階会議室
2019年10月17日（火）15:30-17:00 国立新美術館 3階研修室C
2020年2月10日（月）12:00-14:00 森美術館内会議室

収蔵情報活用分科会担当委員（2020年3月時点）

〔委員〕
大向 一輝 東京大学大学院准教授
川口 雅子 国立西洋美術館主任研究員
成相 肇 東京ステーションギャラリー学芸員 *主査
山峰 潤也 水戸芸術館現代美術センター学芸員 *副査

〔臨時委員〕

篠原 誠司 足利市立美術館学芸員
花卉 久穂 東京国立近代美術館工芸館主任研究員

収蔵情報活用分科会（予備会合3回を含む全10回）

2019年4月18日
2019年5月30日（日）16:30-18:30 東京ステーションギャラリー会議室
2019年7月5日（水）15:00-17:10 東京ステーションギャラリー会議室
2019年8月7日（水）17:00-20:00 東京ステーションギャラリー会議室
2019年9月6日（金）13:00-15:30 東京ステーションギャラリー会議室
2019年10月9日（水）15:00-17:00 東京ステーションギャラリー会議室
2019年11月12日（火）12:30-14:30 東京ステーションギャラリー会議室
2019年12月10日（火）16:00-18:00 東京ステーションギャラリー会議室
2020年1月21日（火）14:00-16:00 東京ステーションギャラリー会議室
2020年2月26日（水）13:00-15:00 東京ステーションギャラリー会議室

ウェブサイト・ワーキング・グループ担当委員（2020年3月時点）

大館 奈津子	芸術公社／一色事務所
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
中尾 浩治	アートプロデューサー
成相 肇	東京ステーションギャラリー学芸員

ウェブサイト・ワーキング・グループ会合（全6回）

2019年7月22日（月）10:00-12:00	国立新美術館 3階研修室A
2019年8月29日（木）13:00-15:00	国立新美術館 3階研修室A
2019年9月30日（月）13:30-15:30	国立新美術館 3階研修室A
2019年12月4日（水）9:30-11:30	国立新美術館 3階研修室A
2019年12月23日（月）14:00-16:00	国立新美術館 3階研修室C
2020年2月25日（火）16:00-17:00	文化庁5階

2020年度

日本現代アート委員会（2021年3月時点）

〔委員〕

植松由佳	国立国際美術館主任研究員 *副座長
大館奈津子	芸術公社／一色事務所
岡部美紀	
片岡真実	森美術館館長*座長
加治屋健司	東京大学大学院総合文化研究科教授
川口雅子	国立西洋美術館情報資料室長
成相肇	東京ステーションギャラリー学芸員
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
ラワンチャイクン寿子	福岡アジア美術館学芸員

〔臨時委員〕

碓井千鶴	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー
小山登美夫	一般社団法人日本現代美術商協会（CADAN）代表理事
今野真理子	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー
一般社団法人日本芸術写真協会	FAPA 石井代表理事、石田理事、高橋監事

〔顧問〕

神谷幸江	NY ジャパンソサエティギャラリー館長
中尾浩治	アートコレクター／アートプロデューサー

日本現代アート委員会会合（全8回）

2020年4月13日（月）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2020年6月1日（月）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2020年8月3日（月）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2020年9月16日（水）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2020年11月10日（火）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2020年12月11日（金）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年1月26日（火）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年3月10日（水）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）

ワークショップ・ワーキング・グループ担当委員（2021年3月現在）

植松由佳	国立国際美術館主任研究員
岡部美紀	
大館奈津子	芸術公社／一色事務所
片岡真実	森美術館館長
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
成相肇	東京ステーションギャラリー学芸員
ラワンチャイクン寿子	福岡アジア美術館学芸員

ワークショップ・ワーキンググループ会合（全4回）

2020年5月26日（火）13:00-14:00	オンライン会議（Zoom）
2020年6月11日（木）17:00-19:00	オンライン会議（Zoom）
2020年11月12日（木）16:00-18:00	オンライン会議（Zoom）
2021年3月2日（火）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）

翻訳ワーキング・グループ担当委員（2021年3月時点）

大館奈津子	芸術公社／一色事務所
加治屋健司	東京大学大学院 総合文化研究科 教授
アンドリュー・マークル	ライター／編集者

翻訳ワーキング・グループ会合（全13回）

2020年4月10日（金）14:00-16:00（1/2）	オンライン会議（Zoom）
2020年4月22日（水）14:00-16:00（2/2）	オンライン会議（Zoom）
2020年4月30日（水）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2020年5月7日（木）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）

2020年5月13日（水）15:30-17:30	オンライン会議（Zoom）
2020年5月22日（金）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2020年5月28日（木）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2020年7月15日（水）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2020年9月23日（水）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2020年10月26日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2020年12月2日（水）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2021年2月3日（水）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2021年3月2日（火）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）

画廊調査に関する意見交換会議参加者（2021年3月時点）

江上ゆか	兵庫県立美術館
坂上しのぶ	ヤマザキマザック美術館
篠原誠司	足利市立美術館
成相肇	東京ステーションギャラリー
三上豊	東京文化財研究所客員研究員
渡部葉子	慶應義塾大学アート・センター

画廊調査に関する意見交換会議（全3回）

収蔵情報活用分科会担当委員（2021年3月時点）

[委員]

大向一輝	東京大学大学院 人文社会系研究科
川口雅子	国立西洋美術館 *副査
成相 肇	東京ステーションギャラリー *主査
山峰潤也	（一財）東京アートアクセラレーション共同代表/ANB TOKYO ディレクター

2020年9月29日（火）10:00-11:55 オンライン会議（Zoom）

2020年12月15日（火）10:00-11:55 オンライン会議（Zoom）

2021年2月2日（火）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）

2021年度

日本現代アート委員会（2022年3月時点）

[臨時委員]

篠原誠司	足利市立美術館※「日本の画廊調査 1945年以降」代表
花井久穂	国立工芸館

[委員]

植松由佳	国立国際美術館主任研究員*副座長
大館奈津子	芸術公社／一色事務所
岡部美紀	
片岡真実	森美術館館長*座長
加治屋健司	東京大学大学院総合文化研究科教授
神谷幸江	美術評論・キュレーター
川口雅子	国立西洋美術館情報資料室長
成相肇	東京国立近代美術館美術課主任研究員

[臨時委員]

碓井千鶴	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー
小山登美夫	一般社団法人日本現代美術商協会（CADAN）代表理事
今野真理子	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー
一般社団法人日本芸術写真協会（FAPA）	石井代表理事、石田理事、高橋監事

[顧問]

中尾浩治	アートコレクター／アートプロデューサー
------	---------------------

収蔵情報活用分科会

2020年4月8日（水）10:00-12:10	オンライン会議（Zoom）
2020年5月13日（水）10:00-12:10	オンライン会議（Zoom）
2020年6月10日（水）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2020年7月8日（水）15:00-17:00	国立新美術館研修室A・B
2020年9月3日（木）13:00-15:30	国立新美術館3階研修室A・B
2020年10月1日（木）14:00-16:00	国立新美術館3階研修室A・B
2020年11月5日（木）10:00-12:00	国立新美術館3階研修室A・B
2020年12月3日（木）10:00-12:15	国立新美術館3階研修室A・B
2021年1月15日（金）10:00-12:40	オンライン会議（Zoom）
2021年2月4日（木）11:00-13:00	オンライン会議（Zoom）
2021年2月18日（木）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年3月8日（月）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
2021年3月22日（月）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）

日本現代アート委員会（全7回）

2021年4月9日（金）13:00-15:00 オンライン会議（Zoom）
2021年6月7日（月）13:00-15:00 オンライン会議（Zoom）
2021年7月27日（火）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）
2021年9月8日（水）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）
2021年11月19日（金）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）
2022年1月14日（金）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）
2022年3月15日（火）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）

2021年6月24日（木）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年7月20日（火）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）

2021年8月3日（火）15:30-17:30 オンライン会議（Zoom）

2021年8月24日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年9月7日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年9月21日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年10月5日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年8月3日（火）15:30-17:30 オンライン会議（Zoom）

2021年8月24日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年9月7日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年9月21日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年10月5日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年10月19日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年11月2日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年11月16日（火）14:00-16:00 オンライン会議（Zoom）

2021年11月30日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2021年12月14日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2022年1月11日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2022年1月25日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2022年2月1日（火）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）

2022年2月7日（月）14:00-16:00 オンライン会議（Zoom）

2022年2月14日（月）10:00-12:00 オンライン会議（Zoom）

2022年2月22日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

2022年3月8日（火）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

ワークショップ・ワーキンググループ担当委員（2022年3月時点）

植松由佳 国立国際美術館主任研究員
岡部美紀
大館奈津子 芸術公社／一色事務所
加治屋健司 東京大学大学院総合文化研究科教授
片岡真実 森美術館館長
神谷幸江 美術評論・キュレーター
成相肇 東京国立近代美術館美術課主任研究員

ワークショップ・ワーキンググループ会合（全4回）

2021年5月12日（水）13:00-14:20 オンライン会議（Zoom）
2021年5月28日（金）10:00-11:10 オンライン会議（Zoom）
2021年12月20日（月）10:00-10:50 オンライン会議（Zoom）
2021年12月24日（金）13:30-14:10 オンライン会議（Zoom）

テーマ・アドバイザー（肩書きは2021年3月当時）

翻訳事業意見交換会メンバー（2022年3月時点）

大館奈津子 芸術公社／一色事務所
加治屋健司 東京大学大学院 総合文化研究科 教授
中嶋泉 大阪大学大学院 文学研究科 准教授
山本浩貴 金沢美術工芸大学 美術工芸学部美術科芸術学専攻 講師

翻訳事業意見交換会（全22回）

2021年5月6日（木）14:30-16:30 オンライン会議（Zoom）
2021年5月24日（月）13:00-15:00 オンライン会議（Zoom）
2021年6月10日（木）15:00-17:00 オンライン会議（Zoom）

[コレクティヴィズム]

富井玲子 美術史家・ポンジャ現懇主宰
橋川英規 東京文化財研究所 主任研究員
筒井宏樹 鳥取大学 准教授
山本和弘 栃木県立美術館 シニア・キュレーター

[評論家]

片岡真実 森美術館 館長
松本透 長野県信濃美術館 館長
難波祐子 NAMBA SACHIKO ART OFFICE キュレーター
山下晃平 京都市立芸術大学 非常勤講師

[日本のアートとフェミニズム]

北原恵	大阪大学大学院 教授
小勝禮子	京都芸術大学 非常勤講師
中嶋泉	大阪大学大学院 准教授
由本みどり	ニュージャージー・シティ大学 准教授・ギャラリーディレクター

[アジアの中の日本]

遠藤水城	一般社団法人 HAPS 代表
佐々木玄太郎	熊本市現代美術館 学芸員
古川美佳	朝鮮美術文化研究者
後小路雅弘	とかげ文庫主人

[写真とメディア]

畠中実	NTTインターフェース・センター [ICC] 主任学芸員
金子隆一	写真史家
笠原美智子	石橋財団アーティゾン美術館 副館長
馬定延	明治大学 特任講師
西村智弘	東京造形大学 非常勤講師

[環境/社会/制度]

足立元	二松学舎大学 専任講師
成相肇	東京ステーションギャラリー 学芸員
山本浩貴	東京藝術大学大学院 助教

*2022年度に新たに選定された「アーティスト・ライティング」、「学校と教育」、「80年代」については、翻訳事業意見交換会メンバーが文献を推薦。

収蔵情報活用委員会（2022年3月時点）

〔委員〕	
大向一輝	東京大学大学院 人文社会系研究科
川口雅子	国立西洋美術館 *副査
副田一穂	愛知県美術館
成相 肇	東京国立近代美術館 *主査

〔臨時委員〕

篠原誠司	足利市立美術館 *「日本の画廊調査 1945年以降」代表
花井久穂	東京国立近代美術館
山峰潤也	(一財) 東京アートアクセラレーション共同代表/ANB TOKYO ディレクター

収蔵情報活用委員会（全12回）

2021年4月12日（月）14:00-16:00	国立新美術館研修室A・Bおよびオンライン会議（Zoom）
2021年5月10日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年6月14日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年7月12日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年8月10日（火）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年9月13日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年10月18日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年11月15日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年12月13日（月）13:00-15:00	国立新美術館講堂
2022年1月11日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2022年2月10日（木）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
2022年3月7日（月）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）

画廊調査に関する意見交換会議参加者（2022年3月時点）

江上ゆか	兵庫県立美術館
坂上しのぶ	ヤマザキマザック美術館
篠原誠司	足利市立美術館
成相肇	東京国立近代美術館
三上豊	東京文化財研究所客員研究員
渡部葉子	慶應義塾大学アート・センター

画廊調査に関する意見交換会議（全6回）

2021年7月29日（木）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
2021年9月28日（火）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年11月12日（金）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年12月10日（金）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年1月18日（火）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）
2021年2月21日（月）10:00-12:00	オンライン会議（Zoom）

2022年度

日本現代アート委員会（2023年3月時点）

〔委員〕	
植松由佳	国立国際美術館主任研究員*副座長
大館奈津子	芸術公社／一色事務所

岡部美紀		2022年5月31日（火）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
片岡真実	森美術館館長*座長	2022年6月13日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
加治屋健司	東京大学大学院総合文化研究科教授	2022年6月27日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
神谷幸江	美術評論・キュレーター	2022年7月25日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
川口雅子	国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室情報資料グループリーダー	2022年8月30日（火）14:00-16:00	オンライン会議（Zoom）
成相肇	東京国立近代美術館美術課主任研究員（コレクション情報発信室長）	2022年9月27日（火）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
		2022年10月25日（火）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
[臨時委員]		2022年12月16日（金）13:00-15:00	オンライン会議（Zoom）
碓井千鶴	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー	2023年1月17日（火）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
小山登美夫	一般社団法人日本現代美術商協会（CADAN）代表理事		
今野真理子	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー		2022年度以降、収蔵情報活用分科会および画廊調査に関する意見交換会議は、国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室
一般社団法人日本芸術写真協会（FAPA）	石井代表理事、石田理事、高橋監事		の研究資料委員会および画廊調査作業部会に移管された。

[顧問]

中尾浩治	アートコレクター / アートプロデューサー
------	-----------------------

日本現代アート委員会（全7回）

2022年4月19日（金）10:00-12:00	国立新美術館およびZOOM
2022年5月30日（金）10:30-12:30	国立新美術館およびZOOM
2022年7月4日（月）10:30-12:30	国立新美術館およびZOOM
2022年8月19日（月）10:00-12:00	ZOOM
2022年10月17日（月）10:00-12:00	ZOOM
2022年12月2日（金）10:30-12:30	国立新美術館3F講堂およびZOOM
2023年3月6日（月）10:30-12:30	国立新美術館3F講堂およびZOOM

翻訳事業意見交換会メンバー（2022年3月時点）

大館奈津子	芸術公社／一色事務所
加治屋健司	東京大学大学院 総合文化研究科 教授
中嶋泉	大阪大学大学院 文学研究科 准教授
山本浩貴	金沢美術工芸大学 美術工芸学部美術科芸術学専攻 講師

翻訳事業意見交換会（全14回）

2022年4月8日（金）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
2022年4月18日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
2022年4月28日（木）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
2022年5月9日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）
2022年5月23日（月）15:00-17:00	オンライン会議（Zoom）

ワークショップのプログラムおよび参加者

2018年度

2019年3月19日（火）

10:00-11:00 (1h) イントロダクション、参加者自己紹介

◎進行 片岡真実（森美術館副館長兼チーフ・キュレーター）

11:00-13:00 (2h) セッション1：グローバル化以降、現代美術は語り得るのか？

中国、韓国、インド。グローバル化がますます加速する21世紀への変わり目に盛り上がった世界の現代美術は国家文化という文脈で紹介されがちでありながら、もはや「国」という固定した枠を通して歴史を語ることは成立しないのではないかという議論もあります。一方「グローバル」な美術史に対して疑念を呈する声も少なくありません。では次なる歴史を語るにはどういったアプローチが可能なのでしょうか。3日間の議論の土台として、世界の現状と日本の近現代美術を捉え直す試みについて意見交換しました。

◎講師 浅田彰（哲学者）×岡崎乾二郎（造形作家、批評家）

◎モデレーター アンドリュー・マークル（ライター／編集者）

14:00-15:00 (1h) 森美術館「六本木クロッシング2019」鑑賞

15:00-18:00 (3h) セッション2：日本現代美術 1980年代-現代まで

昨年以降1980年代の美術を再考する展覧会が国内の美術館でも複数開催され、現在ロサンゼルスでも80-90年代の美術に改めて注目する企画展が開催されています。先行して再評価が進んでいる具体やもの派以降、2000年代の新しい潮流や思想をどのように繋ぐことができるのでしょうか？セッション2では、関連展覧会のキュレーターや時代の証言者の発表を起点にディスカッションを進めました。

◎発表者 鶴田めるろ（インディペンデント・キュレーター）

吉竹美香（インディペンデント・キュレーター）

島敦彦（金沢21世紀美術館館長）

◎モデレーター 植松由佳（国立国際美術館主任研究員）

18:30-20:00 (1.5h) 公開キーノート・レクチャー

アメリカにおける日本のアート：キュレーター、研究者、アカティヴィストとしてのライフワークから

◎講師 アレクサン德拉・モンロー（ソロモン・R・グッゲンハイム美術館 アジア美術部門サムソン

上級キュレーター／グローバル美術部門上級アドバイザー、グッゲンハイム・アブダビ・

プロジェクト キュレトリアル部門暫定ディレクター）

◎モデレーター 片岡真実（森美術館副館長兼チーフ・キュレーター）

2019年3月20日（水）

10:00-12:30 (2.5h) セッション3：日本の戦後美術と諸外国からの視点

戦後の現代美術の複層的な発展やトランスナショナルな視点が注目されるなか、日本の戦後美術も2010年代以降、具体やもの派を中心に国際的な再評価が進んでいます。セッション3では、戦後日本美術の近年の評価、欧米を中心にした諸外国での日本現代美術の展覧会ヒストリーを議論の起点にディスカッションを進めました。

◎発表者 ルーベン・キーハン（クイーンズランドアートギャラリー 現代アジアアート部門キュレーター）

ガブリエル・リッター（ミネアポリス美術館 キュレーター兼現代アート部門長）

片岡真実

◎モデレーター 林道郎（上智大学国際教養学部教授）

13:30-16:00 (2.5h) セッション4：アーティストによるプレゼンテーション

日本の現代アートを牽引し、国内外で活躍するアーティスト4人によるプレゼンテーション。国という枠組みを超えて、"いま、ここ"に存在する社会問題と常に対峙しながら、それぞれ独自の手法で制作を続けるアーティストたちに話を聞きました。

◎発表者 風間サチコ

小泉明郎

志賀理江子

田中功起

◎モデレーター 大館奈津子（芸術公社／一色事務所）

16:00-19:00 (3h) ギャラリー、アートスペース視察

2019年3月21日（木・祝）

10:00-12:30 (2.5h) セッション5：ナショナル、トランスナショナル・アートの可能性

2日間のディスカッションを踏まえ、最後のセッションでは現代美術の実践を国家という枠組みで論じることの今日的意義、さらには国家や地域を越えたトランスナショナルなアートの解釈の可能性について、東南アジアという地域的枠組み、アジア圏域のパーソナルな交流、日米のアーティストの交流などの事例を起点に議論しました。

◎発表者 ラッセル・ストア（シンガポール・ナショナル・ギャラリー副館長）

舛田倫広（東京国立近代美術館 美術課 研究員）

パート・ワインザー＝タマキ（カリフォルニア州立大学アーバイン校美術史学部教授兼チア）

◎モデレーター 片岡真実

13:30-15:00 (2.5h) 美術館視察

21_21「ユーモアでん。／Sense of Humor」

国立新美術館「イケムラレイコ 土と星 Our Planet」

15:00-15:30 (0.5h)	<u>国際交流基金 芸術プログラム紹介</u>	トビアス・ベルガー ウェイウェイ・ウォン ユン・マ ウンジー・ジュー マーティン・ゲルマン イ・スキョン	大館 - 當代藝術 主任キュレーター インディペンデントキュレーター ポンピドゥ・センター サンフランシスコ近代美術館 キュレーター ベルギー、ゲント市現代美術館 シニアキュレーター テート・モダン、シニアキュレーター インターナショナルアートヒュンダイテリサーチセンター
◎発表者	岡部美紀 (独立行政法人国際交流基金文化事業部事業第1チーム)		
15:30-16:30 (1h)	<u>ラップアップセッション</u>		
◎モデレーター	片岡真実		
17:00-18:30 (1.5h)	<u>公開キーノート・レクチャー</u>		
再構成、伝達、そしてステレオタイプ:日本現代美術への3つのアプローチ		カティヤ・イノゼムツエフ アントン・ペロフ	ガレージ・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート キュレーター ガレージ・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート ディレクター
◎講師	デヴィッド・エリオット (紅専廠 Redtory Museum of Contemporary Art (RMCA) 副館長兼シニアキュレーター)		
◎モデレーター	林道郎 (上智大学国際教養学部教授)		



撮影:松尾宇人

参加者一覧

[登壇者／招待参加者]

樹田倫広	東京国立近代美術館 美術課 研究員
吉竹美香	インディペンデントキュレーター
ルーベン・キーハン	クイーンズランド現代アジアアートギャラリー美術館 キュレーター
ガブリエル・リッター	ミネアポリス美術館 主任キュレーター
ラッセル・ストア	シンガポール・ナショナルギャラリー副館長

[招待参加者]

金澤 韵	インディペンデントキュレーター／十和田市現代美術館学芸統括
井関 悠	水戸芸術館 現代美術センター 学芸員
近藤健一	森美術館 キュレーター
成相 肇	東京ステーションギャラリー 学芸員
岡村恵子	東京都写真美術館 事業企画課事業第二係長・学芸員
中田 耕市	金沢21世紀美術館 学芸課
橋本 梓	国立国際美術館 学芸課 主任研究員
赤井あづみ	鳥取県立博物館 キュレーター
ガブリエル・デカマス	九州大学、言語文化研究院 准教授

(敬称略、肩書きは当時)

[登壇者]

浅田彰	哲学者
岡崎乾二郎	造形作家、批評家
アレクサン德拉・モンロー	ソロモン・R・グッゲンハイム美術館 アジア美術部門サムソン上級キュレーター／グローバル美術部門上級アドバイザー、グッゲンハイム・アブダビ・プロジェクトキュレトリアル部門暫定ディレクター
島敦彦	金沢21世紀美術館 館長
風間サチコ	
小泉明郎	
志賀理江子	
田中功起	
バート・ワインザー=タマキ	カリフォルニア州立大学アーバイン校美術史学部教授兼チア
デヴィッド・エリオット	紅専廠 Redtory Museum of Contemporary Art (RMCA) 副館長兼シニアキュレーター

[日本現代アート委員会]

植松由佳	国立国際美術館
大館奈津子	芸術公社／一色事務所
片岡真実	森美術館
中尾浩治	アートプロデューサー
林道郎	上智大学
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
鷺田めるろ	インディペンデントキュレーター
岡部美紀	国際交流基金
蔵屋美香	東京国立近代美術館
蜷川敦子	Take Ninagawa

[事務局]

野崎真理、作田知樹、土井未穂、藤原羽田合同会社

[撮影]

ネーアントン合同会社 (動画)、松尾宇人 (スチル)

[同時通訳]

イディオリンク株式会社、株式会社テンナイン・コミュニケーション

2019年度

2019年11月29日（金）

9:30-10:00 (30m) イントロダクション

文化庁より（文化庁 文化経済・国際課長 清水幹治）

国立国際美術館より（国立国際美術館 館長 山梨俊夫）

文化庁アートプラットフォーム事業の取り組みについて：片岡真実（森美術館副館長兼チーフキュレーター）

10:00-10:50 (50m) プログラムの説明、参加者自己紹介

◎進行 植松由佳（国立国際美術館主任研究員）

11:00-13:30 (2.5h) セッション1：[ワークショップ] 脱植民地化と多様性

◎講師 パトリック・フローレス（フィリピン大学美術学部教授、同大学付属ヴァルガス美術館キュレーター）

小勝 禮子（美術史家、美術批評家）

ウンジー・ジュー（サンフランシスコ近代美術館）

◎モデレーター アンドリュー・マーカル（ライター／編集者）

14:30-17:00 (2.5h) セッション2：[ディスカッション] 海外発信と文化政策における課題

◎モデレーター大館奈津子（芸術公社／一色事務所）

17:15-19:45 (2.5h) セッション3：[ワークショップ] 生態系／環境

◎発表者 柳幸典（アーティスト）

パート・ワインザーラマキ（カリフォルニア大学アーバイン校）

金澤韻（十和田市現代美術館 学芸統括）

◎モデレーター 片岡真実

2019年11月30日（土）

9:00-12:30 (3.5h) 美術館、アートスペース視察

モリムラ@ミュージアム

MASK (MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA)

アートエリアB1

国立国際美術館

13:30-16:00 (2.5h) セッション4：アーティストによるプレゼンテーション

◎発表者 三島喜美代（アーティスト）

松井智恵（アーティスト）

加藤翼（アーティスト）

イム・ミヌク（アーティスト）

◎モデレーター ガブリエル・リッター

16:15-17:45 (2.5h) セッション5：[ワークショップ] 3グループに分かれてのディスカッション

◎モデレーター ①片岡真実、②アンドリュー・マーカル、③大館奈津子

18:00-19:30 (2.5h) セッション6：グループディスカッションの総括

◎モデレーター 植松由佳

2019年12月1日（日）

9:00-12:00 (3h) 美術館視察

京都国立近代美術館

重森三玲庭園美術館

京都市京セラ美術館

13:00-18:00 (5h) ラップアップセッション：今後の共同研究・展覧会開催に向けて

◎モデレーター 植松由佳

18:30-19:30 (1h) スタジオ視察

東山 アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS)



撮影：前谷開

参加者一覧

(敬称略、肩書きは当時)

[招聘参加者]

パトリック・フローレス	フィリピン大学美術学部教授、同大学付属ヴァルガス美術館キュレーター
バート・ワインザー=タマキ	カリフォルニア大学アーバイン校
ウンジー・ジュー	サンフランシスコ近代美術館
ルーベン・キーハン	クイーンズランドアートギャラリー
ガブリエル・リッター	ミネアポリス美術館
ゴン・ジョジュン	國立臺南藝術大學 藝術創作理論研究所専任副教授
ヨン・マ	ポンピドゥ・センター
マーティン・ジャーマン	インディペンデント・キュレーター
ユージン・セン	シンガポール・ナショナルギャラリー、シニアキュレーター
マリア・ブレンヴィンスカ	ザヘンタ国立美術館、キュレーター
ベ・ミョンジ	国立現代美術館、キュレーター
ドリュン・チョン	M+、副館長兼チーフ・キュレーター
遠藤水城	Vincom Center for Contemporary Art [VCCA] 藝術監督
赤井あづみ	鳥取県立博物館
井關悠	水戸芸術館
金澤韻	十和田市現代美術館 学芸統括
国枝かつら	京都市京セラ美術館 リニューアル準備室
藤田瑞穂	京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター / プログラムディレクター
馬定延	明治大学 国際日本学部特任講師
牧口千夏	京都国立近代美術館 学芸課 主任研究員
米田尚輝	国立新美術館 主任研究員

[講師]

小勝禮子	美術史家、美術批評家
柳幸典	アーティスト
松井智恵	アーティスト
三島喜美代	アーティスト
加藤翼	アーティスト
イム・ミヌク	アーティスト

[日本現代アート委員会]

植松由佳	国立国際美術館主任研究員
大館奈津子	芸術公社／一色事務所
岡部美紀	
片岡真実	森美術館副館長兼チーフキュレーター
中尾浩治	アートコレクター／アートプロデューサー
アンドリュー・マークル	ライター／編集者
山本豊津	一般社団法人日本現代美術商協会 (CADAN)

石田克哉

一般社団法人日本芸術写真協会 (FAPA) 理事

[文化庁]

清水幹治	文化経済・国際課長
林保太	同 課長補佐
藤井亮介	同 連携推進係
黒斐彩	同 専門官

[事務局]

野崎真理	国立新美術館 総務課 会計担当
土井未穂	国立新美術館 客員研究員
五十嵐三慧	国立新美術館 客員研究員
藤原さゆり	藤原羽田合同会社
羽田美恵子	藤原羽田合同会社

[スチル撮影]

前谷開

[動画撮影]

入江拓巳

[同時通訳]

イディオリンク株式会社 (北山ユリ、河本木ノ実、小寺由美、横田佳世子)
株式会社 アイビーインターナショナル

2020年度

第1回 美術分野におけるコロナ以降の海外発信、国際交流とは？

日時：2020年8月7日（金）

16:30-18:00 オンラインライブ配信（日英同時通訳あり）

配信場所：国立新美術館3階 講堂（東京都港区六本木7-22-2）

【登壇者（姓アルファベット順）】

ペーター・アンダース ゲーテ・インスティゥート東京所長

ジュード・チェンバース クリエイティブ・ニュージーランド国際事業部長

湯浅真奈美 ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

モデレーター：片岡真実 森美術館 館長／日本現代アート委員会 座長

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックを受けて、世界の美術館のほとんどが臨時休館を余儀なくされた。感染防止体制を整備しての再開以降も、国境をまたぐ活動についてはしばらく制限が続くことが予想される。「文化庁アートプラットフォーム事業」の目的でもある自国作家の海外発信は、諸外国においても重要な文化政策のひとつだが、コロナ以降の海外発信や国際交流はどのような形になるのか。ドイツ、イギリス、ニュージーランドの文化政策担当者と議論した。

申込者数：761名

ライブ視聴者数：約415名（最大）

見逃配信視聴者数：310回（8/8-9/15）



撮影：金田幸三

第2回「コロナ以降」の国際展とは？

日時：2020年9月10日（木）18:30-20:00 オンラインライブ配信（日英同時通訳あり）

配信場所：国立新美術館3階講堂（東京都港区六本木7-22-2）

【登壇者（姓アルファベット順）】

藤川哲 山口大学 人文学部 教授

ウン・マ ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ アーティスティック・ディレクター

逢坂恵理子 国立新美術館 館長／横浜トリエンナーレ 組織委員会 副委員長

モデレーター：植松由佳

国立国際美術館 主任研究員／日本現代アート委員会 副座長

アーティストや関係者の渡航、リサーチ、レジデンス、輸送・展示設営、さらには地域コミュニティとの交流などが前提となる国際展は、「コロナ以降」、そのあり方を変えていくことが予想される。この状況は、国際展の開催意義そのものについても再考を促すだろう。行政、各機関、またアーティストや美術関係者が様々な問題に直面し、現在進行形での模索や試行が続く中、国内外の国際展関係者や研究者などが議論した。

申込者数：403名

ライブ視聴者数：202名（最大）

見逃配信視聴者数：113回（9/11-9/15）



第3回「コロナ以降」の展覧会づくりとは？

日時：2020年10月29日（木）13:00-14:30 オンラインライブ配信（日英同時通訳あり）

配信場所：国立新美術館3階 講堂（東京都港区六本木7-22-2）

【登壇者（姓アルファベット順）】

原田真由美 読売新聞西部本社事業推進室長

村田大輔 カンザス大学美術史学部博士課程

横山由季子 金沢21世紀美術館学芸員

モデレーター：成相肇 東京ステーションギャラリー学芸員／日本現代アート委員会委員

コロナ禍によるソーシャルディスタンスの確保は、美術館の展覧会製作・運営の現場にも新しいチャレンジである。とりわけ美術館や主催者の主要収入源のひとつでもあるチケット収入が、入場者数の制限により減少することが想定され、ブロックバスターと呼ばれる大量動員型の展覧会ではその収支構造に既に多大な影響が出ている。このことは、日本の美術館・博物館の歴史において独自に発展してきた、マスコミ各社と共同で展覧会をつくるというあり方も浮き彫りにした。「コロナ以降」も持続可能な展覧会づくりとは、どのようなビジネスモデルか。海外の美術館のようにコレクションをうまく活用し、常設展を主眼とした美術館の可能性も含め、美術館における展覧会製作に携わる専門家が議論した。

申込者数：367名

ライブ視聴者数：184名（最大）

見逃配信視聴者数：196回（10/30-11/13）



撮影：金田幸三

第5回「コロナ以降」の美術とは？：新たな批評性の展開】

日時：2021年1月28日（木）18:30-20:00 オンラインライブ配信（日英同時通訳あり）

配信場所：SAAI Wonder Working Community（東京都千代田区有楽町1-12-1 新有楽町ビル10階）

【登壇者（姓アルファベット順）】

ジーベシュ・バグチ アーティスト、ラクス・メディア・コレクティヴ

ホー・ツーニエン アーティスト

ヒト・シュタイエル アーティスト

モデレーター：アンドリュー・マークル ライター／編集者／日本現代アート委員会委員

第4回「コロナ以降」の美術とは？アーティストの視点から見る表現・支援の課題

日時：2020年12月4日（金）18:30-20:00 オンラインライブ配信（日英同時通訳あり）

配信場所：国立新美術館3階 講堂（東京都港区六本木7-22-2）

【登壇者（姓アルファベット順）】

川久保ジョイ アーティスト

向井山朋子 ピアニスト／アーティスト

若林朋子 プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授

モデレーター：大館奈津子 芸術公社／一色事務所／日本現代アート委員会委員

コロナ禍がもたらしたニューノーマルの中、作品の展示を可能にする美術館やギャラリーという場の物理的な制限、作品輸送や渡航制限など国境を超えた人と物の移動に対する制限は、具体的な表現にどのように影響するのか。また、コロナ禍が明らかにしたグローバル化や新自由主義が浸透した経済的・社会的構造の脆弱さは、格差社会や人種差別といった既存課題を急速に浮き彫りにし、さらには気候変動問題に向けた国際社会の対応も急務となっている。今回、世界を数ヶ月で変えたパンデミックは、これから美術表現にどのように反映されていくのか。また、こうしたアーティストの活動を持続可能にする支援方法とは何なのか。アーティストの視点を中心に議論した。

申込者数：340名

ライブ視聴者数：148名（最大）

見逃配信視聴者数：190回（12/5～12/21）



撮影：金田幸三



撮影：金田幸三

[配信スタッフ]

渡辺俊介

鄭梨愛

西尾佳那

青山真也

宮澤響

小柳多央

[事務局]

野崎真理（国立新美術館 総務課 会計担当）

土井未穂（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

大久保玲奈（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

手錢和加子（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

五十嵐三慧（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

作田智樹（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

島林秀行（メディア対応）

[カメラオペレーター]

宮澤響

中村碧

河合宏樹

安藤透

[サウンドエンジニア]

なかやましようご

上條慎太郎



撮影：金田幸三

[スチル記録]

金田幸三

[アーカイブ映像制作]

青山真也

石黒萌子

[同時通訳]

第1回：北山ユリ、横田佳世子

第2回：小林晶子、横田佳世子

第3回：北山ユリ、横田佳世子

第4回：小林晶子、横田佳世子

第5回：小林晶子、横田佳世子

[デザイン]

イエン・ライナム・デザイン

[字幕／翻訳]

シリイ大智

望月麻美子（文化庁アートプラットフォーム事業 事務局）

2021年度

2022年1月28日（金）

13:00-13:30 (30m) イントロダクション【日本語・オンライン】

文化庁より、近年の文化庁制度改革について：林保太（文化庁）

カルチャー・ヴィジョン・ジャパン（CVJ）より：深井厚志（CVJ）

文化庁アートプラットフォーム事業の取り組みについて：片岡真実（森美術館）

13:30-17:00 (3.5h) セッション1：日本現代アートの国際発信・国際交流の可能性【日本語・オンライン】

今後数年間に開催される企画展について、国内美術館の計画を共有し、それらの海外巡回の可能性について探る。同時に、海外に発信したい新たな企画についても議論する。

◎モレーター 植松由佳（国立国際美術館）

◎発表者 ワークショップ参加者

17:30-20:00 (2.5h) セッション2：アーティスト・プレゼンテーション【日英同通・オンライン配信あり】

感染予防として人的接触が極端に避けられる特殊な緊急状況に、一部のアーティストは素早く応じて制作を行った。その経緯や実践についてアーティストが語った。また、パンデミックによってストレステストを受けたような状態で社会の脆弱性が浮き彫りとなったなか、アーティストが労働環境の改善に声を上げたり、新たなつながり方を模索したりする例も見受けられる。そのいくつかを紹介するとともに、社会の土壤をケアしようとする活動について話す機会とした。

◎発表者 飯山由貴（アーティスト）

大岩雄典（アーティスト）

布施琳太郎（アーティスト）

渡辺志桜里（アーティスト）

◎モレーター 大館奈津子（芸術公社／一色事務所）

成相肇（東京国立近代美術館）

2022年1月29日（土）

9:30-12:00 (2.5h) セッション3：ポストパンデミック時代における展覧会づくり・手法の可能性【日英同通・オンライン配信あり】

ポスト・パンデミック時代の実践的な展覧会メイキングの可能性について、ケーススタディー発表および論議を行った。移動・輸送に制限の生じる現在、サステナブルな展覧会制作を勘案し、1) 映像作品の保存、またデジタル化による再現・展示、2) 資料やエフェメラなどアーカイブを取り入れた展覧会の構成と充実について、以下の展覧会や活動を例とし、発表、論議した。RacialEqualityが社会的課題として求められるなかで、アジア人アーティストの紹介をどのように継続的に実現するかの一考。

◎発表者 足立アン（コラボラティブ・カタロギング・ジャパン）*リモート登壇

田坂博子（東京都写真美術館学芸員）*リモート登壇

エリカ・ペイバーニク・シミズ（ニューヨーク近代美術館）*リモート登壇

橋本梓（国立国際美術館）

◎モレーター 神谷幸江 *リモート参加

13:00-14:00 (1h) セッション4: 福岡アジア美術館を学ぶ [日本語・オンライン]

福岡アジア美術館の収集方針、コレクションの現状、展覧会歴について

福岡アジア美術館コレクション展鑑賞（自由観賞）

◎講師 ラワンチャイケン寿子（福岡アジア美術館）

14:00-16:30 (2.5h) 美術館、ギャラリー視察 [日本語・オンライン] (予定)

福岡市美術館（田部光子展、コレクションハイライト）

EUREKA（エウレカ）「長野櫻子展」

Gallery MORYTA 「九州派展」

未来の雑居ビルの未来「シリーズ木靈II 草野貴世—紺屋の明後日（こうやのあさって）」

17:00-19:30 (2.5h) セッション5: 東アジアにおける官設展覧会と日本 [日英同通・オンライン配信あり]

主として1930年代後半から1945年までの間にソウル、台北、長春で開催された官設展覧会を中心に、東アジアと日本の美術について考察する。2014年に福岡アジア美術館、府中市美術館、兵庫県立美術館で開催された展覧会「官展にみる近代美術 東京・ソウル・台北・長春」以後の研究成果を踏まえて、官設展覧会や関連する日本人の美術家の動向などを学術的・多角的に論じた。

◎発表者 喜多恵美子（大谷大学国際学部教授）*リモート登壇

王宇鵬（中国広西師範大学美術学院講師）*リモート登壇

江川佳秀（徳島県立近代美術館学芸員）

コメントーター： ラワンチャイケン寿子（福岡アジア美術館学芸員）

オブザーバー： 加治屋健司（東京大学大学院）*リモート登壇

◎モデレーター 稲賀繁美（京都精華大学国際文化学部学部長）*リモート登壇

参加者一覧

（敬称略、肩書きは当時）

【招待参加者】

服部浩之 東京藝術大学／秋田公立美術大学

岡村恵子 東京都現代美術館

崔敬華 東京都現代美術館

徳山拓一 森美術館

樹田倫広 東京国立近代美術館

米田尚輝 国立新美術館

山田裕理 東京都写真美術館

日比野民蓉 横浜美術館

鈴木幸太 ポーラ美術館

中村史子 愛知県美術館

中田耕市 金沢21世紀美術館

牧口千夏 京都国立近代美術館 *リモート参加

藤田瑞穂 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

橋本梓 国立国際美術館

馬定延 関西大学

松岡剛 広島市現代美術館

赤井あづみ 鳥取県立博物館

吉崎和彦 山口情報芸術センター

佐々木玄太郎 熊本市現代美術館

正路佐知子 福岡市美術館

趙純惠 福岡アジア美術館

2022年1月30日（日）

9:30-12:00 (2.5h) ラップアップ・セッション [日英同通・オンライン配信あり]

セッション1で出た展覧会案やその後のセッションを受け、国内参加者による意見交換を通して、海外巡回あるいは海外展の可能性や、可能な方向性をとりまとめた。

◎モデレーター 片岡真実（森美術館館長）

【登壇者】

飯山由貴 アーティスト

大岩雄典 アーティスト

布施琳太郎 アーティスト

渡辺志桜里 アーティスト

足立アン コラボラティブ・カタログ・ジャパン *リモート登壇

田坂博子 東京都写真美術館学芸員 *リモート登壇

エリカ・ペイパニク・シミズ ニューヨーク近代美術館 *リモート登壇

ラワンチャイケン寿子 福岡アジア美術館

稻賀繁美 京都精華大学国際文化学部学部長 *リモート登壇

喜多恵美子 大谷大学国際学部教授 *リモート登壇

王宇鵬 中国広西師範大学美術学院講師 *リモート登壇

江川佳秀 徳島県立近代美術館学芸員

[日本現代アート委員会]

片岡真実 森美術館館長
 植松由佳 国立国際美術館学芸課長
 大館奈津子 芸術公社／一色事務所
 岡部美紀
 加治屋健司 東京大学大学院総合文化研究科教授 *リモート参加
 神谷幸江 美術評論、キュレーター *リモート参加
 川口雅子 国立西洋美術館情報資料室長
 成相肇 東京国立近代美術館美術課主任研究員（コレクション情報発信室長）
 逢坂恵理子 国立新美術館館長

[文化庁]

林保太 文化戦略官・芸術文化支援室長／文化経済・国際課 専門官
 関谷泰弘 文化経済・国際課 連携推進係長
 島田裕子 文化経済・国際課 新文化芸術創造室

[事務局]

野崎真理 国立新美術館 会計担当
 土井未穂 アートプラットフォーム事業事務局
 五十嵐三慧 アートプラットフォーム事業事務局
 望月麻美子 アートプラットフォーム事業事務局
 手嶌和加子 アートプラットフォーム事業事務局
 岡俊一郎 事務局サポート

[配信・同時通訳]

(一社) 九州通訳・翻訳者・ガイド協会 (K-iTG)、青山真也 (配信ディレクション)

[スチル撮影]

白木世志一



撮影：白木世志一

2022年度

2022年9月23日(金・祝)

11:30-12:45 (1.25h) ウエルカムランチ [日英同通・オンライン]

文化庁よりご挨拶

日本現代アート委員会より、文化庁アートプラットフォーム事業の取り組みについて
 参加者自己紹介

13:00-16:00 (3h)

セッション1：アジア太平洋地域の新しいネットワーク [日英同通・オンライン配信あり]

2021年に待望の開館を迎えた香港のM+をはじめとする、過去5年間に開館・拡張したアジア太平洋地域の
 新美術館とその思想について、各地域の事例を学び議論する機会とする。そして国際交流基金のアジアネット
 ワーク構想を振り返りながら、アジア太平洋地域の新しい国際ネットワークについて考察した。

◎発表者 皮力 (M+ シニアキュレーター)

パク・ジュウォン (韓国国立現代美術館)

古市保子 (元 国際交流基金アジアセンター 美術コーディネーター)

◎モレーター 植松由佳

16:30-19:30 (3h)

セッション2：アーティスト・プレゼンテーション [日英同通・オンライン配信あり]

文化庁アートプラットフォーム事業では、トランスナショナルな観点から持続的なアートの発展を目指してきた。
 そうした観点を踏まえ、国内外で制作、発表を行っているアーティスト4組に話を聞いた。ジェンダー、ナショ
 ナルアイデンティティといった社会における固定概念に搖さぶりをかけ、多様なメディアを用いながら、領域横
 断的な作品制作を続けている彼女・彼らのこれまでの作品を通じた実践と進行中のプロジェクトについて聞く機
 会とした。

◎発表者 スクリプカリウ落合安奈 (美術家)

潘逸舟 (美術家)

MES (アーティスト・デュオ)

百瀬文 (アーティスト)

◎モレーター 大館奈津子、成相肇

2022年9月24日（土）

09:30-12:30 (1.25h) セッション3：海外における近現代日本美術の展示と言説 [日英同通・オンライン配信あり]

明治以来、海外とりわけ欧米に向けて、日本は博覧会や展覧会あるいは書籍を通して自国の美術を紹介してきた。そのように発信された近現代日本美術の展示と言説は国外においてどのように受容されたのか。文化庁アートプラットフォーム事業では近現代日本美術に関する重要文献を翻訳してきた。この5年間の活動を歴史的な視点で考察するために、国外における近現代日本美術の展示と言説について、その発信と受容のあり方を歴史的に考察した。

◎発表者 パート・ワインザー＝タマキ（カリフォルニア大学アーヴィング校教授）

「アメリカにおける現代日本美術展の反響 1986-1990」

ガブリエル・リッター（カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授）

「「夏への扉」から「ワインター・ガーデン」へ 日本のマイクロポップ世代のグローバルな受容」

チエルシー・フォックスウェル（シカゴ大学准教授）

「アメリカの美術館における戦後・現代日本美術展覧会の近年の傾向 成長と多様性の促進
を見据えて」

◎モデレーター 加治屋健司

13:30-16:00 (2.5h) 国際芸術祭「あいち 2022」愛知芸術文化センター会場視察 [オンライン]

16:30-19:30 (3h) セッション4：国際的ダイアログを生み出すために、そのケーススタディ [日英同通・オンライン配信あり]

美術、文化の発信は、展覧会、芸術祭などのプログラム開催、コンテンツの書籍化やウェブサイトの構築、レクチャーやアカデミックなコースの実施など、様々なメディア・方法によって行うことが可能であり、過去5年の文化庁アートプラットフォーム事業の活動においても複数の事業を複合的に推進してきた。一方向的な発信から、それぞれのコンテンツが、しっかりと受け止められ、双向方向的な活発なダイアログへと展開するために、受け手を見据えた発信や手法、アウトーチが重要となる。本セッションでは、国際的なダイアログを生み出すために、誰に向け、どんな活動が行われているか、美術館、ビエンナーレ／芸術祭、アカデミーなど異なるプラットフォームでの事例紹介から、文化発信と受容の課題について話し合いを深めた。

◎発表者 アデ・ダルマワン（ruangrupa 設立メンバー・スポーツマン／documenta15ディレクター）

「Lumbung: Documenta 15—a space as a living room for citizens」

中村史子（愛知県美術館学芸員）

「誰と対話するの？：『国際芸術祭あいち』の場合」

崔敬華（東京都現代美術館学芸員）

「「いまここ」の拡張に向けて」

キャロル・インハ・ルー（ヨコハマトリエンナーレ 2023 アーティスティック・ディレクター）

「International Exchanges That Prioritize Specific Experiences」

◎モデレーター 神谷幸江

2022年9月25日（日）

09:30-12:15 (3.25h) ラップアップ・セッション [日英同通・オフライン]

◎モデレーター 片岡真実

12:30-13:30 (2.5h) クロージング・ランチ [日英同通・オフライン]

◎進行 片岡真実、文化庁、事務局

13:30-19:00 (5.5h) 国際芸術祭「あいち 2022」視察 [オフライン]

グループに分かれ、国際芸術祭あいち2022の主会場である一宮市、常滑市、有松地区（名古屋市）のいずれかの会場を視察。

参加者一覧

(敬称略、肩書きは当時)

[登壇者／招待参加者]

皮力	M+ シグ・シニアキュレーター兼学芸統括
パク・ジュウォン	韓国国立現代美術館
古市 保子	元 国際交流基金アジアセンター 美術コーディネーター
スクリプカリウ落合 安奈	美術家
潘 逸舟	美術家
MES	アーティスト・デュオ
百瀬 文	アーティスト
チャルシー・フォックスウェル	シカゴ大学准教授
バート・ワインザーニタマキ	カリフォルニア大学アーヴィング校教授
ガブリエル・リッタ	カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授
アデ・ダルマワン	ruangrupa 設立メンバー・スポーツマン／documenta 15 ディレクター *リモート参加
キャロル・インハ・ルー	ヨコハマトリエンナーレ 2023 アーティスティック・ディレクター
崔 敬華	東京都現代美術館学芸員
中村 史子	愛知県美術館 学芸員／国際芸術祭あいち 2022 キュレーター

[招待参加者]

ルーベン・キーハン	クイーンズランド・アートギャラリー ブリスベン近代美術館アジア現代美術キュレーター
服部 浩之	東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻 准教授
金井 直	信州大学人文学部 教授
馬 定延	関西大学
熊倉 晴子	森美術館 アシスタント・キュレーター
桝田 倫広	東京国立近代美術館 主任研究員
尹 志慧	国立新美術館 特定研究員
山田 裕理	東京都写真美術館 学芸員
大塚 真弓	横浜美術館 主任学芸員／主任エデュケーター
鈴木 幸太	ポーラ美術館 学芸員
能勢 陽子	豊田市美術館
中田 耕市	金沢21世紀美術館
牧口 千夏	京都国立近代美術館 主任研究員
藤田 瑞穂	京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター
赤井 あづみ	鳥取県立博物館
松岡 剛	広島市現代美術館 主任学芸員
レオナルド・バルトロメウス	山口情報芸術センター キュレーター
佐々木 玄太郎	熊本市現代美術館 学芸員

[日本現代アート委員会]

片岡 真実	森美術館館長
-------	--------

植松 由佳

国立国際美術館学芸課長

大館 奈津子

芸術公社／一色事務所

岡部 美紀

東京大学大学院総合文化研究科教授

神谷 幸江

美術評論・キュレーター

川口 雅子

国立アートリサーチセンター（仮称）設置準備室情報資料グループリーダー

成相 肇

東京国立近代美術館美術課主任研究員（コレクション情報発信室長）

逢坂 恵理子

国立新美術館長

長屋 光枝

国立新美術館学芸課長

[文化庁]

林 保太

文化戦略官・芸術文化支援室長／文化経済・国際課 専門官

関谷 泰弘

文化経済・国際課 連携推進係長

島田 裕子

文化経済・国際課

[事務局]

野崎 真理

国立新美術館総務課会計担当

土井 未穂

アートプラットフォーム事業事務局

五十嵐 三慧

アートプラットフォーム事業事務局

望月 麻美

アートプラットフォーム事業事務局

手錢 和加子

アートプラットフォーム事業事務局

原 三枝

事務局サポート

[撮影・配信]

青山 真也（配信統括）、渡辺俊介（配信）、宮澤響（配信）、伊邊夢（配信）

岩波芳輝（映像）、中野隆一（映像）、新美太我（映像）

荒木優光（音響）、植松 幸太（音響）

原田将平（ドキュメント映像）

佐藤拓人（スチル撮影9/23）

仙石健（.new）（スチル撮影9/24-25）

[通訳]

イディオリンク株式会社

日本コンベンションサービス株式会社



撮影：仙石健（.new）

オンライン出版された新訳文献リスト

①日本のアートとフェミニズム Feminism and/in Japanese Art

	著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
1	小勝禮子 「戦後の『前衛』芸術運動と女性アーティスト1950-60年代」	『前衛の女性1950-1975』展覧会図録 栃木県立美術館、2005年、9-17頁	ニーナ・ホリサキ=クリステンス	井元智香子	アンドリュー・マークル	中嶋泉/岡俊一郎	ダニエル・ゴンザレス
2	光田由里 「平日の昼間の公園」	『構造』第12号、1997年10月、26-36頁	河野晴子	岡田紀子	ヒントン実結枝	大館奈津子	
3	岸本清子 「資料：岸本清子1983年参議院選挙政見放送（NHKラジオ放送）」	ネオ・ダダから21世紀型魔女へ：岸本清子の人と作品	増渕愛子	委員	サム・ベット	中嶋泉/原田遠	セラ・サンプター
4	三岸 節子 「女流画家の歴史」	BBBB (通号4)	小川紀久子	中嶋泉	ヒントン実結枝	中嶋泉/原田遠	セラ・サンプター
5	北原恵 「日本の美術界における『たかが性別』をめぐる論争」	インパクション 110号	加野彩子	内海潤也	Meg Taylor	大館奈津子/原田遠	
6	小田原のどか 「なぜ女性の大彫刻家は現れないのか」	『美術手帖』(2021年8月)	加藤久美子	中嶋泉	メグ・ティラー	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス
7	小田原のどか×百瀬文 対談（前編） 「女性アート・コレクティブの現在。シリーズ：ジェンダーフリーは可能か？（10）」	ウェブ版美術手帖 2019年11月30日	増渕愛子	大館奈津子	キャット・アンダーソン	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス
8	吉良智子 戦争美術展における「銃後」の図像	20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究（科研報告書）	池田安里	井元智香子	ニック・ホール	中嶋泉/原田遠	セラ・サンプター
9	笠原美智子 「やなぎみわ作品に見る現代日本女性の意識」	『ジェンダー写真論1991-2017』、里山社、2018	河野晴子	大館奈津子	ヒントン実結枝	大館奈津子/西川ゆきえ	池田ケイ恵理子
10	富山妙子、鳴田美子、レベッカ・ジェニソン 「証言とアート」	現代思想 25 (10) 1997-09	レベッカ・ジェニソン	山本浩貴	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス

②アジアの中の日本 Japan in Asia

	著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
1	古川美佳 「近年、日本における韓国美術の受容とその意識」	『コリア研究』第9号 立命館大学コリア研究センター 2018年 pp. 51-64	ペニー・ベイリー	鍵谷怜	エリーシャ・オライリー	加治屋健司/鍵谷怜	池田ケイ恵理子
2	後小路雅弘 「日本軍政と東南アジアの美術」	『哲學年報』72輯 2013年3月 九州大学大学院人文科学研究院	ロー・シーリン	後小路雅弘	ヨンシャン・ガオ	加治屋健司/鍵谷怜	池田ケイ恵理子
3	針生一郎 2002アルン展の意義 —わたしの韓国・朝鮮文化交流史から—	『2002アルン展—在日コリアン美術を起点として』 AREUM Art Network、2002年、6p-8p"	ダリル・ジングウェン・ウイー	馬定延	松山直希	加治屋健司/鍵谷怜	池田ケイ恵理子
4	黒田雷児 「アジア現代美術『ブーム』の表と裏」	『季刊アートエクスプレス』no.6、 1995年春号	ロー・シーリン	黒田雷児	マイク・フー	山本浩貴	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
5	インタビュー 蔡國強氏に聞く 「芸術の国際化と作家の立場」	シュトルム第7号 (1996年,pp.106-115.)	ダリル・ジングウェン・ウイー	武田将明	松山直希	加治屋健司/原田遠	セラ・サンプター

③環境／社会／制度 State and Ecology

1	藤田直哉 「前衛のジンビたち—地域アートの諸問題」	『すばる』2014年10月号、240-253頁 『地域アート—美術／制度／日本』 再掲 11-31頁	ジャスティン・ジェスティ	奥村雄樹	サム・ベット	加治屋健司	アンドリュー・マークル
2	岡崎乾二郎、田崎英明、榎木野衣 「世界の賭金・歴史の配当」	『FRAME』2号、1991年、5-17頁	アンドリュー・マークル	上崎千	山形亜紀子	加治屋健司/半田ゆり	セラ・サンプター
3	川俣正 「マイノリティとしての現代美術」	『アートレス』2001年、フィルムアート社、 166-187頁	河野晴子	サム・ベット	サム・ベット	大館奈津子/岡俊一郎	ダニエル・ゴンザレス
4	中谷美二子 「空気と水」	『美術手帖（特集：EXPO'70人間と文明 —EXPO'70演出の技術）』 美術出版社、1970年7月、105-108頁	中井悠	アンドリュー・マークル	アンドリュー・マークル	大館奈津子/岡俊一郎	池田ケイ恵理子

著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
5 多木浩二 「御真影」の誕生	『天皇の肖像』岩波新書、1988年、113p-153p	ジャイルス・マリー	調文明	山形亜紀子	大館奈津子/半田ゆり	セラ・サンプター
6 堤清二 「時代精神の根拠地として」	『日本現代美術の展望』西武美術館 1975年	サム・ベット	加治屋健司	アンドリュー・マークル	加治屋健司/半田ゆり	セラ・サンプター
7 赤瀬川原平 「資本主義リアリズム論」	『オブジェを持った無産者』	ウィリアム・マロッティ	上崎千	アンドリュー・マークル	加治屋健司/半田ゆり	セラ・サンプター
8 菊畠茂久馬 「フジタよ あなたは……太平洋戦争記録画からの考察」	美術手帖、1972年3月号	ジャスティン・ジェスティ	池田安里	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴/鍵谷怜	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
9 馬定延 「三上晴子“Suitcases 1993 2020”」	Relations	岡田紀子	辻宏子	松山直希	大館奈津子/原田遠	池田ケイ恵理子

④写真とメディア Photography and Media

1 中村史子 「裾としての鷹野隆大 『おれとwith KJ#2 (2007)』」	愛知県美術館研究紀要21号	ダリル・ウイー	調文明	グレッグ・アダムソン	大館奈津子/半田ゆり	
2 大辻清司 「主義の時代は遠ざかって」	カメラ毎日 1968年6月号	エリック・ルオン	富山由紀子	ヒントン実結枝	加治屋健司/半田ゆり	セラ・サンプター
3 山口勝弘 「映像へ離脱してゆく世界：福島秀子 1948-1988」	美術手帖44 (657)、美術出版社、1992年8月、131-142頁	河野晴子	中嶋泉	アンドリュー・マークル	中嶋泉/半田ゆり	
4 出光真子 「無意識を観察する」	イメージフォーラム 1981年1月号 No.3 「ビデオ宣言」	ニーナ・ホリサキ・クリステンス	中嶋泉	アンドリュー・マークル	中嶋泉/半田ゆり	セラ・サンプター
5 長島有里枝 「『誰もやらないから、自分でやるしかない』 写真家長島有里枝が言葉で語り続ける理由」	Fashion Post https://fashionpost.jp/portraits/180108	ポリー・バートン	長島有里枝	ヒントン実結枝	大館奈津子/半田ゆり	ダニエル・ゴンザレス

著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
6 秋山邦晴 「草月アートセンター」	『文化の仕掛け人—現代文化の磁場と透視図』青土社、1985年、pp. 445-498	足羽アリス貴和子	松井勝正	ヨンシャン・ガオ	加治屋健司/原田遠	セラ・サンプター
7 名取洋之助 「記号としての写真」（フルバージョン）	『写真の読みかた』岩波新書、1963年、pp.46-74	馬渕花菜子	調文明	マイク・フー	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス
8 吉岡洋 「メディアアートという文化」	『美術フォーラム21』30号（2014年11月）	池田ケイ恵理子	山本浩貴	松山直希	加治屋健司/西川ゆきえ	セラ・サンプター

⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites

1 東野芳明 「さようなら読売アンデパンダン展」	『美術手帖』美術出版社、1964年4月、11-14頁	アンドリュー・マークル	上崎千	ウイリアム・マロッティ	加治屋健司/岡俊一郎	セラ・サンプター
2 小勝禮子 「日本の美術館におけるジェンダーの視点の導入をめぐって」	イメージ&ジェンダー vol.7、pp.14-21 2007年	由本みどり	加野彩子	ガス・ツェケニス	中嶋泉/原田遠	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
3 正木基 「野を開く鍵」	美術手帖 1992年11月号	ダリル・ジングウェン・ウイー	上崎千	松山直希	加治屋健司/原田遠	セラ・サンプター
4 小池一子 「さなぎ、羽ばたく」	空間のアウラ 白水社、1992年、pp. 24-38	キャロライン・エルダー	丸山美佳	トム・ケイン	大館奈津子/鍵谷怜	ダニエル・ゴンザレス
5 ヨシダ・ヨシエ 「松沢宥・闇を透徹する共同体」	『美術手帖』1972年11月号	富井玲子	松山直希	松山直希	山本浩貴	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
6 「美学校史 開校から2019年まで」	『美学校 1969-2019 自由と実験のアカデメイヤ』より	キャロライン・エルダー	山本浩貴	マイク・フー	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス

著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
1 「ハイレッド・センター（エンサイクロペディア・ハイレッド・センタニカより抜粋）」	美術手帖、特集・集団の波、運動の波、1971年10月号 Vol.23 No.347、pp.70-71	富井玲子	アンドリュー・マークル	アンドリュー・マークル	加治屋健司/半田ゆり	セラ・サンプラー
2 梅津庸一「批評 パープルームの条件」	REAR=リア:芸術批評誌36、2016年、pp.138-142	ポリー・バートン	良知曉	アンドリュー・マークル	大館奈津子/岡俊一郎	ダニエル・ゴンザレス
3 高橋英美子「混沌のなかから—『越境する女たち21』メイキング・レポート」	あいだ（62）、2001、pp. 9-16	内山もにか	井元智香子	松山直希	中嶋泉/原田遠	セラ・サンプラー
4 山口勝弘「実験工房」	『前衛の女性1950-1975』展覧会図録 栃木県立美術館、2005年、9-17頁	ネットルトン太郎	調文明	グレッグ・アダムソン	加治屋健司/原田遠	池田ケイ恵理子
5 平野重光「<集団による美術>とは何か?」 ・開催にあたって ・6組へのアンケート	「1953年ライトアップ:新しい戦後美術像が見えてきた」、1996年、目黒区美術館	平野+開催にあたって: マット・トライヴォ アンケート:富井玲子	荒木慎也（平野+開催にあたって） アンドリュー・マークル（アンケート）	アンドリュー・マークル	加治屋健司/原田遠	セラ・サンプラー
6 鈴木勝雄「集団の夢——五〇年代を貫く歴史的パトス」	「京都ビエンナーレ」 京都市美術館・1973年	松山直希	松井勝正	ヨンシャン・ガオ	加治屋健司/鍵谷怜	池田ケイ恵理子
7 小山田徹「ダムタイプ 自己と他者をめぐる考察からコミュニケーションの未来を探る」	『実験場 1950s』展、東京国立近代美術館、2012年、pp10-39	ジュリエット・礼子・ナップ	吉田美弥	松山直希	山本浩貴/鍵谷怜	ダニエル・ゴンザレス
8 白川昌生「円環の彼方へ」	『情報デザインシリーズ vol. 6 情報の宇宙と変容する表現』（京都:京都造形芸術大学、2000年）、58-69頁	ダリア・メリニコヴァ	調文明	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴	池田ケイ恵理子
9 瀧口修造「公募団体は無用か」	読売夕刊 1961年9月20日	イグナシオ・アドリアソラ	松井勝正	松山直希	山本浩貴	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
10 吉良智子「歴史の中の女性コレクティヴとひとつひとつ」	『女が5人集まれば皿が割れる』、2021年9月	内山もにか	後藤桜子	松山直希	中嶋泉/原田遠	セラ・サンプラー

⑦評論家 Critics

	著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
5	建島哲 「生成するタブロー—具体美術協会の1950年代」(1985)	「絵画の嵐・1950年代」展カタログ (国立国際美術館、1985年、14-19頁)	眞峯朋子	平井章一	ヨンシャン・ガオ	中嶋泉/鍵谷怜	
6	光田由里 「野島康三 写真の存在論」	野島康三写真集 (赤々社 2009 pp.153-181)	河野晴子	調文明	ヒントン実結枝	山本浩貴/鍵谷怜	ダニエル・ゴンザレス
7	中原佑介 「『見せもの』の批評」	『文学』vol. 24 (岩波書店 1956年、1485-1492頁)	イグナシオ・アドリアソラ	上崎千	松山直希	山本浩貴/鍵谷怜	池田ケイ恵理子
8	日向あき子 「異星のモラル—少女マンガの魅力」	『伝統と現代』48号、1977年9月	フレデリック・L・ショット	日高利泰	ペス・ケーリ	山本浩貴/鍵谷怜	ダニエル・ゴンザレス
9	笠原美智子 「写真とジェンダー—石内都と神蔵美子の作品に触れて」	『美術とジェンダー 非対称の視線』 鈴木杜幾子、千野香織、馬渕明子編	内山もにか	井元智香子	Dylan Kerr	大館奈津子/西川ゆきえ	セラ・サンプター

⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings

1	芥川紗織 「芥川紗織日記」	『芸術生活』1973年9月、pp.15-21	黒田理沙	由本みどり	メグ・ティラー	中嶋泉/西川ゆきえ	ニーナ・ホリサキ=クリステンズ
2	高松次郎 世界拡大計画 不在性についての試論 (概説)	『デザイン批評』、1967年6月、pp.60-67	富井玲子	アンドリュー・マークル	アンドリュー・マークル	加治屋健司/西川ゆきえ	セラ・サンプター
3	大竹伸朗 「ふりむけば便所」	『既にそこにあるもの』、筑摩書房、2005年、pp.51-54	アルフレッド・バーンバウム	光山清子	メグ・ティラー	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス
4	岡本太郎 「繩文土器論」	みづゑ(558) 1952年2月	ジャスティン・ジェスティ	山本浩貴	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴	池田ケイ恵理子
5	石内都 「無限の黒へ」	『モノクローム』、筑摩書房、1993年、pp.5-11	内山もにか	大久保エマ	キャット・アンダーソン	山本浩貴	

	著者名・論文名	掲載媒体	翻訳	クロスチェック	校閲	紹介文（日本語）	紹介文（英訳）
1	荒木慎也 「反・石膏デッサン言説」	『石膏デッサンの100年 石膏像から学ぶ美術教育史』(2016年、アートダイバー)	ベンジャーゲ	荒木慎也	松山直希	山本浩貴	池田ケイ恵理子
2	北川民次 「私の美術教育」	『北川民次美術教育論集 美術教育とユートピア(下巻)』(創風社、1998年)所収／初出:『教育美術』1938年3月号	パート・ワインザーラマキ	山本浩貴	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス
3	降旗千賀子 「ワークショップ—日本の美術館における教育普及活動」	Fuji Xerox Art Bulletin 2008, pp. 4-33	ダリル・ジングウェン・ウイー	塙田美紀	マイク・フー	山本浩貴	ダニエル・ゴンザレス

⑩80年代 The 1980s

1	近藤幸夫 「1980年代の日本の現代美術にみるインスタレーションとアイデンティティーの問題」	近藤幸夫美術評論集／初出:第32回国際美術評論家連盟日本大会「トランジション—変貌する社会と美術—」美術評論家連盟報告書、1998年9月	池田ケイ恵理子	山本浩貴	松山直希	山本浩貴	池田ケイ恵理子
2	坂上しのぶ 「80年代考～80年代 ニューウェーブをめぐって」	『所沢ビエンナーレ・プレ美術展 引込線』カタログ掲載うち抜粋	アラン・グリースン	坂上しのぶ	ヨンシャン・ガオ	山本浩貴	

著者名・論文名	掲載媒体	テーマ	著者名・論文名	掲載媒体	テーマ
1 曹良奎 「マンホール画家北朝鮮に帰るの記」	芸術新潮1960年11月 pp.182-190	②アジアの中の日本 Japan in Asia	12 矢口國夫 「求められる国際性と創造性」	美術手帖 : monthly art magazine 47 (705)、 1995年4月	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites
2 【鼎談】アジア美術館ができるまで	『アジアの美術 福岡アジア美術館のコレクションとその活動』(2002年)	②アジアの中の日本 Japan in Asia	13 宮川淳 「影の侵入」	『絵画とその影』みすず書房、2007年	⑦評論家 Critics
3 稲賀繁美 「化粧としての翻訳」		②アジアの中の日本 Japan in Asia	14 植木野衣 「後美術論第二部・流浪篇:第一回 再考 『悪い場所』(前編)」	美術手帖 2014年3月号、174p-192p	⑦評論家 Critics
4 曹良奎、針生一郎 「対談 ある作家の場合 北朝鮮に帰った曹良奎」	美術ジャーナル15号、1960年12月	③環境／社会／制度 State and Ecology	15 東野芳明 「新しい日本美術展への提唱」	『美術手帖』154 (1959年3月)、17-19	⑦評論家 Critics
5 清水健人 「コンニチのメディアークとインスタレーション」	2018	④写真とメディア Photography and Media	16 岡崎乾二郎 「聞こえない旋律を聴く」	Web ちくま、2019年	⑦評論家 Critics
6 西本雅実 「原爆記録写真—埋もれた史実を検証する」	『photographers' gallery press』12号 (2014年11月)	④写真とメディア Photography and Media	17 ヨシダ・ヨシエ『原爆の図』を背負って (芸術書院) 2005	(「ヨシダ・ヨシエ全仕事」) (芸術書院) 2005	⑦評論家 Critics
7 岩谷國士 「瀧口修造の新しい季節— タケミヤ画廊の終幕まで」	「第26回オマージュ瀧口修造展 瀧口修造と タケミヤ画廊」カタログ	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites	18 吉原治良 「抽象絵画の余白」	『墨美』1953	⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings
8 東野芳明 「南画廊」	『文化の仕掛け: 現代文化の磁場と透視図』、 1985年	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites	19 村上隆	『芸術起業論』、幻冬舎文庫、 2006年、pp.10-17	⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings
9 萬木康博 「1950年代—その暗黒と光芒」	『1950年代: その暗黒と光芒』、東京都美術館	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites	20 高嶺格	『在日の恋人』、河出書房新社、 2008年、pp.9-18	⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings
10 斎藤泰嘉 「現代美術の動向II—反芸術的傾向を中心に」	『1960年代: 多様化への出発』、東京都美術館	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites	21 ホンマエリ (キュンチョメ) 「声枯れるまで」	『新潮』2020年2月、176-177頁	⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings
11 斎藤泰嘉 「現代美術の動向II—反芸術的傾向を中心に」	『1970年以降の美術: その国際性と独自性』、 東京都美術館特別展図録、1984	⑤展覧会・出来事・場 Exhibitions, Events, and Sites	22 安谷屋正義 「沖縄画壇の展望とその将来」	『新沖縄文学』5号 (1967年春季号) / 『安谷屋正義展 モダニズムのゆくえ』 (沖縄県立博物館・美術館、2011)	⑧アーティスト・ライティング Artists' Writings

著者名・論文名	掲載媒体	テーマ	著者名・論文名	掲載媒体	テーマ	
23 島田美子 「現代思潮社・美学校のなりたち」	『美学校 1969-2019 自由と実験のアカデメイア』(2019年、晶文社)	⑨学校・教育 Art Schools and Education	34 高間準 「ポリモード宣言」	『ペリカンクラブ』13号(1983年5月)	⑩80年代 The 1980s	
24 岡崎乾二郎 「われ、またアート・ステュディウムに— 第一回：歴史的に考えてみる、 第二回：実験モデルによる演習とその手法」		⑨学校・教育 Art Schools and Education	35 横木野衣 「アール・ポップから始める—80年代の美術をめぐって」	『美術手帖』2019年6月号・「80年代・日本のアート」特集	⑩80年代 The 1980s	
25 富山妙子 「戦時下の美術学校」	『アジアを抱く 画家人生 記憶と夢』(岩波書店、2009年)	⑨学校・教育 Art Schools and Education	36 篠原資明 「超少女身辺宇宙」	『美術手帖』1986年8月号	⑩80年代 The 1980s	
26 村上隆、保科豊巳、海老澤功 「日本の美術教育徹底討論」	美術手帖 2009年10月	⑨学校・教育 Art Schools and Education	*「翻訳予定の文献」については、文化庁アートプラットフォーム事業で翻訳すべき文献として選書された文献のうち、国立アーティサーチセンターに翻訳事業として引き継がれる予定の文献			
27 宇佐美圭司 「1974年演習ゼミ」		⑨学校・教育 Art Schools and Education				
28 榎倉康二 「反射板としての空間」	『美術手帖』1977年12月	⑨学校・教育 Art Schools and Education				
29 森本岩雄 「京都芸大の共通基礎教育」・高井一郎 「昭和48年度京都芸大共通ガイダンス実技教育について」	『美』39号、京都芸大美術教育研究会、1973年	⑨学校・教育 Art Schools and Education				
30 辰野登恵子 「絵画のイメージ」(インタビュー河添剛)	『POSITION』1号(1984年10月)	⑩80年代 The 1980s				
31 尾野正晴 「若い画家への手紙」	『A&C』4号(1988年1月)	⑩80年代 The 1980s				
32 榎本了毫 「描くことの快樂、見せることの欲望」	『美術手帖』37巻552号(1985年11月)	⑩80年代 The 1980s				
33 前本彰子 「私を見ているワタシ」	美術手帖 1983年11月	⑩80年代 The 1980s				

海外出版

KuroDalaiJee

『Anarchy of the Body: Undercurrents of Performance Art in 1960s Japan』

出版社: Leuven University Press/ISBN: 9789462703537

刊行: E-books: 2023年2月15日

書籍(紙): 2023年2月23日(英国、EU)、2023年4月15日(米国)

翻訳

第一部: アンドリュー・マークル(翻訳)

第二部: 嶋由美子(翻訳)、足羽貴和子アリス(エディトリアル・アシスタント: 全章)

ジェイソン・ベックマン(リライト: 6~9章)

ジェニー・プレストン(リライト: 7~10章)

第三部: ダニエル・ゴンザレス(翻訳: 11~13、18~19章)

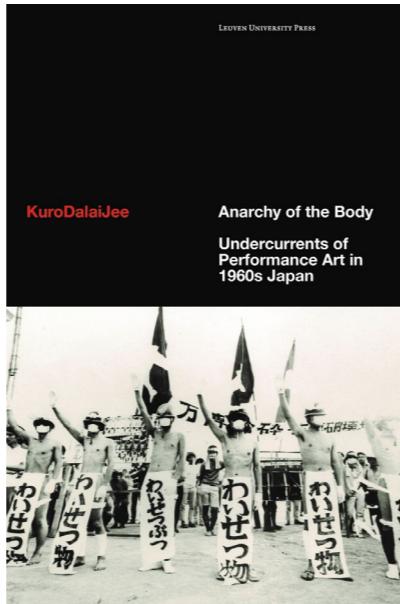
ジェニー・プレストン(翻訳: 14章)

ジャイルズ・マリー(翻訳: 15章)

田中クレア(翻訳: 16~17章)

第四部: 田中クレア(翻訳)

校閲: ジェイソン・ベックマン



Kitazawa Noriaki, Kuresawa Takemi, and Mitsuda Yuri and introduction by Kajiya Kenji

『History of Japanese Art after 1945: Institutions, Discourse, Practice』

出版社: Leuven University Press/ISBN: 9789462703544

刊行: E-books: 2023年2月15日

書籍(紙): 2023年2月23日(英国、EU)、2023年4月15日(米国)

翻訳

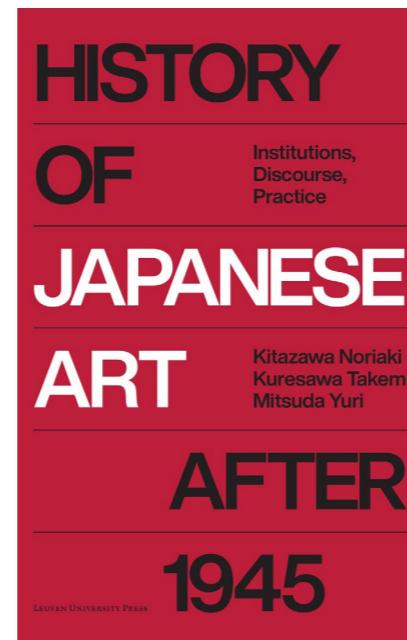
序文: セラ・サンプター

1章: 足羽貴和子アリス

2章: ケン・シマ

3章: アリエル・アコスタ(前半)、セラ・サンプター(後半)

校閲: トム・ケイン



文化庁アートプラットフォーム事業 報告書

発行日 2023年3月31日

編集・発行

文化庁アートプラットフォーム事業 事務局(国立新美術館)

<https://artplatform.go.jp/>

デザイン

岡本健デザイン事務所

©2023 Art Platform Japan

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。